

森 有 礼 研 究

第二 森有礼とキリスト教

林 竹 二

序章 森有礼と元田永孚

森はクリスチャンであったか。

これは特に戦前に多く論じられた問題であった。

森の「同情者」は、いろいろの証拠をあげて、森はクリスチャンではなかった、彼らの知る「証拠」に本づけば、そんな筈はないと主張した。⁽¹⁾

だがこれは実は答えるに極めて困難な問題であるのみか、それを問題にすることに、殆んど意味はないと私は考える。森がキリスト教徒であったかどうかという問題に意味があるとすれば、それはその信仰が森に何を与えたかにつきる。

彼が、キリスト教に少くも一旦は入信した人であったことは動かない事実である。森の文部省入りや、文相就任に対して、執拗に反対した元田が、森を「信者」とであると信じたことには、たしかな根拠があった。

森と元田との対立は、原理的なものであった。この点吉田清成の森の文部省入りに対する反対が、極めて人間的なものであった⁽²⁾とは、著しく異なる。元田はその「教学観」にもとづいて、キリスト教徒と彼の信ずる森が、文教の府の責任ある地位につくことを許せなかったのである。

元田永孚の「古稀之記」の記事は、この間の消息を伝えて余すところがない。

(伊藤宮内卿)時々余ニ対シテ談論セリ。余其識見智慮ニ服セリ。但宗教ノ一事外国交際上、已ムヲ得ザルノ事情ニ出ルト雖モ宗教ノ害ヲ見ル確信ヲ置キ難ク、特ニ森有礼参事院議官ヨリ文部省御用掛ヲ兼ネ太甚憂フベキヲ以テ、直ニ三条大臣、有栖川左大臣宮ニ至リ、痛切ニ森ノ教育ニ関スルハ其従来宗教家ニシテ将来ノ国害ヲ招ク 測ルベカラザルノ理由ヲ建言セリ。伊藤之ヲ聞テ余ニ向ッテ詰論ス。余森ノ宗教家タル其聞ク所ノ徴証ヲ挙テ之ヲ論ジ、且其才ノ用フベキハ他ノ官ニ転ジテ可ナリ、唯教育ニ入ルベカラザ

(1) たとえば木村匡の「故森子爵の逸事について」(『国家教育』第22号明治27年1月)。

(2) 拙稿森有礼研究第一「森駐米代理公使の辞任」(東北大学教育学部研究年報、第15集)、18頁以下参照。

ルノ理ヲ論ジタリ。伊藤明答無ク、唯言フ、森薩人ノ有力家、妄ニ使用シ難シ、且其宗教モ鮫島註（尚信）ノ如ク深く信ズル者ニ非ズ、吾兄深く患ヘズシテ可ナリト、論終ニ合ハズシテ止メリ。（元田永孚文書）

（註） T・Lハリスの伝記を書いたカスバート（Cuthbert, Arthur A.）はハリスの門下となった20人の日本人のうち、特に有力な（長沢鼎は別格）ものとして鮫島と森をあげ、就中鮫島を One of the truest hearted of them とし、かつその生涯の終りの日にいたるまで心底からハリスと新生社への忠誠を保ちつづけた、とのべている。（同書一九二頁）

伊藤が森を文相に起用しようとした時にも、元田は反対をくり返した。天皇も当惑するくらい、それは執拗なものであった。森が文相に就任した後も、元田は森の宗教を問題にしつづけた。明治20年頃に書かれたと推定される「森文相に対する教育意見書」は、彼の森文相にたいする不信の根拠を明確にする。

……足下ノ僕ヲ見ルヤ、漢学者流ヲ以テ之ヲ目ス。僕固ヨリ然リ、然ドモ僕ハ故長岡監物、横井平四郎ノ徒、従来漢学者流ノ腐儒タルコトヲ悪ム。孔子ヲ信ズルト雖ドモ仏教者ノ釈迦ヲ拝シ耶蘇信者ノ耶蘇ヲ信ズルガ如キニ非ズ。孔子ノ教ハ、吾国ニアリテハ吾君ヲ愛シ父ノ子トナリテハ吾父ヲ愛シテ、孔子ヲ愛セザルヲ以テ吾道ト心得ルヲ以テ、日本ノ今日ニアリテハ 忠孝ノ大道ヲ 其時世時世ニ活用スルヲ以テ僕ノ学問トスルナレバ当世ノ支那好キ文章家考証学ノ奴隸ニ アラザルナリ。唯日本ハ日本ノ道ヲ立日本ノ教育ヲ行ハノコトヲ熱心ニ堪ヘザルナリ。足下ハ僕ト異ニ、従来米国ニ遊学シテ耶蘇一派ノ教師ニ就テ非常ノ苦学アリシト横井ヨリ 伝承セリ。サレバ耶蘇ノ教ヲ信ゼラルルコトト察スレドモ、日本ノ教育モ耶蘇教ノ如ク、日本人ニシテ吾君父ヲ闕キ耶蘇師ヲ信ズル心ヲ惹起セシムルヤウノ精神ハ、曾テ之ナキコトト僕ニ於テハ較見ル所アリト雖トモ、吾旧県人ナドニハ足下ヲ 疑ウ者少ナカラズ。思フニ全国人ニシテモ、必ず足下ノ宗教徒タルヲ 是認スル者多カラノコトヲ患フルナリ。足下自ラ信ズル所果シテ如何ゾヤ。足下今教育ノ全権ニシテ、文部大臣タリ、僕老頑用ニ足ラズト雖トモ、猶乏キヲ顧問ニ承ケ、毎日聖上前ニ咫尺シテ 顧問ヲ承ク。国家ノ為メニ黙シテ言ハザルコトヲ得ズ。故ニ肺肝ヲ吐テ之ヲ問フ。足下果シテ 忠君愛国ノ誠アラバ希クハ僕ニ告グルニ実ヲ以テシテ隠ス所アル勿レ。

（註）太政大臣三条実美が伊藤参議によせた次のような書簡（明治18年12月15日附）が残っている。内啓、森文部卿の事承知相成候由、好都合に有之候。右は兼て元田より段々申上候より 上にも御配慮被遊候事と存候。此上又々彼是申上ては 上にも御困りと存候間、元田へは貴官より能御説諭相成候はゞ、甚可然被存候。御賢慮も可有之候得共、氣付早々申入候也

元田の森文相にたいする異議は明かに彼の儒教的教學観に根ざしていた。元田が、森の学政にどうしても不信感をずてることが出来なかったように、森は元田の教學思想に譲歩する

* The Life and World-Work of Thomas Lake Harris, Glasgow, 1908.

ことはできなかった。森がその方針を立てて能勢榮をして編纂させた師範学校用の「倫理書」(明治21年)^註は、元田が「教育意見書」の中に表明した文相森への「危虞」をとりのぞくどころか、それを一層つよくする内容のものであった。その倫理体系の中では、君臣の関係は、何ら特別の役割を有していなかったのである。

(註) 森は師範学校の教科目から、「修身」をのぞいて、「倫理」をもってこれに代えた。本書はその教科書として編まれたものである。かつ森は、文部大臣になると、従来の儒教主義的な修身教科書の使用を禁じ、修身をすべて教師の口授によらしめた。さらに、西村茂樹が、皇室こそ道德の源たるべきだとする前提から、普通教育中、徳育のことは皇室自らこれを管理するという構想を打出し、宮中関係の有力者たちの支持をえて実現の緒につこうとしたとき、森はその職を賭してこれを阻止した(西村茂樹「往事録」197-8頁)こと、しかも森は東京大学の改革を企てたさい西村にその綜理に就任することを要請し、また、伊藤総理の怒を買った西村の「日本道德論」のために大いに弁護の労をとったこと(同上書192-3頁)等を考え合わせると、森の元田や西村との対立はもっぱら彼等の懐抱する、君となり師となるのが天皇の本来の任務だとする儒教的な教学観と、原理的に相容れない思想が堅持されていた結果であると認められるのである。

元田は森の倫理書に対して、再びきびしい批判を加え、その修正を要求した。森が、忠君愛國の精神を養うことや、日本国の人物を造ることを教育の主要とする立場をとっても、森と元田との教学観における対立はなお解きたいものであったのである。

……大臣閣下往キニ云フ 日本国ノ教育ハ学芸技能ノ人ヲ造ルニ非ズ。日本国ノ人物ヲ造立スルニアリ。故ニ西洋ノ規則ニモ抛ラズ、陸軍士官校ノ規則ヲ斟酌シ新タニ日本教育法ヲ編成ス、其根本忠君愛國ノ精神ニ外ナラズト。是真ニ日本教育ノ主要ト云ベシ。之ニ由テ之ヲ觀レバ、我日本国ノ人物ヲ造立スルニハ我国ノ国体人質ヲ知ラシムルニアリ。先ヅ君臣ノ大倫ヲ知ラシムルヲ要ス。君臣ノ大倫国民一般ノ腦髓ニ充実スレバ 其余ハ其人ノ才学ニ由テ博大精深ニ進ムベシ。君臣ノ大倫未ダ明瞭ナラズシテ汎ク社会ノ倫理ヲ説キ行為意志ノ區別ヲ精細ニ示ストモ已ニ日本人ノ主眼曖昧ナレバ 我国人ヲ造立スルニ足ラズ。故ニ教科書ノ大巻頭ニ君臣ノ倫理ヲ第一ニ掲明シ爾後件ヲ 逐ヒ条ニ順ヒテ処々ニ君臣ノ主目ヲ示シ、生徒ヲシテ一見瞭然自然ノ感覺ヲ惹起セシメ久シク 其徳義ニ涵濡セシメン事ヲ要ス。是此書ニ就テ大ニ修正ヲ望ム所ナリ。

森は元田の要求を事実上黙殺した。彼に妥協を肯じさせなかったものは何であったろうか。

森がクリスチャンであったかどうかの 関葛藤はしばらくおくとして、この対立の根拠をさぐることは、森の理解にとっても、日本の教学の歴史をかえりみるうえでも軽くない意味をもつ仕事である。

私は、さきに、元田が森をキリスト教徒と信じたのには、たしかな根拠があったとのべた。元田は、自ら記しているように森のキリスト教入信について、横井小楠から聞くところがあったのである。森と鯨島が、三年におよぶ英米留学を終えて、明治元年の六月に帰国したとき、小楠は二人を自邸に招いて、英米での経験をきいた。これはおそらくその年の九月上旬の

ことで、この会見は深夜人を遠ざけて行なわれたとつたえられる*。そのときの話題の中心は、T・L・ハリスの人間と思想と事業であった。ハリスについての二人の談話は、小楠にふかい印象を与えた。彼は在米の二甥に宛てて、ハリスについて二人から聞いたところをつづき書き送った(明治元年9月15日附)のである。この記事は、森とT・L・ハリスの交渉に関する、もっとも信頼出来る記述であるが、特に私の考察にたいしてそれはかけ替のない貴重な資料である。何故ならそこには、小楠のハリス観が見られるだけでなく、また帰国早々の時点で森や鮫島がハリスをどのように見ていたかをもそれは示しているからである。

……前 略……

薩州生鮫島誠蔵森金之允外国にては野田忠平沢井鉄太と改名四年前イギリスに参り居候内同国人フリハントと云者に 出会フリハントより咄聞候には、世界人情唯々利害の欲心に落入り一切天然の良心を消亡致し有名の国程此大弊甚しく有之候。必竟は耶蘇の教其道を失し、利害上にて喻し候故に人道滅却嘆けかわしき事なり。我等も全く耶蘇に落入り居候処、アメリカ国エル・ハリスと云人より初て人道を承り悔悟いたし候。此エル・ハリスも元は耶蘇教之教師にて有之、24才にて天然之良心を合点致し候。人倫の根本此に有之事を真知し是より自家修養良心培養に必死にさしはまり誠に非常之人物当時世界に比類無之大賢人なり、此人世界人道の滅却を嘆き専ら当時の耶蘇の邪教を闢き候志なり。フリハント再び云、我は役事相断下院の長を勤たりし由エル・ハリスに随従し修行せんと欲すとの咄し有之、薩の兩人も驚き遂にフリハントと共にアメリカに渡りエル・ハリスに従学せり、エル・ハリスは退隠村居 門人30人余有之、相共に耕して講学せり。其教たるや書を読むを主とせず講論を貴ばず、専ら良心を磨き私心を去る実行を主とし、日夜修行間断無之、譬は靄然たる春風の室に入りたるの心地せり。然しながら私心を挟む人は一日も堪へがたく、偶々暮ひ来りし人も日ならず帰り去る者のみにて遂に其堂を窺ふこと不能、薩の兩人も初は中々堪かたかりしが 僅に接続の力を得て本来心術の学問に入りたり。此人云世界総て邪教に落入り 利害の私心に渾化せん実に人道の滅却なり。末だ邪教の入らざる処は日本とアフリカ内何とか云国のみなり、日本は頼み有る国なれば、此の尽力を十分に致したきものと。薩人近頃帰り兩三度参り此道の咄し合面白く大に根本上に心懸け非常の力行驚き入たり、此のエル・ハリスの見識耶蘇の本意は良心を磨き人倫を明にするに在り、然るに後世此教を誤り如此の利害教と成り行き耶蘇の本意とは雲泥天地の相違と云ふ事なり。

此段大略申遣候、扱々感心の人物不及ながら拙者存念と符節を合せたり。然し道の入処等は大に相違すれども良心を磨き人倫を明かにするの本意に至りて何の異論か有らん。実に此の利欲世界に頼む可きは、此人物一人と存るなり。都合に因りては必ず尋ね訪ひ

* 山崎正董、横井小楠伝、下、149頁参照。

可被申重々存候事（下略）

（山崎正董，横井小楠遺稿，560頁）

本論考における私の仕事は、いわば右の小楠の証言の裏付けと補足だといえないこともない。私は私が国内国外で見出した若干の新資料をも含めて、なるべく同時代の史料によって、彼の英米留学時の経験を、特に森とハリス——又それを通じてキリスト教——との出会いを中心として追跡することにつとめてきたのだが、この作業において小楠の証言は、いつも、もっとも信頼すべき導きの糸として役立ってきたのである。

小楠は、キリスト教に深甚な関心をもっていた。その理解のふかさも、当時の日本人として随一であったろう。「耶蘇は神でも人でもなく一つのものであった。死んで磔刑になって初めてこのヤソの事業があがった。磔刑がその人の成功であった」（山崎正董「横井小楠伝」下、148頁）と語ったと伝えられる。キリスト教について、殆ど知るすべもない当時であることをおもすと、この言葉は小楠の洞察のふかさを示すものであろう。なお彼が井上毅との対話の筆記である「沼山対話」*（元治元年、1864年）によってみると、キリスト教は仏教とちがって倫理を立てるものであり、その説は仏教にくらべて一入深玄であり、しかも近代にいたると、それは経綸窮理の学と結付いて、利生安民の事業に寄与するものとなっている*。

小楠は、「キリスト教を海内に弘張せしめんとはかった」として暗殺された。明治2年1月5日のことである。森もその20年後に、同じくキリスト教徒として殺された。どちらの場合にも、世間の同情は暗殺者集った。暗殺は殺されたものへの憎悪を改めてかきたてた形がある。キリスト教への憎悪は日本の社会の根ぶかい体質につながっている。森はその公人としての活動において、終始この種の社会体質への挑戦を敢てしていたといつてよい。森はその晩年の、「保守家」的色彩を濃くしていった時期においてさえ、ラジカルな改革家としての面目を保ちつづけていた。そのラジカリズムは一面氣質的、性格的なものであったが、一面その若い日に、ハリスの社会（この濃密な雰囲気のかめた）の中での、きびしい生活によって、確固たるものになったように私にはおもわれるのである。

第一章 慶応元年の薩摩藩遣英使節団の活躍

（一）五代友厚と富国強兵の主義

薩摩は薩英戦争から大きい教訓を引き出した。この敗戦がきっかけとなって、藩論は大きく開国に向けて転換したのである。斉彬以来の開明派乃至西派の伝統をうけついで松木弘庵（のちの寺島宗則）や五代才助（のちの友厚）の存在が、それを可能にしたといつてよい。

* 山崎正董，横井小楠遺稿，897頁—913頁参照。

かれらは、開戦の端緒をつくった英海軍による薩摩藩船の拿捕のさい、船長をつとめていた。二人は部下全員を下船せしめたうえ、「自発的に」英軍の捕虜となった。その真意はさだかでないが、戦後にいたって、この二人の存在が、薩英の接近を促進するのに少くない寄与をしたことは確かである。慶応元年に15名の留学生が英国に送られることになったのは、五代の建言が与って力があつた。彼は二次にわたる大規模な留学生団派遣の構想を立てていた。

五代の構想によると、第一次の「留学生」は短期で、(英仏各150日) 将来藩の要路に立つべきもの、又、各分野の実務の担当者を文明の実況に触れさせることによって、その蒙を啓き、日本が現実におかれている状況にたいして目を開かせ、藩の方針を開国と富国強兵の主義に定着させることにあつた。又諸種の機械の実験と購入の事務にも、当るべきものとされていた。第二次の留学生団は、開国と富国強兵の主義が確立され、整財のための緊急な措置が講ぜられたのちを受けて、国の富強の根底を築くため、本格的に西洋の科学や技術を学びとることが任務で、五代はこの目的のため、年少の生徒5、60人と、やや年長の人材20余人をメンバーとして考えていた。⁽²⁾

慶応元年の薩藩留学生団は、新納と五代と寺島が同行したことによって、多目的々な薩摩の使節団の性格を帯びることになった。五代はもっぱら富国化に向つて少しでも実効をあげるため、整財弁利の機械の物色や購入に奔走する傍、藩内の資源開発や貿易振興のため、外人と合弁で商社を設立する計画の実現につとめた。この計画に協力したのがベルギーの貴族モンブランであつた。⁽³⁾ 彼は松村淳蔵によると、文久三年池田使節団から日本の情勢をきき、困難打開のためには、大名を倒して政権の帰一をはかる外ないと考え、池田使節にこの策を進言した。この策が容れられれば、仏政府を説いて仏国の兵力を貸して、大名討滅に協力することを約した。池田は大いにこの策をよるこんで帰国して幕府を説いたが、事は行なわれずにやんだ。モンブランは、これで幕府を見限つて薩摩に近づいたのである。⁽⁴⁾ (彼はのち岩下に伴われて日本に渡つた)。

ここで一言、五代の懐抱した富国強兵の主義について説明を加えておく。それは薩摩藩の知西派の代表的意見であるとともに、反幕的開国派の意中であつたものが何であつたかをもよく示しているとおもわれるからである。

五代はヨーロッパにおける国家の基本は「インダストリーとコンメンシアル」(すなわち産業と貿易)であると理解する。インダストリーとは「種々の機械を用いて万物を随

(1) 「タイムス」1863年10月29日附は「これらの紳士は、無抵抗に藩船を敵に委ねたのち、上陸するよりは、英提督に一身を委ねる道を選んだ」と報じている。

(2) 薩藩海軍史(中)、なお、「日米フォーラム」(1964年6月)64頁参照。

(3) この計画は頗る膨大なものである。薩藩海軍史(中)958頁—976頁を見よ。又石井孝「明治維新の舞台裏」71頁以下参照。

(4) 松村淳蔵洋行談(薩藩海軍史(中)902頁)

意に製作して蓄財の基とすること」であった。彼が富国強兵の主義を説くときは、いつも富国の根底を堅くする努力を欠いた。近視的・直接的な軍事力の強化に奔走する政策にたいするきびしい批判を含んでいた。だから、横須賀製鉄所建設その他について、仏国政府の協力を得るために渡仏した柴田日向の使命に関連して、「幕府も愚なり富国を知らずして強兵が出来るものか。段々の愚論聞くに忍びざるなり」とこれを嘲った。これは小栗上野一派の幕権更張論者の軍事力偏重の主義への批判につながる。

彼の富国強兵の主義の実現のためには、「国家の全力をあげての開国」が絶対の前提であったが、「戦っても開いてもついに開国の外なし」とする見通しとともに、日本の「人質強慢にして地球上の広を知らず、国内の動揺に空しく年月を費す」ことへの絶望感をも伴っていた。彼はこの事態からの突破口をさらに大規模の「留学」計画に求めた。ただし、彼がヨーロッパにきて、新に到達した結論にしたがえば、現在日本が必要とするのは、彼がはじめその構想の中で説いた若い多数の留学生の派遣ではなくて、^(註)「開鎖を論せず公家方、諸大名をはじめ列藩の政務に係する全権を撰び、あるいは攘夷の巨魁と共にヨーロッパの形勢を見せしめ、我彼れの国体政務の得失を目下に決論」せしめることであった。これによって彼は「天下列藩志を一にして国政の大変革をおこす」機運を促そうとするのである。その上で、普く緩急の別を立て 富国強兵の基本を守って国政を振起するならば、「10余年の功を待たず（日本は）アジヤに濶歩」⁽¹⁾することが出来ると彼は信じた（慶応元年10月12日附桂右エ門宛五代書簡及び同年但し日附末詳の野村宗七宛書簡による）⁽²⁾

（註） その理由は、たとえ欧米に留学したものが功を収め帰朝しても、上に立つ為政者が愚昧であれば、その抱負はおこなわれぬ。下より上をつかうことは出来ないからである。下に人材多く上愚なフランスがよい例で、このような事態は社会不安の本になる。だから日本においてとるべきは、⁽³⁾支配層の啓蒙によって「上より下を開く」措置であるとする。

五代は、若い留学生を送る計画の中止を進言すると共に、薩摩の太守自身がまず、海外に渡ることを要請した。率先して上から下を開く範をたれることを望んだのである。しかし、同時にかれはその立場が開国派であると、鎖国派であるとを問わず公家といわず 列藩諸侯といわず、全国的にこの先例が倣われることを要求する。それは「御国許(薩摩藩)のみが相開け候ては、普く(富国の功を)皇国(日本全国)に及ぼすこと能わず」という認識に立っているからである。この段階における開明派の意識においても、勿論藩の利害を中心とする思考はなおつよいが、これはもはや藩的エゴイズムに終始してはいない。藩という「拠点」をはなれてナショナルな目的を追求する条件は欠けていたけれども、富国強兵の主義とナショナルな立場との結びつきは、すでに成立しつつあったのである。

(1) 薩藩海軍史(中) 944頁—947頁。

(2) 同書、648頁—949頁。

(3) 前掲書(中) 946—7頁。

五代の構想する日本政治改革の方策は、典型的な平和革命の路線であった。それはまた、「深刻な封建的危機に直面して、騒擾、暴力、流血、の中絶的期間なしに市場の拡大に資する(1)ような改革をおこないたいという」英国政府の希望にも合致するものであった。ヨーロッパ諸国を視察して再びロンドンに戻った五代は、10月12日附桂右エ門宛の書簡中に、ヨーロッパの形勢とそこでの国政の大意を次の如く記述した。これは彼の強調する富国強兵の主義がかなり幅のひろいものであったことを示している。

仏国は下に人材多く在て国政を討論する事多く、国政甚だ不容易、譬仏国は私式の才力を以て動しあたふとも、英国は難動、是を以て英仏の情体を御推覧被遊被下度候。其他一般欧羅巴の形勢、国政の大意と云ふものは、富国強兵の順序を相守、詳に出入を計りて事業に及す。国政公平にして貴賤を不論、高論あれば則ち是を用ひ、人を挙るに愛憎を以てせず、才力を論じて各其機を以専任して仕ふ。海軍は海軍局に学び、陸軍は陸軍の学講に入る。其他の講学と云へども、各随意の学講等に学ぶ。又は貧人は貧院を立て養ひ、病院は病人を療治せしむ。捨子は養院に養ひ、馬鹿院啞子院を立て適宜至当の職業を教へ、罪人と云へども無益に籠舎する事なく、其局中に放置して各得意の職業を以て種々の製作をなさしむるの類、実に至らざる処なく、政羅巴諸州に於て尤も公平なる仁政は、第一英国第二「ウエルギー国」也。

(二) 寺島宗則の対英外交工作とその背景

(1)

慶応元年もおしつまった12月26日(洋暦では1866年2月11日)にマルセイユを出帆して五代と新納が帰国したあと、寺島はなお5ヶ月の間、英国にとどまった。これは、寺島が、なお果さずに残っている任務をもっていたことを示すものである。彼には、事実五代とは異なる使命が託されていた。

我々は英国外務省文書の中に寺島が英国到着後間もなく、外務次官レイヤード(Layard, Sir Austen Henry)と会見した記録を見出すことが出来る。それは、1865年7月28日のことである。五代もそしておそらく新納も、一緒であったろう。英外務省で作成したメモランダムによると、この会見の主題が薩摩藩との間に英国と直接貿易の道を開く件にあったことが(2)わかる。(註)ブリティッシ・ミュージアム所蔵のレイヤード宛のオリファントの手紙はさらに、詳細に寺島の使命を明らかにしている。かつて、「日米フォーラム」(1964年6月号)によせた拙稿「幕末海外留学生」(その4)で紹介したことがあるが、薩摩藩の意志をもっともよく示しているものだから、全文を再録しておく。これはオリファントが寺島等のために書いた

(1) 石井孝「明治維新の国際的環境」(旧版)437頁。

(2) F.O. 46/61-234f

た添書である。欄外に異筆で、

Mr. Oliphant

July 28/65

と書き込みがある。おそらくレイヤードの筆であろう。

親愛なるレイヤード

此の状持参の日本紳士は、すぐれた知性の持主で、また注目すべき人達です。彼等は覺書きを御覧に入れるはずですが、それによって貴君は、この使節団 (Mission) の目的について、大体の理解が得られるでしょう。英国の政府が薩摩の政府と直接の関係に入りこむとか、幕府の同意なしに港を開くとかすることは、不可能だろうと存じます。しかし、それが彼等の望んでいることなのであり、条約に規定される港が、幕領 (Imperial territory) に限られているあいだは、大名たちの間に不満は絶えないでしょう。大名たちは今日では貿易の利益が幕府の手に入っており、幕府はそれを独占しつつあることに気づいて、何とかして彼等もまたその分け前に与りたいと切望しているのです。何とかして、パークスを通じて、「大君」に、大名の領地内に港を開くことが、彼の利益なのだと思わせるようには出来ないものでしょうか。また「大君」との間に、藩地に港を開くことを希望する大名の妨害をしないような取り極めを結ぶことは出来ないでしょうか。このような路線を好ましいとする理由は沢山あります。勿論私はただ参考までにこれを申上げているので、少しくこれらの日本人と話し合われれば、貴君は、彼等の値うちを評価することがおできになるでしょう。

28日 貴君の真実なるエル・オリファント

(註) この会見の際の英外務省側の記録によると、薩摩は差し当り、琉球諸島中の一港の開港を希望している。この段階では、薩摩は、この問題で幕府とトラブルをおこすことにたいして極めて慎重であった様子が見られる。

この外国と直接に通商関係を結ぶことを希望していたのは、決して薩摩藩だけではなくた。その情報は在日の英国領事たちがキャッチしており、且、その情報は、寺島・レイヤード会談が実現する以前に届いていた。英国領事ラウダーは、長州が下関を幕府に奪われることをおそれ、何とかして下関開港について、直接英国政府と条約を結ぶか、それが出来なければ英国が幕府に圧力を加えて下関に関して長州の希望を容れるようにさせることを望んでいることを報告している。

のみならず1865年5月3日附の、当時帰国中であったオールコック宛、英領事ガワアの私信によれば、長州の一高官が、幕府の貿易独占を攻撃し、長州はかねてから自藩内の港を外国に開くことを希望しており、これに成功すれば、薩藩その他は直ちにその例に倣うであろうと断言し、その交渉のため長州が英国に使節を派遣する件について外相ラッセルの了解をとりつけるよう、代理公使ウインチェスターに手紙を書くことを要望している。この長州の

一高官というのは高杉晋作で、彼はこの時伊藤春輔とともに英国に赴くつもりで藩主の許しも得ていた。これを見ても、この時点において薩長のような反幕雄藩が具体的に開国のために行動していたことは明らかで、このような国際及び国内政治の状況の中で、薩摩の留学生は、慶応元年3月21日羽島を発って英国に向ったのである。

さきに引いた英国の領事ガワアの「私信」(1865年5月3日即旧暦4月9日)には、この一行の出帆にふれ、グラバーがその出発を見送ったことが記されている。のみならず、彼はその手代ライル・ホーム Ryle Holme をわざわざ英国まで附添わせて、万端の世話に当らせたのである。この手紙を受けとった賜暇休暇で帰国中のオールコックは、ラウダーの手紙をも同封、自己の意見を添えてこれを外相ラッセルに回附した。⁽¹⁾ その手紙の日附は1865年7月19日である。留学生一行がロンドンについたのは、洋暦で6月21日だが、それから1月あまりたった7月28日に、寺島や五代は、外務次官レイヤードと会見したのである。したがって、英外務省は、オリファントによって、薩摩の意のあるところを承知したのみでなく、日本駐在の二人の領事と、賜暇帰国中の駐日公使オールコックからの情報とその意見とを併せて知りえていたのである。オールコックは、長州その他の有力大名たちは、外人を撃退する努力の空しいことを悟って、今度は、幕府の貿易独占の体制を打破して、藩内の港を開いて外国と直接の通商関係に入ることを希望している。この努力に対して彼等は外国の協力を求めている。彼等はロンドンに使節を派遣しようとしている。彼等の申出にどう対処するか。彼等の利害と願望が我々と一致しているだけに真剣に考慮する値うちがある。大君をしてその貿易独占の体制を改めるように仕向けることは困難であることを考えると「勅許と主要大名達の十分な合意の下にもっと十分な開国に導く可能性」 the possibility of opening Japan more fully under the highest sanction and with the full concurrence of the chief Daimios は考慮に値する。⁽²⁾ むしろいまは断乎とした行動に出るべき時期だ、これがオールコックの意見であった。ここで積極的に、外国と直接に貿易通商関係を樹立するために行動する意志を示しているのは、「長州その他の有力な大名」だが、ガワアのオールコック宛の書簡によれば、前記のように高杉は長州がその藩内の港を開くなら、薩藩その他は直ちにその例に倣うであろうと断言していた。またラウダーは長崎で諸藩の重役たちと接触して、この種の願望が長州だけのものでないことを発見したと書いている。⁽³⁾ ある肥後藩士は、彼にたいして、「革命に訴えてでも真に全国を外国貿易と交通にたいして開放する要求が、有力な諸大名の間につよくなっておることや、英国は幕府でなく『ミカド』に使節を送り、真に開国を保証する新たな条約を結ぶべきであると」という意見をのべたとも記している。

(1) F.O. 46/61—196—208 7月21日にはこれが受理されている。

(2) F.O. 46/61—199

(3) F.O. 46/61—201

オールコックは、長州がこの有力な諸大名のリーダーであると解しているようにおもわれる。^(註) 事実、高杉晋作は伊藤春輔と共に、藩侯の命を受けて、下関開港の談判をとげるために英国船によって長崎にガワーを訪ね6日の間その邸内に泊り、そこで交渉に当たった。尤も高杉はじめは、ただちに英国に赴いてこの問題の解決に当る意図をもっていらしい。

(註) ラウダーはこの肥後藩士から聞いた真の開国のために努力している大名のリストを別紙に認め、これを同封してオールコックに送った。オールコックはこれを、宍戸刑馬即ち高杉晋作から得た情報であると註記して、ラッセルに送付している。そのリストに挙げられている開国派有力大名は、薩摩、越前、肥前、柳川、小倉(筑後)加賀、芸州、久留米、島原、肥後、紀州? (Kinsiu)、土佐、長州、宇和島の14藩である。

高杉が長崎にガワーを訪ねたのは、慶応元年3月21日であった。これはまさしく、薩摩の留学生たちが、英国に向けて羽鳥から船に乗りこんだその日である。薩と長という反幕二雄藩が同じ時期に、同一の目的を追求していたことは興味ふかい。もっとも長州の場合、それは高杉という個人の奔放な、孤立した企画^(註)であったのだが、薩摩においては、それは明確に藩の方針にもとづいた、藩の行為であった。

(註) 高杉のこの行動は、彼のいわゆる「大割抛」実現のため「五大州中え防長の腹を推出して大細工を仕出す」ためのものであったことは明かである。^{*} この行動は極く一部のものの外堅く秘密にされなければならなかった。(中原邦平「東行先生略伝」97頁)

(2)

寺島は、その「履歴抄」の中で、英国にいたってオリファントの協力を得て、英国外務省にたいして、工作を試みた顛末を次のようにのべている。

……余此人に日本外交のことを談じ同氏の好意を以て英政府の外務大臣「カラレントン」に説かしむ。其略に云ふ、我朝外国と条約を結べるは、幕府なれども、方今諸藩其權を剥ぎ之を京都なる帝室に復せんとす。故に諸藩士頻りに外交を妨げ外人をして幕威の及ばざることを知らしめんが為に、魯人を殺し、英公使を襲ひ、其他穩当ならざる所為あるものは、皆幕府に叛くが為なり。且日本国物産の生ずる所多くは藩地にあれども各藩士をして自由に貿易せしめざるが為に、外人広く貿易をなし難し。故に英国政府も亦日本政權の王室に帰する事に助力して其条約批准の主を王室に移す時は、各藩の服従せざる幕府と条約を締結せる今日の如く異議ある事なく、内外全美の処分なり。今日の如き幕府に対せる条約は日本真主の約する所にあらず。永く之を保続して、両国の益と為す可らざるものなり云々。「オリハント」云ふ、其言甚だ善し、宗則も同行して外務大臣に面謁せば、我之を説かんと。翌日外務省に同行して「カラレントン」に謁し、「オリ

* (慶応元年2月)23日附、大田市之進、佐々木男也、山県狂輔、片野十郎、福田良輔、林半七、堀真五郎、赤川敬三、其外諸君宛高杉晋作書簡。

ハント」より前議を述べ、更に議院に至りて同人に、建言する事兩度にして、外務大臣大いに同意し、当時の在日本英国公使「パークス」に帝権復興に助力せよとの命を發したり。此時よりして、英国公使は薩人に接する事屢なり。翌年「パークス」鹿城に來り、小松帯刀西郷隆盛に見へ勤王の事を談ず。余此時未だ「パークス」に英国外務大臣より日本条約締結の権は王室に歸するの益を勸奨せる指令の達せしことを知らざれども、後に至り之を聞けり。

寺島の自記に精確を欠く点のあることは、石井教授の指摘する如くであるが、その成果はたしかに小さいものではなかった。そしてその成果はオリファントの協力に負うところが極めて大きい。

寺島や五代がはじめてレイヤードと会見したとき、添書を書いたオリファントは、それから8ヶ月ほど経って、寺島・クラレンドン会談を実現させた。レイヤードはラッセル外相の下で次官を勤めていた人だが、オリファントの年来の知己であり、ラッセルとオリファントとの間にも、特別たち入った関係があった。彼はラッセルの庇護の下に政界入りをしたのだし、彼を駐日英国公使官の書記官に推したのもラッセルであった。オリファントは東禅寺事件で重傷を負って帰国するという出来事がなければ、オールコックの帰国中代理公使をつとめることになっていた。ラッセルは屢屢オリファントを密使として外地に派遣して外交上の情報収集に当らせていた。寺島がクラレンドン外相に会ったのは、このラッセルが首相の任についていたときである。

寺島・クレラントン会談の行なわれたのは66年の3月20日前後であろう。とすると寺島が始めてレイヤードに会ってから8ヶ月が経過している。寺島が五代や新納の帰国したあともなお英国に滞在したのは、やりかけた仕事に目鼻をつける為であったに違いない。8ヶ月の間寺島は何をしていたか。この8ヶ月の間に寺島の提案内容にかなり重大な発展があった。それはこの滞在が実りの多いものであったことを示す。オリファントの協力が与って力があつたと思われる。寺島はオリファントを通じて英国の情報を集めたり、また提供したりして、意志を英政府に通ずる努力をつづけていたと考えてよい。その一つの証拠となるのが慶応元年11月10日附(洋曆1866年12月28日)野村宗七宛の五代の手紙である。この手紙の中で五代はパーマストンが死んで外相ラッセルが首相となったことを報じ、この交替によって英国の対日政策に変化が生じたことをのべているのである。オールコックはかねてから、「兵権を示さずしては日本は開け難」と信じて賜暇帰国の際パーマストンに進言したが、用いられなかった。ラッセルは活発な性質であり且、外相として日本の内情を熟知していたうえオールコックを信用していたので、パーマストンに代って首相となると直ちに、列国共同して

(1) 石井 孝、前掲書(旧版)432頁参照。

(2) 薩藩海軍史(中)946—952頁。

日本に軍事的圧力を加えることによって兵庫開港の実現をはかる方針を決め、ロシア、プロシヤ、オランダ、フランスに協議をはじめたというのである。「勿論筒様の密事は、その職掌の外には、決して不相洩事の由候処、幸にして承得申候」と五代は書いている。オリファントを除いてこの情報の出所は考えられない。英外務省が故意にこの情報を洩したことも十分に考えられるが、いづれにしてもこの一例は、オリファントを通じて寺島と英外務省との間に終始間接の接触が保たれていたことを示唆する。

寺島の対英国外務省工作の成果の評価はここでの問題ではない。それについては、石井孝教授の精細な考証がある。⁽¹⁾ 1865年8月23日附で、外相ラッセルは、パークスにたいし、幕府の態度に疑義を表明し、薩長の貿易開始への意欲を高く評価する訓令を⁽²⁾ ウインチェスターやラウダーやガワールの通信（その背後に長州の高杉の働きかけがあったことは先にのべた）と相俟って寺島の努力が大きい役割を演じたと見てよい。

私は、この8ヶ月の間に、薩藩内に対外貿易港を開くという藩レベルの問題提起からはじまった寺島の提案が幕府と外国との間に結ばれた条約を朝廷との条約に結びなおすという国レベルの問題にまで高められているのに興味をひかれる。オリファントが寺島の正確な意見をつたえるため、クラレンドンに書き送った手紙（1866年3月25日附）には日本の有力な大名は天皇によって、京都に大名の会議が召集されることを望んでいる。その会議には御三家、18の国持大名その他天皇がその助言をうることを望んでいる大名が参加する。そこで天皇の承認した条約に大名が署名をする。もしこの手続を踏まないで（すなわち貿易から大名を締め出した体制のまま）幕領内に新しい港が開かれるようなことがあれば、内乱はさげがたいだろうという趣旨のことが記されていたのである。大名たちは天皇による大名会議召集のため条約諸国の圧力が幕府に加えられるのを希望している。大名たちを貿易からしめ出している形での「開国」体制を真の開国に切り替えることは、英国にも貿易規模の拡大のための劃期的な一歩を進めることとして歓迎された。しかし薩摩にとっては、それは単に大名が外国貿易の齎らす利益の分け前に与る道を開くことであるだけでなく、幕府が国家権力を独占する体制に顕著な修正を加えることを意味していた。外圧を利用して、朝廷召集の大名会議を開き、条約を結びなおすという外交上の措置を通して、政治体制変革の突破口をつくるということは、元治元年9月の勝・西郷会談以来、薩摩の熱心に追求していた政治目標であった。条約諸国の艦隊の摂海進出を背景にして明賢諸侯の会議を開き、幕府と外国の間に結ばれた条約を朝廷とのそれに切り替えることが出来れば、日本の中央政府としての幕府の地位が否定される。これによって、諸侯共和の政治の体制がつくられるというのが、勝（その背後

(1) 石井 孝，前掲書（旧版）432頁。

(2) 石井 孝，前掲書，503頁。

には横井小楠がいた⁽¹⁾と西郷との間に意見の一致を見た日本の政治改革の構想であった。西郷が「朝廷より異人処置被為付候はば幕府はその節限りにてくずれ可申⁽²⁾」と書いたのは、元治元年10月8日のことである。寺島が、はじめから外交上の一つの使命を与えられて英国に赴いたことは、前に引いたオリファントのレイヤード宛の添書からも明らかだが、そうだとすれば、彼が薩摩の政治改革路線として定着していたこの政策について、知らなかったとは考えられない。寺島は、大任を果して、英国を離れて帰国する船中で、日本の政治体制の改革に関する構想を盛った建議案を起草した(履歴抄)。その内容は勝や大久保や小楠が構想し、西郷が現実政治の中に生かそうとつとめた「共和」政治の構想と軌を一にするものであった⁽³⁾。寺島や五代の活動を留学生は目のあたりみた。特に寺島はその活動の趣旨とするところを学生たちに訴えて英国を去った。学生の一人松村淳蔵は、寺島の別れに臨んでの談話を次のように記録している。(薩藩海軍史(中)904—5頁)

寺島氏帰朝の際、一夕晩餐の席にて一同に説かるるには、日本の情況を見るに幕府の衰運最早救うべからず、今日の処将来の見込到底なし、然し改革をなさざれば済まず。仍ては外国中有力の国と相結び、其の力を籍りて国力を伸すの外なからん。故に帰国の上は、此意見を当局に勧めて図るところあらんと思ふとの談ありしが、其後の成行は一々聞かざりしも、後に聞くは英公使「パークス」が薩摩に來り懇待を受けし事等ありしは、果して寺島氏が外国と懇親を結びて一朝有時の助とせんとははれしに仍り、計図せられしことならんと察しぬ。

留学生たちは、体制変革の事業に挺身している先輩の志をついで、その事業を補完する重大な任務が自分たちの肩にかかっていることを否応なく意識させられたにちがいない。

一方英国人の間でも、この度の「日本からの訪問者たち」が今まで幕府から派遣されてヨーロッパを訪れた使節団といわば体質的に相違したのもをもっていることを鋭く感じとっている。1865年8月28日附の The London and China Telegraph は Our Japanese Visitors と題する記事をかかげて幕府派遣の二つの使節団と薩摩のそれ(この記事はそれを Satsuma Expedition ともいうべきものとよんでいる)との間に大きい相違のあることを指摘して、薩藩の使節団と留学生に大きい期待を表明した。要旨を紹介しておく。

幕府から派遣された二度の日本の使節は、西洋世界の驚異に関する知識を日本人民の間に弘布することにたいしては全く寄与するところがなかった。最初の使節は失脚したらしく、消息を聞かなくなった。二回目は、与えられた政治的使命を達成しえなかったとして罰せられた。一方彼等の得た知識は、幕府だけの利益になるように深くしまいこま

(1) 拙稿「幕政改革と共和政治運動」(徳間書店版「明治維新」所収参照)。

(2) 大久保一蔵宛西郷隆盛書簡(元治元年10月8日)

(3) 寺島の建議の内容に関しては石井孝、前掲書526頁補註参照。

れている。だが、薩摩侯から送られた訪問者たちからは、我々はいよいよものが期待出来るだろう。(薩摩の「遠征隊」の)三人の高級メンバー<新納, 五代, 寺島を指すものであろう>のもち帰る報告は、自由で、開明的な薩摩の藩公に好ましい効果をもたらし、すでにその利益が理解されている 外国貿易と交通とにたいする欲求を一層つよめるにちがいない。

だが高い知性を そなえた多数の若い日本人がこの国で 教育を受けることからそれよりももっと偉大な成果が予測される。まづ彼等の言葉が自由になれば、日本の国内の政治や経済や社会の 状態について十分な情報を入手する便宜をうるだろう。それはこの国との将来の国交の上に 大きい価値をもつ。数年の間我々の間で生活したうえて帰国すれば彼等は自分の「経験」を語る事が可能になる。それはもはや旅行者の土産話ではない。我々の生活様式、仕来りや習慣・特異点などについて、上すべりした観念以上のものを彼等はつたえるだろう。彼等は数年にわたって、その間でくらしていた国民の偉大さと、高い文明についてのふかく根をおろした確信をもちかえり、それを人々の間にひろげるだろう。それは藩主と臣下との間に、我々にたいする尊敬と信頼をたかめるにちがいない。

これにもまさって望まれるのは、彼等がキリスト教の諸原則を学び、また社会生活と国の政策にたいしておよぼしている、その好ましい影響をも観察する 機会をもつことである。それは最も熱心な 宣教師の働きをも越えた、ふかくかつ永続的な効果をもつことになるであろう……

寺島は、1866年5月13日(慶応2年3月23日)に村橋直衛およびライル・ホームの弟と共に帰国の途についた。その帰藩は、慶応2年5月24日(洋暦7月6日)で、新任英国公使パークスの鹿児島訪問の直前であった。彼はただちにはげしい国内政治の渦の中にまきこまれていった。

五代と新納はその5ヶ月前に帰国していた。薩摩の遠征隊の「三人の高級メンバー」の帰国によって 薩摩の藩政改革の機運は大いに促進された。我々は横井小楠が在来二甥に送った手紙の中に薩藩の 藩風一変についての次のような証言をよむことが出来る。手紙の日附は、慶応2年12月7日である。

藩州は自国取り堅め 国論一定いたし 弥以て富国強兵に取り懸り、西洋器械も大抵取り寄せ、洋人も 四五輩 呼び寄せ操練等甚盛大に相成候。家中若者共は、大抵洋服截髪いたし候。是迄國中旅人は厳禁之處 鹿子島内は勿論、何方もさし許候故、諸国商人追々入込み、城下などは日々ににぎはひ候。国論大にうち替り、智術計策にて行れざる事も合点いたし、何も誠心公平之處に一統帰候由。

第二章 薩藩留学生とトマス・レーク・ハリス

(一) 森有礼における新しい学問への志向

英国に派遣された薩摩の学生たちの留学目的は、多かれ少なかれ軍事に直接結びついた「技術学」であった。しかし英国に到着して直かに近代国家の「実体」にふれてみて、学生達は彼等の計画が如何に空疎な、具体性をもたないものであるかをさとられた。この間の消息を伝えて、「薩藩海軍史」は「留学生は各科の学術（軍事的諸学科）を研究する目的をもって派遣されしといえども、ヨーロッパに着し西洋文明の状況を見るに及んでその意向は忽ち豹変し、おのおのその新たに志す方面に目的を変えるに至った」と記している（同書「中」943頁）。それぞれに日本が直面している問題に対処するために、より緊要な、あるいはより根本的な学問と信ずるものに転向したのである。

たとえばげいし攘夷思想の持主であった吉田清成にたいして、英国社会の与えた衝撃は一朝にして彼を富国論者たらしめた。その結果彼はその志望を一変して機械学を志したのである。五代は野村宗七に宛て、慶応元年11月11日附の手紙の中で、彼の転向について、次のようにのべている。

……爰元書生中にも 追々蒙昧相開け愚論無し、何れ富国強兵ならでは国家難保と云ひ、各富国整財の議論多し 頗る攘夷家征夷家と云ふ巨魁なる吉田（清成）如きも御国許発足の折は、速に海軍講学して軍艦大砲を求めて征夷するの議論なりしが、英著の上は、暫くの内に議論一変して富国論となり、富国は諸器械の道不相開しては不相成と機械学をすとの相談開きたり。

森の場合は、変化はある意味で一層ラジカルであった。それは内面に及んだ。彼は「西洋文明」の根底に、東洋とは異質の人間観・倫理観が横たわっていることをかなり早い時期に予感しはじめた。慶応元年9月1日附の兄宛の一節は、これを示唆している。

……何れ人間一度は宇宙を遊観せずんば 十分の大業遂げ難しと愚存仕居申候。私にも了簡未だ頓と据え不申候得共、此度渡海以来魂魄大いに变化して自分ながら驚く位に御座候。私に於て第一学問する所、人物を研究するにありと考ひ付始終心を用ひ 汚魂を洗濯仕居申候。

この「人物研究」の意味するところを、正確に押えることは難しい。しかし、着英後の3ヶ月の生活を通して、森は「魂魄の大いなる変化」を経験した。そしてこの変化に伴って、第一に学ぶべき「学」——もっとも根本の学、あるいは一切の学問の根底をなす学こそ、その「人物の研究」であることに思い到っているのである。これは森が全く新たに「人間」とは何かを問ひ直すことを要求される状況におかれたことを示す。道徳における東洋の優越の素朴な確信が、ゆらぎはじめていたのである。この新しい根本の学への志向は、汚魂洗濯の意

志と結びついている。そこに求められているのは、自己を根底から新たにする所以の学であったといえる。

森には、この意味での根本学とは別の、末の技学から区別される意味での「本の学」の要求があった。彼は

今日本の人追々外国あるを覚え、漸く洋学に趨く者許多有之候えども、皆その末の技学
に走りて本を知らず

とする。彼は漢学の要は四書五経に止るとするところからその上に出る 学問に志すべきで有る。まづ世界の歴史と、さらに東西法制の比較研究にしたがうべきであると考えて。彼は「法制の学」こそ国礎の学であり、末の技学にたいする「本の学」であると考えた。それが国礎の学とされるのは、国のあり方を根底において決定するのは、法律制度であるとする思想に由来する。彼にこの思想を植えたのは、英国の社会である。我々は彼が滞在した1860年代が、まさにベンザミズムあるいは、立法を通じての（功利主義的）「改革の時代」であった^{*}、ことを記憶する必要がある。だがこの問題の考察は他の機会に譲る外ない。ここでは森に自己を新にする学と共に国家社会を根底から新にする学問への 要請のあったことを示す、森自身のことばを引用しておく。

法は国の大本、法不明にしては治国安民の事決して出来難し、たまたま我国伝来叶ひし法は立居候得(共)多くは苛酷の法にして人情に遠し、無きに勝るの法なきにしもあらず。外国の法と雖又同じ。併私爰に着せしより以来已に一曆にみち、其間耳目に触る所の英の法に於て曾て不理の法なく、我国の法と比較を為せば反て我法は 不理且人情に遠きみにして実に慚愧に堪へ不申候。斯る弊法を持て争て国家の改良を得ん。故に今若し兄之に応じ、今より万国の法制を御学得あり我国伝来の古法と折衷なされ、新に公平に^註して不拔の大制度を御築立有之候得ば、天下万世に至ても誰か其沢を蒙らざらん。

兄に対して「万国の法制」の比較研究をすすめた手紙の中で、森は米国の制度が「わづか200年来の新制にてもっともすぐれたもの」であるといい、それにつづいて「仏国の制度もすぐ

* この点については Dicey, A. V. Lectures on The Relations Between Law and Public Opinion in England, 1920 p. 126-310 及び Barker, E. O., Political thought in England, 1848—1914 (H. U. L.) p. 180—182 を参照せよ。

註 この手紙の中で、右の引用につづいて森は、この種の学問に従事するものは如何にその学の奥底を究めることができ、かつこれによって国家に寄与しえたとしても、学によって今日格段の榮譽を得ることは不可能である。しかし、学者としては名譽を求めることなくその本分をつくすこそ人間として生を受けた恩に報ゆる所以であるという信念を披歴している。この時期の森が兄とともに学者として生きる意志をもっていたことを窺わせる。明治9年1月清国公使として赴任した森が、保定府で李鴻章と会見した際、李に欧州において学びえた「學術」を問われてこれに答えた彼の言葉は、この推定に一つの傍証となる。それは次のようなものであった——「遊学の期長からず。故に何の學術をも修め得ず。これ現に閣下の親視する如く公務のため心身を役せらるる所以なり。」

れ候由」とのべている。(1866年7月26日兄宛書簡) この米国の政治体制については、同年6月3日附の手紙で更に詳細にその勝れている所以を明らかにしている。

先に引いた英国の国法に関する発言を思合せると、英国の一年は、森の中に合理主義、ヒューマニズム及びデモクラシーを、西洋文明の美点と認める観点を育てていることに気付くのである。そして、領土的野心の有無がこれに加わって、アメリカへの好意とロシアへの不信が動かないものとなったと考えられる。

米国は今開国を去ること漸く200年、国家の政大小となく悉く万民と謀り、公平正大の政事をなす……西洋人皆云うに、後世起るところ米なりと、殊に英人は米人を諱み候へどもこれ亦同説なり。

しかも米国には領土的野心がない。ここから森は「ともに親交を結び有無を通ずるはこの国なり」と結論する。これとまさしく対蹠的に森の反撥と警戒の対象となったのがロシアであった。^(註)

我国人多く魯国を指して義国という。これ何ぞ汚なるの甚しき。すなわちトルコ奪掠の企て、先年ポーランド国を取りし事跡。またスウイスゼーランド国の過半を奪略せし事跡。ちかくは対馬の件、不義不法の働き数えがたし、そのうえ魯の国政皆国論にあらず。一切帝より出づ。故に不公平の政多し。帝明かなれば治国、暗なれば国乱る。みなその国人帝を以て神とす。何ぞ愚かつ不義の甚だしきや。(1866年6月3日兄宛書簡)

この手紙を書いたとき、あるいは彼はすでに実地にロシアを見る計画を立てていたかもしれない。いづれにせよ本書簡とロシア旅行に出る直前に書かれた慶応2年7月26日附の手紙は、森をロシア旅行に赴かせた動機の一部を示唆している。

その一つはこの危険な隣国を直かにその目で見る要求であったろう。この「世界の邪魔物」はまた「西洋での田舎」であった。この国について法の立て様を見る要求もあったかもしれない。「万国の法制の学得」と「我国制度を暗知すること」と、その一を欠いても立法を通ずる国家の改良は不可能だというのが20才になった森が抱いた確信であった。^(註)

(註) 我国の制度早く暗知せざれば、各国の制度と比較出来がたし。法の立様はその国の風に従い立てざれば、反って害になるべし。故に我を暗知して外を知り、その兩法を折衷して風土に従いたる制定にして立てば全く公平にしてその節を得んか(1866年7月26日附書簡)

彼は実地にロシアの土地を踏んでみて、英国において形づくられていたロシアのイメージが、事毎に裏付けられるのを感じた。しかもその後進性の中に、彼は東洋に通ずるものを見た。たとえば、

この国は政法両ながら酷にして且つ奇なり、米英等と同日の論にあらず。はじめこの

(註) ロシアに対する不信にはオリファントの影響がつかったと考えられる。松村淳蔵「洋行談」(薩藩海軍史(中)905頁、907頁)参照。

* 森有礼「航魯紀行」(大久保利謙編「明治啓蒙思想集」<明治文学全集Ⅲ>248頁及び250頁)

国に入るや、国の大禁を問うに、政事の談論を切に禁ずと、その他許多あり、記しがたし、この国では事々物々皆帝の意にまかす。人民また帝を尊ぶこと神仏の如く殆んど和漢の風習とひとし、国の開けざることを知るべし（「航魯紀行」248頁）

森が松村と共にロンドンを出発したのが、慶応2年といっても実は洋暦の、1866年8月1日で「我国に帰る心地」でロンドンに帰着したのが同年9月10日である。航魯紀行はこの40日に及ぶ旅行の記録である。我々はこの紀行の中に、単に40日に及ぶ旅行の記録を読むだけでなく、森の英国滞在の第一期の結論をよみとることができる。就中、彼が英国をはなれる前ニューキャッスルで過した数日間の「経験」中にそれが圧縮されて表出されている。ニューキャッスルで森は聾啞院、盲院を視察した。そこで手話点字による教育が行われ、更に生業を得しめる為の訓練がおこなわれているのを見る。この施設が与えた感動を森は、「航魯紀行」⁽¹⁾の中に、次のようにかき記した。

嗚呼宜なるかな、西洋の開盛なること。かかる聾啞盲等の人をも遂に捨てず、よく人間の事を教へ弁へ生活を安く保たしむるは盛なりとゆうべし。余の事は随って知るべし。初めわれ此等の件を日本において聞しかど嘗て信ぜざりき。今現然これを観て感驚殆んど記し難し。

人間が人間として尊重されるエトスが、森において、やがて一国の文明と不文明を分つ基準となっているのである。森はしかし、このエトスを支えるものが何であるかの問題に、まだ打ち当たっていない。キリスト教は、故国にいたときと同じように邪宗門であることをやめていない。少なくとも彼は「無心」と称してそれに背を向けている。この心の状況は、同じくニューキャッスルの経験⁽²⁾について語る彼のことばの中に、まざまざと示されている。彼の乗船が荷積の関係で五六日出帆がのびたため数日を過すことになった、ニューキャッスルの岡の上の宿屋で、彼は女主人の、遠い異国から来た旅人にたいする親切にうたれる。

亭主は女にして Millie と名をよび齢は五拾位と見へたり。此女は持病あって容体甚だ難渋に見へたりけれども、随分達者にして朝夕家事をととのへ、客を迎へて其蔭を以て今日のくらしとす。

ソーシテ非常に親切丁寧の天性なり。感動するに余りあれり。且此女一日われわれに話していふ。旅の空では物事皆不自由勝なり、況や今夜遠海を隔て来られし御方は更なり。ゆへに少しでも不満足の事あらは必ず置ずして知らせよ。力の及ぶ丈は尽すべし。それ世の中人間の交とは互に助け合へ人も己も隔なくするが則上帝の此人間斗を他物と異り斯る靈物を生し玉ひし御意などと、真情を明してかたられけり。かくの如き正直の人物然してまた一方には耶蘇教を信心し鬼神の説をとく事甚だ切也。剩へ日曜日などには

(1) 前掲書、245頁 (2) 前掲書、244頁

是非同伴して お寺に行かんと誘引百方を以す。然るに無心のわれわれらこれを辞するにまた骨を折れり。

この女亭主の説くところは 明かにキリスト教の信仰に支えられた隣人のモラルである。それは同じく人間であるという以外に、何ら特別のきづなでつながっていない人間にたいして、愛の行為を義務づけている。その前提には、凡ての人間にたいして造物者であり主である神がある。森はこの理を説く 女亭主のことばを日記に書きつけているけれども、このモラルの根底をなすものは、彼の理解を越えていた。彼は女亭主の親切を彼の女の天性に帰する。そしてこの美しい天性をそなえている彼の女が、「一方には耶蘇教を信じし鬼神の説をとくこと甚だ切」であることをいぶかっているのである。

(二) 薩摩の留学生とロオレンス・オリファント

慶応元年の薩藩留学生団のメンバーは、その一人であった松村淳蔵の「洋行談」によると次の19名である。1から15までが本来の留学生で、16から18は英国新聞紙のいわゆる senior members, 19は通訳である。

変名	実名	役名
1 上野良太郎 28才	(町田民部) 故久成	開成所掛大目付 学頭
2 杉浦弘蔵 23才	(畠山良之助) のち義成	当番頭
3 永井五百介 21才	(吉田己次) のち清成	開成所句読師 蘭学者
4 野田仲平 21才	(鮫島誠蔵) のち尚信	開成所訓導師英学にて 長崎に出 瓜生の門人
5 沢井鉄馬 19才	(森金之丞) のち有礼	初造士館句読師助 開成所諸生 英学
6 松村淳蔵 24才	(市来勘十郎)	奥御小姓, 開成所へ入塾
7 松元誠一 31才	(高見矢一)	開成所諸生
8 塩田権之丞 19才	(町田申四郎)	右同 蘭学者
9 清水兼次郎 15才	(町田謙次郎)	右同
10 三笠政之助 21才	(名越平馬)	当番頭
11 橋直輔 23才	(村橋直衛)	御小姓組 番頭
12 岩屋虎之介 23才	(東郷愛之介)	開成所諸生
13 浅倉省吾 23才	(田中静洲)	医師 開成所句読師 蘭学者
14 吉野清左衛門 25才	(中村宗見)	長崎へ出候諸生 英学 医者

* 薩藩海軍史(中) 896—898頁, 順序は必要にしたがって変更した。

- | | | | | |
|----|---------|-----|----------------------|-------------------------|
| 15 | 長 沢 鼎 | 13才 | (磯 永 彦 助) | 開 成 所 英学 |
| 16 | 石 垣 鋭之助 | | (新 納 刑 部) | 大目付御軍役日勤視察 |
| 17 | 出 水 泉 蔵 | | (松 木 弘 庵)
改メ 寺島宗則 | 御船奉行 教育掛
英蘭学に長したり |
| 18 | 関 研 蔵 | | (五代才助 友厚) | 御船奉行見習初測量者
蒸気船カピテン視察 |
| 19 | 高 木 政 次 | | (堀 壯次郎) | 英 通 弁 者 |

年少のためアバディーン（スコットランド）のグラバーの家に預けられて、グラマースクルに入った13才の長沢鼎をのぞいた14人が、ロンドン大学のユニバーシティカレッジに入学した。同校の1866—67年度のカレンダーを見ると、16名の日本人学生の名が見える。その中二人は長州藩の留学生である。その一人 Nomura (1863—64) は文久3年すなわち1863年に伊藤博文、井上馨、山尾庸三、遠藤謹助と共に渡英した野村弥吉すなわちのちの井上勝である。伊藤と井上は故国の急を聞いて急遽帰国し遠藤は学業不良で帰国、山尾は当時スコットランド造船局で研学中であった。Minami は南貞助で、彼と一緒に渡英した山崎小三郎は空しくロンドンで窮死したことが伊藤博文と高杉晋作の手紙に見えている。南は高杉晋作の義弟で、のち、ハリスの徒となって薩藩留学生たちと一種の同志関係を結ぶことになる。

(註) 伊藤博文伝上(260頁—264頁)にこの2通の手紙が引用されている。この手紙は英国渡航を企てた高杉が、伊藤春輔を伴って長崎に赴いた際、高杉から木戸井上に、また伊藤から井上に宛てて書き送ったもの、ともに慶応2年3月28日附である。高杉の書簡に左の如き一節がある。

薩には家老新納刑部、五代才助先日英より帰着、日々外国の事に手を附候様子に御座候。既に昨夜もメリケンに五人書生を遣せし也。金も余程いる様子、不敢願。是我邦所不及。○倫頓より書簡到来、遠藤は今年正月頃出立し此節帰国の様子なり。ここに可驚一事あり。義弟(南貞助)同行山崎生(山崎小三郎)倫頓にて病死す。是、金なども少く寒貧より病を起し候様子なり。可悲可愧。是亦国家恥辱の一端なり。

と嘆きながらも、このようにはじめて西洋に骨を埋めた「名臣」あるは、国家隆盛の兆であると誇っている。ここに言及されている慶応2年に米国に送られた5人の「書生」は、仁礼、江夏、種子島、吉原、湯池の5人で、モンソンの学校(Monson Academy)に入った。この人達はのち、ハリスの新生社に入ることになる。

この2人をのぞく14人が薩摩の留学生である。すべて1865年—66年次の入学生である。その姓を原綴りのまま写すと次のようになる。比定のほとんど難しいものもあるが、私の推定を前掲リストの順序に合わせて記しておく。

1. Wooyeno 2. Soogioora 3. Nagai 4. Noda 5. Savai
6. Mattumutta 7. Massumutta 8. Sevota 9. Suimdsa
10. Verikasa 11. Haysa 12. Cvaya 13. Aysakata 14. Yosino

(6)と(7)のどちらが松村で、どちらが松元であるかは実は決めがたい。特に10から13はこのローマ綴から日本名を想定することは不可能という外ない。

私は日本人名の此の異様なローマ字の綴りを見てみると、別々の歴史をもって発達した二つの異質の文化が、はじめて接触した際、その相互理解に、如何に今日では想像もつかない困難を伴っていたかをまざまざと見せられる思いがする（実は本質的には今日も変わっていないのかもしれないけれども）。

ユニバーシティカレッジの1866年—67年次のカレンダーの日本人学生として名ののっているのは、長州の2名の外は、Soogivoora, Nagai, Noda, Sawai, Matsumulla の5名だけになっている。故国の動乱のため学資がつかなくなって約半数が帰国したためである。慶応2年夏までに町田民部一人を残して帰国ぐみは帰国したらしい。もっとも長沢はアバディーンにあり、浅倉、吉野は、フランスに残っていた。

薩摩の留学生たちを訪れた変化は、半数ばかりの仲間が帰国を余儀なくされたということだけではなかった。この大きい変化をもたらす原因となったのは、1866年夏に、永井五百介（吉田清成）と野田仲平（鮫島尚信）がオリファントと共にアメリカにゆき、トーマス・レーク・ハリスに会ったことである。彼等は、当時ニューヨーク州アメヤニにあった新生社のコロニーの生活にふれ、一遍でハリスに心酔して帰った。そして彼等の報告は他の学生たちにつよい印象を与えた。木村匡によると森は、「彼等の言によって、ハリスを信じた」という。この「信」の内容が何であったかはなお吟味を要するが、この二人のアメリカ訪問が、留学生たちの進路を大きく変えるきっかけとなったことは疑ない。ある意味でそれは留学生たちの運命を狂わせた、少くとも永井や杉浦（畠山義成）にはそう感ずる日がくる。

沢井（森）や野田はそう感じなかったかもしれない。しかし、あるいは、それだからこそ、彼等にはハリスの許での経験と、そこで身についたものがあとあとまで彼等のうちに生きつづけ深い痕跡をのこすことになった。殊に森の場合、彼の思想や生き方に、これは決定的な影響をもった。木村匡もそう見ている^{*}。私はこの見方は正しいと考える。しからばその影響は、どのような点に認められるのか。私は本稿ではハリスの思想やその事業についての立ち入った考察はさげたい。その用意が十分でないことも一つの理由だが、それよりも余り超自然的な怪奇な要素をもつハリスの教義の詳細をのべることは必ずしも当時の日本人留学生のハリスへの傾倒を説明するのに役立つのみか、却ってそれを妨げるおそれがあるからである。ただハリスのつくっていたコミュニティあるいは、コロニー——それは将来実現されるべき理想社会のモデルであると共にその実現のための戦いの拠点でもあった——について一言しておくことは必要であろう。日本人たちは、ハリスのこのコロニーを見ることによって、彼とその教えとを信じたと考えられるからである。

* 「故森子爵の逸事に付て」（「国家教育」第22号，29頁）

たしかに、ハリスとの出会いは決して仕合せなものでなかった。前にものべたように、ロンドン大学での最初の学年が終るころになると、留学生たちにもヨーロッパの文明の輪廓がようやく把握され、森についていえば、その文明の根底にあるものをさぐるものが、彼自身の問題となりはじめていた。まさにこの時期に、吉田と鮫島を通じて彼等はハリスの存在を知った。この時から彼等とロオレンス オリファントとの間に新しいふかい交渉が生れた。それまで英国の社会や西洋文明への道案内の役をつとめていたオリファントは、この時点からハリスの開示する新世界の道案内となったのである。オリファントにとって、ヨーロッパ世界は救済しがたく頽廢した旧世界と旧文明で、オリファントはそれからの脱出に全存在を賭けていた。そして留学生たちはこのヨーロッパからの脱出行の道連れに選ばれた。不幸はこの事実のうちにあった。彼等はオーソドックスのキリスト教や西洋文明の諸原則を確かにつきとめる前にその批判を教えられることになった。キリスト教の諸原則が如何に英国の社会生活の中に生きているかを見極める前に、ハリスの理解にしがたがって、独自のキリスト教の原理にてらして、キリスト教や、キリスト教社会や文明にきびしい批判を加えることを学んだのである。我々はそのあらわれを、留学生たちがモンブラン登用に関して藩当局に提出した意見書の中に見ることが出来るであろう。それはともかくとして、オリファントは、ハリスの教えと事業の中に、新しい世界と文明の約束を見ていた。アメリカはこの意味で、約束の地であったし、またこの事業の中で日本は小さくない役割を受け持つはずであった。オリファントはエディンバラの友人ブラックウッド (the Blackwood Magazine の発行者) に宛ててこう書き送っている。

人類の最高の希望は米国の——そして日本の将来にかかっていると私は信じています。この二つはひどく異質のものですけれども。ここでの革命は政治的でなく道義的なものです。私がそれを敢てするとすれば、私が語りたいと考えるのは、ただこれ (道義の革命) についてです。私には今は私が真実と感じた真実であると知っていることしか書くことが出来ないのですが、それは世界がそう信じているものとはおそろしくかけ離れたものです。

ロオレンス・オリファントは日本の英国公使館に書記生として赴任早々東禅寺事件 (文久元年5月) で永戸浪士の襲撃にあい、重傷を負って帰国し外交官たることを断念し、1865年下院議員に選出された。もっともこれは彼の多年の宿願であった。彼は以前から、文筆活動によって名声を得ており、またジョン・ラッセルはじめ政界に有力な背景をもっており、その才能と、国内及び国際政治の知識によって政治家としての将来を期待されていた。またその才気と人間的魅力によって社交界の寵児であった。しかるに彼はその成功と名声の只中にあ

* Margaret Oliphant, Memoir of the Life of Laurence Oliphant and of Alice Oliphant his Wife, 1891, vol. II p. 63

って、次第に政治への絶望を深めていった。それは彼が社会と人間のシリアスな問題の解決に政治が役立っていない。否、解決に責任をもとんとさえしないと感じたためであった。オリファントの伝記を書いた彼の従姉妹のマーガレット・オリファントは、当時のオリファントの内生について、こう語っている⁽¹⁾。

手をふれるすべてのことに成功を取っていると見える人間が、実はその内面においてそれほどつよい不満を感じ現在の生活が堪えがたいものになり、それに憤っていたということは、もっとも理解に困難なことであった。

この外目にはもっとも輝かしい、しかも自分自身には堪えがたい空虚な生活の中に立ちすくんでいたオリファントの前に、T・L・ハリスが出現したのである。オリファントはこの人の中に、真実の「人生を生きる」道⁽²⁾を指し示してくれる師を見出したと信じたのである。彼はすべてを捨ててこの師に従う決意を堅めた。それは1865年中のことであった。彼がはじめてハリスを知ったのは、1860年のことだから、ハリスに従学する決意は一朝にしてつくられたものではない⁽²⁾。その背景には、彼の前半生の目的であった政治の現実と、彼が政治に長い間期待していたものとの間にひどい喰いちがいがあったことに関係があったにちがいない。彼が最後に議会の捨てる決心を堅めたのは、1867年の選挙法改正をめぐるディズレーリとグラッドストーンとのはげしい政治的駆け引きが与って力があつたとも伝えられている^(註)。

(註) グラッドストンの提案した進歩的な選挙法改正案が議会で否決されたため、自由党内閣が倒れ(1866年)ダービー卿を首班とする保守党内閣が成立した。ディズレーリは改革の阻止すべからざることを知って、殆んどグラッドストーン案そのままの改正案を議会に提出した。今度はグラッドストーンがこれに反対し、成立を阻止しようとした。オリファントは少数の党内の同志と共に、ディズレーリの改革案に賛成票を投じたが、彼はグラッドストンの政治的駆け引きに劣らず、ディズレーリのそれにふかい憤りと絶望を感じたのである。Margaret Oliphant; Memoir II, p. 11f, 15f 又 Trevelyan; Illustrated History of England, 1956 p. 657f., 又 Schneider-Lawton, p. 69f 参照。

ハリスの教は単に個人の救いだけを問題にしていなかった。オリファントは社会が当面している諸問題が真に解決される道がハリスの教と運動の中に用意されていると感じたにちがいない。このスピリチュアリズムはまた、ラヂカルな社会主義者であり、そのコロニイは一種の共産体であった。スピリチュアリズムはある意味でそれを支える力であり、人間と社会が直面しているもっとも現実的な問題の解決のための要請であつたといつてよい。オリファントは、ハリスを信じて自己のすべてをその事業に賭けたのである。留学生がオリファントに会ったのは彼が名声と成功の頂点にたちながら、その世界からの脱出の意志を堅めつつあつた時期に當っていた。1866年夏オリファントが、吉田と鮫島を伴って米国にハリスを訪ねたのは、実はハリスのコロニイに入る許を得るためであった。この時には彼の切願にも拘らずハ

(1) Margaret Oliphant Memoir, Vol. II, p.13

(2) Schneider, H.W. and Lawton, G, A Prophet and A Pilgrim (Harris と Oliphant についてのもっとも周到な研究) Columbia Univ, Press. 1942, p. 65ff, 120ff,

リスはオリファントを拒んだ。英国上流社会の贅沢と放恣と怠惰の生活の中で身についたものが如何に脱却に困難かを知っていたからである。オリファントは実行によって過去の一切との袂別意志の堅さを 実証しなければならなかった。ハリスは彼に議会内でのその発言を禁じた。彼は、オリファントに「議会における失敗」を要求したのである。これがオリファントを新生社にうけ入れるための条件であった。新生社には更に、肉体の上に加えられるきびしい艱苦の生活が待っていた。彼はその生活をよるこんで生きなければならなかったのである。オリファントは第一の試練に堪えた。この選択は、留学生たちを驚かせた。小楠が二甥にあてた手紙の中でいっているように、それが彼等のハリスへの傾斜を決定的にした。小楠の文章をもう一度引くと、

フリハント再び云、我は役事相断り（下院の長を勤めたりし由）エル・ハリスに随従し修行せんと欲すとの咄し有之、薩の兩人も甚驚き遂にフリハントと共にアメリカに渡り、エル・ハリスに従学せり

とある。小楠はこれにつづいて、ハリスの「塾風」をのべて「エル・ハリスは退隠村居門人30人余有之。相共に耕して講学せり。其教たるや書を読むを主とせず、講論を貴ばず、専ら良心を磨き私心を去る実行を主とし、日夜修行間断なし」といっている。これはハリスのコロニイの生活の輪廓を略々正確に伝えているといつてよい。

ハリスのコロニイは、その中で人間が再生をとげる組織であると共に、神において再生した兄弟が、その任務(Use)に服しつつ、社会の再生のために働く拠点でもあった。ハリスのコロニイのメンバーはコロニイを the Use とよんだ。そこでは、きびしい労働とハリスにたいする絶対随順の生活が課せられる。それを通じて、自然的自己と欲望の否定が行ぜられる。はげしい労働は、「肉体を十字架につける」行為であり、それは智慧と神における新生にいたる道であった。神を文字通りに「主」としてこれにしたがう生が、人間を真の兄弟にする。地上にこの「新生の兄弟たち」の国を築く、これが新生社 The Brotherhood of the New Life の追求していた目的であった。

(註) “The Use” は神が地上に建設しつつある「彼」の「新なる王国」である、あるいはその vital germである と新生社のメンバーは信じいた。^{*}

新生社にたいする the Use という呼称は、明らかにスエデンボルグの用語をかりたものである。次の引用は、スエデンボルグの「天界と地獄」からのものだが、新生社のコロニイは、スエデンボルグの「天界」を地上の現実にする組織であったといつてよいであろう。

天界は単一の人として、したがって一個の人として、主によって支配されている。そこにある者は、「用」(Use)に従って結ばれており、従って共通の善のために用を遂げないものは、異質のものとして、天界から放逐される。用を遂げるとは、共通の善のた

* Oliphant to Cowper, 6th Nov, 1868.

めに他の者に喜ばれることを意志することであるが、しかし共通の善のためでなく、自分のために他の者によろこばれることを意志することは「用を遂げる」ことではない。後者は、自分を何者にもまさって愛する類の者であるが、前者は主を何ものにもまさって愛する類のものである。ここから、天界にある者が一個の人として行動することが生れており、この事を彼らは彼ら自身からなさずに、主からなしているのである。なぜなら、彼らは主を唯一の者、あらゆるものの源泉と仰ぎ、主の王国を、その善が求められねばならない全般的なものとして目指すからである。^{*}

(島田四郎氏訳による。1,2ヶ所字句を変えさせて頂いた。お宥し頂きたい。)

この「用」の思想の前提には、文字通りに解せられた「人類一体」の思想がある。人類社会が一箇の有機体として把えられるのである。ハリスにおいては、人類社会の有機的連帯性が、より具象的に、宇宙を貫く「一大人体の観念」において把えられるのである。ここには、ハリスの門から出た新井奥遼(後述)が、それについて説くところを引用して、ハリスの教義の一斑を窺うことにする。

宇宙の宇宙を貫通して、無疆に織り立ちたる一大人体あり。我等この地球にあるものも——現状の虧缺あるに拘らず、——我が先天的程度において素より各々その分子たり。故に、我等は、新生命に由りて、この大人の体制において統一せらるるに及んで 始めて人格の完全を得べし。

されば、我等の中に一人邪念を懐き、暴行を為すあれば、宇宙の大人は直接間接の点なからずと離も、これが為に其の程度において榮耀を欠くに至る。而して我が主キリストは常に直接に之を感じらる。これキリストは宇宙の被造人と異り必ず 通貫して而して超越たる所以なり。

人類社会の連帯性は、自然的事実でなく、キリストを信ずるところにはじめて回復される事態であり、コロニイはその回復の組織であり、一つの「小世界」であり、スピリチュアリズムは、これの体現(embodiment)の方法であった。

新生社のメンバーとなったものは、その古い名を捨てて社中名^(註) the Use name を与えられた。古い「我」をふり捨てることにつながるものであろう。はげしい労働は自然的自己を否定する行であるとともに、「用」の遂行であった。それにたいして、報酬はない。それはただちに「社会」Community のためである。したがって、必要なものは、その働きと無関係に社会から得るのである。社中では、「私のもの」はない。それは、一種の共産体をなしていた。

(註) 新生社のメンバーは、ハリスをもっぱら Faithful という社中名でよんだ。オリファントは Woodbine (忍冬) である。彼はクーパーの“Mr. Oliphant”という呼びかけに抗議して、「オリ

* スエデンボルグ、「天界と地獄」第8章63—64

ファントはもう死にました。今生きているのは、小さい愛すべき Woodbine です」と述べている
(1868年1月3日附書簡)

鮫島と吉田を一遍でハリスに傾倒させた秘密を解く最大のかぎは、the Use とよばれていたハリスのコロニイの生活にあった。彼等はそれを見ることによってハリスの教が真実であることを「信じた」のであり、また彼等の「言によって」、森も「ハリスを信じた」のである。⁽¹⁾我々はロオレンス・オリファントの手紙によって、⁽²⁾ハリスのコロニイの生活にふれた日本人をもっともつよく打ったものは、そこを領している愛の気 (Sphere) と労働の生活であったことを知ることができる。オリファントは日本人の心の「開いていること」が、心の「閉じている」一般の西洋人が感じとることのできない精妙の「気」をいちやく感じとり受けとめることを可能にするのだと解釈しているが、コロニイの生活を支える「用」の思想そのものが、日本の武士たちにとって、受けいれやすくもあり、又強く訴える力をもっていたことも忘れられてはならないだろう。

吉田と鮫島は夏休一杯を、アメニヤに過したと思われる。その間に彼等はハリスの今日のキリスト教についての仮借のない批判をきいた。又日本の厳しい禁教政策も話題にのぼった。さらに日本の風俗習慣と共に当然日本の現状特に政情が問題になったであろう。こうして二人のアメニヤ滞在が機縁となって、ハリスの日本にたいする積極的實際的関心が生れ、そこから具体的な「日本の問題」が成立した。薩摩の留学生とハリスとの関係が、ハリスの宗教的であると同時に極めて實際的、政治的でもあった日本への関心のふかまりの中で、深められていったことは留意されなければならない。

鮫島や吉田が一朝にしてハリスを信じたのは、彼のなかにまさしく生ける孔夫子を見たと思信じたのもその理由の一つであったろう。だが、それ以上に、彼等を強くとらえたものは、ハリスの教の中に、“Only protection for Japan against the foreigners”⁽³⁾を見たと思信じたからである。外国に立ちむかうために日本は一つにならねばならない。それを可能にするものは、愛と協同の力 the power of love and of co-operation である。そして彼等は、この二つのものの具現をハリスのコロニイに見たのである。それを見ることによって彼等はハリスを信じた。そしてこの感動がロンドンに帰った二人から他の留学生たちに伝えられて、彼等もまたハリスの徒となったのである。

㊦ 薩摩の留学生とトマス・レーク・ハリスとの出会い。

オリファントと共にハリスのコロニイを訪れ、ハリスに心酔して帰った鮫島と吉田の報告は、留学生たちの間に、ハリスにたいする深甚の関心を生んだ。海門山人は、彼等がはじめ

(1) 木村匡「森先生伝」30頁

(2) Oliphant to Cowper, 29th Sept. (1867)

(3) Oliphant to Mrs Cowper 13th June (1867)

てハリスを知り、ハリスの徒となった経緯を次のように述べている。

翌年 慶応2年
西暦1866年 夏期休業を利用し、見聞を広めんと欲し、森及び松村淳蔵は、大陸に渡り露に遊び、セントペテルスブルグに至り、一ヶ月にして帰り、此時鮫島、寺島（吉田の誤り）兩人はオリファントと伴ひ、米國に遊ぶ。船中談道徳宗教の事に及ぶ。兩人孔夫子を宗とするを説く。オリファント曰く、孔夫子既に去って亡し、只だ其遺書あるのみ。今日宛然生孔夫子あり、ハリス先生といふ。米の紐育州に在り、子等之を見んと欲せば、予之を紹介せんと。兩人大いに喜び、米に着くに及び行て之を見たり。二人帰りて之を森に語る。森等亦た、之を見んことを願へり。翌春 1867年
慶応3年 仏國巴理大博覽會あり、ハリス米より行て之を見る。帰途英に遊び倫敦に至る。森等由てオリファントの所謂生孔夫子を見るを得たり。彼等其徒弟となり、耶蘇の門に入り、アーメンの声頗る熱心なりき。

この急速な傾倒は多かれ少なかれ留学生の全部に見られたことであつた。オリファントは、この夏休みの訪米以前には、おそらくハリスについては何も語つたことがなかつたであらう。しかし二人の仲間が、直接ハリスにふれたことがきっかけとなつて、留学生たちの間にハリスへのつよい関心が生れたのを見ると、オリファントは、積極的にその機会を捉えた。かくして、オリファントと留学生の間に、新しい関係が生れた。留学生はハリス教の求道者となつた。そして、オリファントはその求道における彼等の指導者であつた。

こうして1867年春、留学生たちは、十分な準備をもつてハリスを英國に迎えた。ハリスの英國滞在は、自著出版の用件もあつて、かなり長く、9月頃までは英國に止まつていた。その間留学生たちは、熱心にその教をうけたのみではなかつた。彼等は、後にのべるように、薩摩藩の使節、岩下方平やその随員たちを彼に引き合せている。松村もその「洋行談」の中で、ハリスが、英國に來たとき、岩下や野村、市來に面談したことをのべている。その面談の内容にふれていないが、それは、鮫島吉田がはじめて米國にハリスを訪ねたときに、ハリスがキリスト教について二人に語つたことと、関係があつたことを示唆している。松村の「洋行談」はいう。

鮫島吉田の両氏は「ハリス」と面会して英國に帰り來れり、時に同氏の談に日本は耶蘇を排斥し、同宗の弘布を好まざるに似たり。成程今日の耶蘇教は乱れて、正しき教とは言われず、之を容れて国情を乱すは不可なり云々と語られしより、後「ロンドン」府に來られ岩下、市來、野村の諸氏にも面談せられたり。頼みとあれば日本にても行きたしとの望ありしとも聞けり。同宗弘布の下心もありしならん。

極めて簡単な記事だが、ハリスに日本行き意志があり、そのことにふれて岩下とハリスの間に会談がおこなわれたことが推定されるのである。松村はハリスに「宗教弘布の下心」があつたのであらうとのべているが、その宗教弘布が単なる宗教の問題でなかつたことを彼

も亦知っていたはずである。

木村は「ハリス氏は日本の国風を愛し、その鯨島等に会するや、日本の風俗習慣を聞き、かつ、現今のキリスト教に浸染せざるは日本及びアフリカの某州あるのみ、日本も亦今日において、その侵入を防ぐの計を講ぜざるべからざるを説いた^{*}」と述べている。

ここに語られているのは、キリスト教の日本侵入防止の計であるが、しかし実際に留学生たちが、ハリス、オリファントと真剣に討議を重ねた主題は、まづ日本を守る問題であり、それとの関連において神による人間の新生についてのハリスの教が追求されたのである。ハリスの教義においては、信仰は単に個人の内生にかかわる問題ではない。それは現実の社会と世界のあり方を決する力でなければならなかった。ハリスが日本行きを希望した際、それが「同宗弘布」のためであったことは当然として、ハリス自身の表現にしがえば、それは「個々の日本人の再生と、全体としての日本の再生」regeneration of the Japanese individually and of Japan collectively のためである。その再生は、神による人間の新生であるとともに、政治的・社会的な日本の再編成をふくみ、しかもハリスはある程度具体的に日本変革のプログラムを用意していたのである。このプログラムを明らかにしたのが、「日本の予言」A Prophecy of Japan である。これは1867年7月2日の日附をもつ。明らかにロンドン滞在中にハリスの起草したものだが、これが書かれた背景に、ハリスの、人間と世界の再生についての教説と共に、日本が現実^{*}に直面している諸問題が、ハリスと日本人留学生の不断の真剣な話題になった事実が考えられるのである。

「日本の予言」の内容の検討に入るまえに、薩摩の留学生がハリスの徒弟となった時期についての考証を加えておく。

中井弘の「航海新説」(明治文化全集第16巻、外国文化篇)の中にその時期を示す興味ある記事があるのである。本書は中井が慶応2年10月15日、土佐の結城幸安を伴って英国にむけて長崎港を出帆してから、英国に到着(同年12月14日)して、翌年の春英国を去り、町田久成、野村宗七等と一緒に帰国したその旅行の記録と感想である。

本書の第一部は、杉浦、松村と共に St. John's Hospital を見学した12月26日までで、この部分だけが日暦の体裁をとる。それに日附を欠いた第二部がつづく。「龍動(ロンドン)新報」「帰途の概略」の二章から成る。問題の記事は、この「帰途の概略」と題された一篇中唯一の日附のある記事、「4月8日」(この日彼はパリに到着した)の条の前がきをなす文章である。

市来(政清)野村(宗七)吉野(清左エ門)ノ三士倫同(ロンドン)ニ来ル。先是、余及び上野氏(町田民部)ト共ニ帰朝ノ慮アリ。今日諸友ノ説ヲ聞クニ、野村氏ハ沢井、長

* 木村匡「森先生伝」29頁

井、吉野ノ三士ヲ伴ッテハリースフル先生ノ寓樓ヲ訪フテ二百里外ニ発車セリ。市来氏ハ吉野ヲ伴ッテ今夕仏国ニ発車ス。余プーハル（フーパーの誤り）ト共ニケンノンスツリート火輪車ヨリ七十里余、直ニ仏国へ渡海シタリ。今朝未明ニ上野、野村の二士ハ仏国ニ趣キタリ。

市来、野村は巴里大博覧会への薩摩の使節、岩下方平の随員としてヨーロッパに來た。当時フランスで勉強中の吉野が二人を案内してロンドンに來たのである。彼等が、巴里に着いたのは、慶応3年1月2日（洋曆2月2日）であった。

市来と野村が英国を訪問して留学生たちと交際したのは、洋曆の3月末のことであつたらしい。そうすると野村・市来と前後してロンドンを辞した中井がパリに着いた4月8日は、洋曆によっていると見た方が適当であろう。野村が国許に帰りついたのが慶応3年5月といわれるのも洋曆説を有利にする。そうすれば中井の英国滞在は約3ヶ月となる。そして彼は1867年春といわれるハリスのロンドン訪問から1ヶ月位しかたない時期に、ロンドンを離れたと見なければならぬ。しかも、この中井のロンドン滞在中の記事中に、留学生たちが、ハリスの徒になっていたことを示す証言を見出すことができるのである。

前引の「航海新説」の記事に、野村はロンドンを離れる前に、沢井、長井(永井)、吉野と共に、「ハリースフル」先生を訪問した。この「ハリースフル先生」はすなわち当時ロンドンに滞在中のハリスと見てよい。そしてこの記事は彼が、留学生たちの間で、Faithful と呼ばれていことを示唆しているのである。この呼称は、英語を解さない中井の手でハリスとその社中名「フェイスフル」とが奇妙な合成を遂げた結果に相違ない。この解釈が正しいなら、（それ以外の解釈は不可能だと思われる）ハリスはこの時期に留学生たちの間で社中名により「フェイスフル」とよばれていたことになる。これはこの時期にすでに留学生とハリスとの間に師弟の関係が成立していたことを示すものである。我々はさらに1868年代に、プロクトンの「新生社」の日本人の間でハリスが日本風に「誠翁」、オリファントが「忍冬」とよばれていたことを知るのである。（京都大学国史研究室所蔵、吉田（清成）文書2595参照）

「日本の予言」はハリスの日本変革の構想だが、そのうちに岩下方平や野田、永井などへの言及も見られる。松村の「洋行談」や木村匡の「森先生伝」中にふくまれている情報、さらにロオレンス・オリファント書簡などを参照して読むと、この文書が成立する背景が、ある程度まで推測される。それによって我々は1866年夏休み後の薩摩の留学生の消息の一端を垣間見ることができる。それは森の伝記中の空白をいくらか埋めるのに役立つ。我々はそこに彼がハリスによって、はじめてキリスト教に導かれて入信するにいたった経緯の輪廓を見ることができるのである。

ハリスは『日本の予言』を「私はこのように〈日本の問題〉を解決した」という言葉で書きはじめた。そして「日本」がハリスの具体的な問題となったのはおそらく、1866年夏オリ

ファントに伴われて 薩摩の二人の留学生がハリスのコロニイを訪問したときにはじまる。ハリスの訪英目的には、そこで残りの日本からの留学生に会うこと、また「日本問題」について、もっと具体的な検討を加えることがふくまれていたであろう。私はさらにハリスは、岩下がフランスに来る、あるいは来たといふ情報を入手していたかもしれないと考える。「日本の予言」の内容から判断すると、ハリスははじめ岩下との会談に、かなり重大な期待をかけていたようにおもわれるのである。ハリスと岩下との会談は、おそらくは留学生たちのつよい希望でおこなわれたものであったろう。彼等はハリスの日本再生構想をきいたとき、当然薩摩がその事において中心の役割を引受けるべきだと考えたにちがいない。だから岩下の訪英を好機としてこの二人の会談を推進した。野村や市来をハリスに会わせてのもこの会談にたいする 予備工作であったのではなからうか。中井の「航海新説」の4月8日の条の前書き中の野村、市来のハリス訪問は、その前にいくたびかの会談のあとを受けて、二人が英国を辞去するに際しての挨拶であったかもしれない。

岩下にたいする期待は、しかし、裏切られた。ハリスは岩下が代表する薩摩の旧時代の政治家たち (older politicians) を見限る。そして「日本の若い者たち」に希望をかけ、「日本の予言」日本変革を準備するために、これを教育しようという方針を立てるに至ったのである。ハリス・岩下会見の時期はわからない。しかしそれは「日本の予言」が書かれた1867年7月2日に先立つそう遠くない日の事であったろう。

薩藩の博覧会使節の名目で渡仏した岩下の主目的は、実は五代が渡欧した際、モンブランとの間に締結した、藩内の産業開発及び対ヨーロッパ貿易のための 商社設立契約に正式に調印することであった。さらに岩下はモンブランを薩藩へ政治顧問として招聘する任務をも帯びていた。岩下がこの任務をはたして、マルセイユから帰国の途についたのは、慶応3年7月29日(洋暦8月28日)であり、モンブランと数人の私人技術者が同行した。薩摩とモンブランとの間にこれだけ 立入った関係がつくられていた以上、岩下が若い留学生たちの夢のような計画にまともに取り合うはずはなかった。「日本の予言」の書かれた7月2日には、留学生たちはまだ岩下説得を断念していない。野田と永井は彼に何通かの手紙を書いた。しかしハリスは、岩下が彼等を「裏切る」ことを見越し、岩下と一切係りを断つ方針を定めた。薩摩藩の要路と結んでの日本改革策を抛棄したのである。モンブラン登用に関する留学生たちの岩下に対する抗議について「薩藩海軍史」(「中」978頁)は「岩下は白山(モンブラン)と商社の協定をなせしが、留学生等はこれに関して甚だ不安を感じ、岩下等の渡英を機とし、その不可なるを建議せるも、岩下はこの際如何とも為しがたきを論じてこれに应ぜず。依って留学生は建言書を 大久保利通等におくり藩庁の反省をもとめたり」と書いている。しかし留学生にとって、問題は、根本においては、五代—モンブラン的富国強兵路線と、ハリスの指導下に薩摩藩の再生を求め、そして再編された薩摩を「中核」(nucleus)として日本「国

家の回復」The resurrection of the nationalityをはかるといふ路線との間の選択にかかわっていたのである。少くも「日本の予言」によれば、ハリスの拋棄された日本改革の構想は、このようなものであったらしい。

留学生が藩庁におくった建言書の日附は1867年7月10日になっている。この時までには、彼等にも岩下と交渉を断つ方針が立ったと考えてよい。これはまた彼等がアメリカに渡ってハリスに従学する意志を最終的に堅めた時であると見てよいであろう。ロオレンス・オリファントも6月中旬には「新生社」入りを許され、ハリスから出発の指図の与えられるのを待機しつつあった。^{*}この「建言書」は全文を引用する値打ちがある。これは薩藩留学生の英国留学の決算書ともいべきもので、ヨーロッパ文明にたいする評価には、1866年夏における無条件的渴仰とは大きな違いがある。ここにオリファントとハリスのつよい影響があることは、明白である。「建言書」中の「或る翁」はすなわち、トマス・レイク・ハリスにほかならない。この「建言書」の背後にはハリスがいた。この時点では、薩藩留学生の行動の背後にはいつもハリスとオリファントがいたといつてよい。

薩摩藩に提出された留学生の建言書

微臣等寡少之識、且即今之世態をも不明にして建言仕候儀、聊恐多奉存候得共、存付候義を閉口仕居候て却て如何と奉存、衆議之趣並承得候事情書等相添、左に申上候間、何卒御披露被成下度奉願候。

此節「モンブラン」並数多之私人岩下家杯御同船、御国之様出帆仕る之段承り、如何成趣向を以斯く遠路へ勞を不厭罷越候哉と央疑惑に存罷居申候処、幸岩下家杯御入英相成委細承知仕候処、此節白山之趣向には御前へ罷出御直に天下之事情、且つ社中取締等之件を建白可仕との段承申候。就ては私共最初より、白山の尽力に付ては一向信用立兼候故、始終注意仕居候得共、只今に至り其真意を見留不申、唯彼の言には御国の為に尽力すとの趣、数々承候得共、彼比義之貴感大的なくして何故薩之為尽力可仕哉、況哉薩之臣と相唱可申哉、実は決して左に有御坐間敷と奉存候。又たとへ志は左もあるにせよ、国内之事情に貫通せずして、誰か其国政之一片を任せらるべき理更に有御坐間敷奉存候。最初より私共承知仕候には、白山へは万事国内之形勢等逐一相通し無之候之段、然れば如何して彼の議論之適當すべき道理更に有御坐間敷奉存候。真実「モンブラン」御国家之為に尽力之意夢々無覚束奉存候。故に私共申談彼等之航を相止度、岩下家へ御義論に及申候処、逆も此節彼等之航行を相止候義、実に六ヶ敷、勿論万事只今迄委任相成居候時なれば、此節無理に抵抗して議論に及び候はば、全絶之外有之まじく、故に何分此節御国へ来着之上、断然之御所置被相立候外手術無之との段承り、無和理黙止居候次第御坐候。先達て「ガラバ」対面之折、白山へ「ガラバ」の言けるは、汝多財を薩に貸すといへども当時薩国頗

* Oliphant to Mrs. Cowper, 13th June (1867)

に疲弊し通も返財義即今無覚束などと云々。然るに白山言らく、若薩が返財せぬ時は、早速仏之軍艦を横浜より彼地へ相向可申故に全く恐るる 処無之と云ひしと、「ガラバ」之直咄しを承候。英人より承候次第御座候。実に可恐之期に御坐候半、扱彼等来著之上は大小となく建白申すべきは当然にて、臣等之恐懼する廉は当時御国許において、白山余程名誉 且一入御国家之為に無二之尽力すとの段相聞得居由承候故、若も不通情之件数多有之、乍恐不図御動揺彼れの建築を御許容相成候も難計奉存、実に寝食をも不安、御聰慮を以旁御斟酌有御坐度千万奉祈訟候。

別紙にも段々古今の事実を記載せし通り、欧土之人宇宙に災害を流布せし事、実に難数、唯未嘗一人の歐人已の利を 思はず人の為に赤心を尽せる例、古今之歴史に見不得と或翁の説を承り、尤私共にも夫等之処は至極注意仕居候得共、未だ嘗て見聞に及び不申候。就中仏之歴史等を読みするに、利欲傲驕の余には帝に反し、或は流罪し、父母兄弟離散し友を棄て、甚きに至っては帝を斬罪し、高位の徒を悉斬罪流罪に処せし例数多なり。況んや当時之仏帝においてをや、吾帝を追放し、4年を限て誓詞し、大統領となり、其限の終へる期にあたって、戟を以、良臣を追払ひ、万民を押へ自ら号して帝と称す。仏都に止り抵抗せしものを悉く砲劍の性となし殆ど道路は血流せしとなむ。

私共当国へ到着仕候砌は、朦々たる耳目の為に奪れ、万端歎息にのみ相傾き居候処、日を経るままに恐避すべきの節漸く相顕、当時に至り一の善友を求得、欧罷巴州は勿論米地の風情も委細承り、唯取るべきの小なると避忌すべき大なるとを 理解せし次第に御坐候。英の政府之形勢も外面は成程公平なる哉に蒙眉には相見得候へ共、反て左にあらず、皆技巧権暴のみと此の英人の話説を承り、実に其通之事御坐候。己を利せんには全く道を打忘れ、諸州諸島を奪掠し、友強拒弱は欧州米州之質也。

別紙二通内一通は右英国人「オリハント」氏乞求て彼れの直筆より荒増翻訳仕候。一通同断事実之留、

右之通騒暴之文面を以乍恐奉申上候間、御披露被成下度奉頼候、恐々謹言

67の（慶三）

7月10日

大久保一藏様

伊集院左中様

永 井 五百助

野 田 仲 平

沢 井 鉄 馬

松 村 淳 藏

杉 浦 弘 藏

第三章 新生社において薩藩留學生が 験したもの

(一) トマスレークハリスの「日本の予言」と 薩藩留學生の渡米

1866年夏、アメリヤを訪れた永井と野田は、おそらくはその夏休み一杯を新生社で過したのであろう。彼等はそこでふれた愛の「氣」(sphere)と労働の生活に打たれて、ハリスとその教への傾倒を動かないものにした。同時にハリスは彼等を通して日本への関心を深めた。ハリスの意識の中でいわゆる「日本の問題」が次第に重みを増してゆくその発端は、この時期に溯ると見てよいであろう。

これが1867年春のハリスのロンドン訪問と、ここでの薩藩留學生とハリスとの出会いの背景にあった事実である。ハリスはロンドンにゆく前に、日本問題について一の「処方」をもっていた。それを薩藩留學生と共にもっと具体的に検討することも、彼の訪英の目的の一つであったかもしれない。薩摩の重役岩下に会見することも、予定されていたのであろう。その前提には、薩の首脳と結んで薩藩を再組織することによって、これを日本再生、あるいは国家回復の事業の中核(拠点)とするという構想があった。だが岩下との会見によって、この計画がおこなわれたいことをハリスは知った。「日本の予言」は日本再生に関する修正計画(第二の構想)であった。

「日本再生」の事業は、いうまでもなく、ハリスの新生社の運動の一翼であった。彼は人間と世界の再生、あるいは全く異質の新しい文明の創造を追求していた。日本はこの運動の拠点としてハリスに選ばれたのである。

ハリスのメモ「日本の予言」は、次のような言葉で書きはじめられている。

私は日本の問題を次のように解決した。

事の成否は、その遂行に当る大名が見出されるかどうかにかかっている。この仕事を引受ける大名がなければ、日本の崩壊と滅亡は急速であらう。

ハリスは、日本の封建制は心の髓まで腐っていると見る。^(註)その全体の覆滅から、ある一つの藩が救われることに日本の再生—国家の回復の可能性がかかっているとハリスは考える。新生の真理にしたがってその藩が再組織されることによって、それが新しい日本の中核(nucleus)となるというのである。問題は一つ—手を着けるべき場所と信頼できる大名を見出すことである。ハリスの日本再生のプログラムは大要次のようなものであった。

(註) ハリスは岩下を通じて、薩摩の古い政治家たちの道義的頹敗の中に、具体的にそれを見たのであ

に疲弊しども返財義即今無覚束などと云々。然るに白山言らく、若薩が返財せぬ時は、早速仏之軍艦を横濱より彼地へ相向可申故に全く恐るる 処無之と云ひしと、「ガラバ」之直咄しを承候。英人より承候次第御座候。実に可恐之期に御坐候半、扱彼等来著之上は大小となく建白申すべきは当然にて、臣等之恐懼する廉は当時御国許において、白山余程名誉 且一入御国家之為に無二之尽力すとの段相聞得居由承候故、若も不通情之件数多有之、乍恐不凶御動揺彼れの建策を御許容相成候も難計奉存、実に寢食をも不安、御聰慮を以旁御斟酌有御坐度千万奉祈訟候。

別紙にも段々古今の事実を記載せし通り、欧土之人宇宙に災害を流布せし事、実に難数、唯未嘗一人の欧人己の利を 思はず人の為に赤心を尽せる例、古今之歴史に見不得と或翁の説を承り、尤私共にも夫等之処は至極注意仕居候得共、未だ嘗て見聞に及び不申候。就中仏之歴史等を読みするに、利欲傲驕の余には帝に反し、或は流罪し、父母兄弟離散し友を棄て、甚きに至っては帝を斬罪し、高位の徒を悉斬罪流罪に処せし例数多なり。況んや当時之仏帝においてをや、吾帝を追放し、4年を限り誓詞し、大統領となり、其限の終へる期にあたって、戟を以、良臣を追ひ、万民を押へ自ら号して帝と称す。仏都に止り抵抗せしものを悉く砲劍の牲となし殆ど道路は血流せしとなむ。

私共当国へ到着仕候砌は、朦々たる耳目の為に奪れ、万端歎息にのみ相傾き居候処、日を経るままに恐避すべき節漸く相顕、当時に至り一の善友を求得、欧罷巴州は勿論米地の風情も委細承り、唯取るべきの小なると避忌すべき大なるとを 理解せし次第に御坐候。英の政府之形勢も外面は成程公平なる哉に蒙眉には相見得候へ共、反て左にあらず、皆技巧権暴のみと此の英人の話説を承り、実に其通之事御坐候。己を利せんには全く道を打忘れ、諸州諸島を奪掠し、友強拒弱は欧州米州之質也。

別紙二通内一通は右英国人「オリハント」氏乞求て彼れの直筆より荒増翻訳仕候。一通同断事实之留、

右之通竊暴之文面を以乍恐奉申上候間、御披露被成下度奉頼候、恐々謹言

67の(慶三)

7月10日

大久保一藏様

伊集院左中様

永 井 五百助

野 田 仲 平

沢 井 鉄 馬

松 村 淳 蔵

杉 浦 弘 蔵

ろう。彼等は愛国の念を欠き、権謀術数をもって政治を僭している。それは、恰もいわゆるクリスチャンが信仰を僭する (profess religions) 如きものだとする。

ある大名が新生を受け容れる。彼は新生の真理を受け容れつつある「進んだ日本人」 The advanced Japanese を用い、軍のカレッジ a Military College を創設する。彼は全財源をあげて神聖国軍 a Japanese Divine Army の組織に当る。そして十分な力が養われるのを待って、領内から神的秩序に反する一切のものを駆除する。新生の真理によるに藩のラヂカルな再組織である。それによって何ものも抵抗しえない力をそれは備え、国家回復の拠点たりうるのである。ある時点で、軍のカレッジは「知ることの望ましい一切」を教える「学校」と成る。

ハリスが岩下と会見して 薩摩藩の主脳部と結び薩摩を日本再生の事業の拠点とする計画が捨てられたことから、どこかに一人の大名を見つけることが第一の問題となった。その大名は全身全霊をもって事に当る人でなければならない。そして彼の任務の中心は、ハリスの悪との戦いの中で彼に変わらない支持を与え、これを助けることであった。ハリスは、自己の教養した「進んだ日本人」とともに日本に渡ることを期していた。日本にも新生社 The Brotherhood of the New Life が結成される。これが個々の日本人の再生に全力を挙げることによって、日本の全体としての再生のための真の拠点となるのである。

ハリスは、新生をうけいれた大名が、全力を挙げて神聖国軍を組織することを期待しているが、これは軍事力によって敵対勢力を制圧して国家の統一を図ることを考えたのではないように見える。その大名は、国内の凡ゆる抗争にたいし中立政策を堅持する。その中立政策の裏付けとして「国軍」(藩の軍隊でない)が組織されるのである。ハリスは人間再生を通じて日本が変革される過程を次のように記述している。

その大名は一兵士として自己を訓練し、一切の贅沢をすて、すべての資源と力とを人民の福祉のために用いる。人民の心の中に砦がきづかれて、急速に彼をつよくする。同時に真の政策が示されることによって、国内の愛国勢力 (patriotic element) が彼の周囲に結集される。すべての成長が中心からおこる……。

松村はハリスが岩下に会ったのは「同宗弘布の下心」があつてのことだろうと記しているが、ハリスは日本をキリスト教によって侵されていない土地として注目したのみでなく封建制が崩壊しようとしている日本の歴史的政治的状況が、新生の真理が一藩を再生させることを通して、直ちに国家を再生させる力として機能する可能性を胎んでいと判断していた。だからこの事業にとって決定的なことは、「一人の大名」が見出されることであつたが、実はその前に、新生の真理を受け容れる「進んだ日本人」が養成されていることがこれに劣らず決定的な重要性をもつはずであつた。彼等の第一の資格は、何よりも、「義しい人間」であることであつた。ハリス的な意味で「義しく」あるためには、その人において「私己」

と「旧我」が否定されていることが必要であった。彼等は新生社をつくる仕事にも、軍のカレジを創設維持する仕事にも、その軍のカレジが切りかえられたのちの学校の教育にも、藩主の側近としての仕事にも、また新しい国家のための政策樹立にもそれぞれ関与する。彼等は極めて多方面な仕事に手わけをしてたづさわることが予定されていたのであろう。ハリスはオリファントをこの日本問題に専念させる意向をもっていた。彼はそのためしばらくアメリカにおける任務を免除される。「彼は日本人とともに止り、あるいは行く」と記されているのは、その時が来るまで彼はアメリカで日本人の教育に当り、時が来たとき一緒に日本に赴くという意であらう。ハリスも同行するはずであった。

この修正された日本再生の計画は、薩藩留学生には、はじめ若干の抵抗を感せずにはすませないものであった。彼等は当然薩摩こそこの事業の拠点であるべきことを期待していたのである。しかし新しいプログラムは、任意の藩において、その藩主を中心としてすすめられるものとなったのである。

だが、このふるい藩意識はやがてのりこえられていった。(Internally they are about done with Satsuma in their old relation.)

「日本の予言」にのべられた日本再生の計画との結びつきにおいて薩藩留学生の渡米が実現したことは、疑う余地がない。彼等を米国に渡航させた動機は、必ずしも一様ではなかった。しかしそのきっかけがハリスのすすめであったことは、松村（「洋行談」910頁）も海門山人（18頁）も一致して語るところであった。我我はさらに米国滞在中の杉浦（畠山義成）が1869年に書いた手紙の中に、はっきりとこれらの記事を裏付けることばを見ることが出来るのである。これによれば彼等は、ハリスのこの「勧め」の背後にある日本再生計画に関する構想の一端をも知らされていたと想像できるのである。杉浦は、ハリスの教にたいして強い関心を抱きながらも、同時にある批判と留保をもってこれに接していた。この点、無条件の傾倒を示した永井、野田、森とちがっていた。この手紙ののちにはほぼ全文を引用する予定だが、まずこの渡米動機に関連ある部分を引用しておく。（158頁の中略部分に当る）。

其時ハ「ハリス」為人善悪正邪之間ダ明白ニ見察スルコト僕ニ於テ甚ダ難シ。何分「スウイデンバールヂエン」トハ見ナガラ、奇怪無形（稽）説ニ於テ理会シ難ク何分理会ナシニ彼ノ教ヘテ 我国ニ引入ルル事モ不出来、又ハ退クルコトモ不相叶、ケ様不首尾之有様ニ而ハ僕甚ダ悪ミ嫌ふの第一なれば、米行 question ヲ「ハリス」ヨリ受候砌、何レ彼ノ説ヲ理会スルニ於テハ米行ニ若クハナシと存ジ、一同米航ニ決シ候次第ナリ。……

この時点で少くも杉浦が、ハリスの教を我国に引入れるか退けるかの選択をせまられていたことは明らかである。私の目的にとってこの文章の要点は、「奇怪無形の説」が躓きとなってハリスの教をそのまま受け容れがたい心境にあった杉浦にたいしても、これを退けることも許されないと感ぜしめていた事情である。ハリスの教こそ only protection for Japan

(1)
against the foreigners である、と説くオリファントと、このようなものとしてハリスの教を信受し、その構想にしたがって日本再生の事業に挺身することへの同僚の熱望を否定するだけの十分な根拠もまたもない杉浦の心の状況を、この文章はよく示している。杉浦はこの疑念に決着をつける、あるいはハリスを日本に迎える問題に彼なりに納得のゆく結論をうる為に、ハリスの勧めのままに一同とともに米国ゆきを決意したというのである。

英国を去った薩摩の留学生がアメニヤに落ちついたのが、何時だったか、正確なことはわからない。木村匡は、「慶応3年7月英国を去って米国に航す」と記している。海門山人も同じくそれを7月のこととした。何によったかは不明だが、これは正鵠をえているようにおもわれる。洋暦になおすと1867年の8月中ということになるが、いろいろな状況から見て、彼等が英国を離れたのは8月中旬以後のことと見てよさそうである。

オリファントが、議会与英国をすて、リバプールを出帆して米国に向った7月27日には、彼等はまだロンドンに残っていた。オリファントは、当時なお英国に滞在中であったハリスの秘書、Miss Jane Lee Waring (社中名 Dovie) に宛てた7月27日附の手紙の中で、彼等が独力でロンドンを離脱する disentangling themselves from London ことは困難であろうとして、彼等を助けるために、同じく英国に滞在中であったレクア Requa をロンドンに派遣することを希望している。その困難がどのようなものだったかはわからない。しかし、オリファントが、新生活の希望に大きく胸をふくらませながらも、彼等のことをおもって声を放って泣かずにはいられなかったのは、彼等が直面していた困難がかなりシリアスなものであったことを示唆するものであるかもしれない。^(註)

(註) 「私は Steadfast (Requa の社中名) がロンドンに出向いてそこから日本人を助け出す方がよいと思います。彼等は人に迷惑をかけることをひどく恐れるので、彼が気がすすまないと考えれば、彼等は決して彼に来て欲しいとはいわないでしょう。だが、いかに神の導きと護りとがあるにせよ、彼等は余りにも世間を知らなさすぎます (They know nothing of the world and its ways)。彼等がロンドンを抜け出すという難しい仕事を独力で、やりおせるとは殆んど考えられません。ロンドンを離れるとき、私は彼等のことを思って、声を放って泣かずにはいられませんでした。(I could hardly help crying about them when I went away.) 彼等はそれほど真実で愛すべくかつ誠実な人たちです」⁽²⁾

オリファントの日本人への愛着は異常なほどだが、それだけならば間もなく会うということのわかっているしばしの別に、オリファントも「彼等のことをおもって」声を放って泣くことはなかったであろう。

だが、おそくも9月はじめまでには、彼等はアメニヤに到着した。そして直ちにきびしい肉体労働と、ハリスを「父」と仰ぐ「共同体」の生活と秩序を通して、根本から自己をつくりかへる、あるいは再び生れる (regeneration) 道の実修にふみだしていた。オリファント

(1) Oliphant, do. 1st Dec. (1867)

(2) Oliphant to Dovie, 27th July, 1867

は、薩藩生たちが「日毎に、喜びに面を輝かしながら、きびしい労働に従事しているのを見ます」とクーパーに書き送っている。^(註)

(註) ハリスはオリファントにきびしい労働と極度にきびしい生活を課しただけでなく他のメンバーと話すことを禁じた。彼は愛する母とも日本人とも会うことも話すことも出来なかったのである。彼は倉庫の中で空き箱をベッドともデスクともして起居している。起床は5時、7時から10時間をはげしい農耕労働に従う。プロクトンに移ってからもこの生活の規律は変らなかった。彼はこの年のクリスマスに2年も会わなかった母とはじめて会うことを許された。だが、この時もハリスと親しく語ることはまだ許されていない。

「新生社」はその中で人間が文字通り新しく生れる、あるいはつくりかえられる場—協同と訓練の組織 (System) であった。この機能が追求されるかぎりにおいては、それは徹底的な閉鎖的社會でなければならなかった。共同体は文字通りに「有機的な一体」であることを求められた。そのため、外部との交渉がきびしく規制されるのみでなく、個々のメンバーの「内的状態」internal state が共同体—特にその枢軸 pivot であるハリス—にたいして悪い影響を及ぼすと判断されると、(判断するのはいつもハリスである)他の部分との接触を断れた。甚だしい場合は、共同体からその人が排除される場合もあった。オリファントが他のメンバーとの接触をきびしく禁じられたのも、久しく英国の上層社會の放恣の中に生きていた彼が、その意識的努力にもかかわらず、その内的状態が「旧い我」に濃厚にまつわりつかれていることが、彼にとっての問題であるだけでなく、共同体やハリスへの重大な危険と判断されたからである。

新生社は、しかし薩藩留学生たちにたいしては、はじめはオリファントや、のちにふれる新井奥遼の場合のように、純粋なきびしい訓練の課程を課さなかったように思われる。あるいはこの段階では、彼等はまだ正規のメンバーとしての扱いになっていなかったのかもしれない。いずれにせよ、新生社の生活にはいったばかりの野田のモンソン訪問は、新生社の訓練の方法からすれば明らかに例外的である。それは、ハリスの「日本の予言」の中でのべられた日本再生計画の一環として、一人でも多くの日本人を新生社に誘引し教育しようとするハリスやオリファントの希望につながっていたと見てよいであろう。日本人を「狩り集める」この種の努力は、1867年の6、7月頃と推定されるオリファントの幕府留学生への働きかけにはじまっていた。さらに溯って薩摩の留学生への接近に、すでにその意図があったと見られるかもしれないが1866年の夏にはオリファントはまだ新生社入りを許されていなかった。それよりも重大なことは、オリファントと共にアメニヤを訪れた薩摩の二人が、おそらくハリスが会った最初の日本人であったという事実である。ハリスの日本への関心は、彼等を見わたることによって具体性をもつにいたったのである。日本問題がハリスのつよい関心事とな

* アメニヤにおけるオリファントの生活はクーパー宛の彼の手紙に詳しい。その一斑については、「日米フォーラム」1964年7-8月号拙稿参照。なおプロクトンに移ってからは、厳しい労働に酷寒が加わって、オリファントをくるしめることになる。しかしオリファントは黙々としてこれに堪えた。

るのはそれ以後のことである。オリファントは日英修好通商条約締結のため訪日したエルギン卿の秘書として安政6年（1859年）に、また在日英国公使館附書記官として（彼は実はオールコックの賜暇帰国の間代理公使をつとめることになっていた）文久元年（1861年）に日本を訪れ、日本と日本人を知っていた。安政6年の訪日時の経験をもとにして書かれた Lord Elgin's China and Japan⁽¹⁾ は、ヨーロッパ人の日本へのロマンチックな興味を呼びおこすに与って力があつた。^(註) その頃から彼は日本ビイキであつた。日本人のもつ特別な資質が彼の真摯な関心を惹いて、ハリスの許に日本人を同伴する気持を起させたのは、主として、若い留学生たちの影響であつたが、新納や五代や寺島のような人々の示した、すぐれた資質や意欲や能力も与って力があつたらう。これがオリファントとハリスに日本への夢を育くんだと見てよい。彼等は日本問題の解決を模索しはじめた。それは個々の日本人の再生（神における新生）の問題であると同時に、国家回復（The resurrection of the nationality）の問題であつたのである。かくしてハリスに日本の青年を教育することへの熱意が生れ、オリファントにハリスの許に一人でも多くの日本人を集めようとするつよい願望が生れた。日本の青年たちを教育することは彼においては日本の再生を準備することであると同時に、この世界が⁽²⁾ かつてきたこともない高い文明のために一つの礎石おく事業だと信ぜられていたのである。

（註）幕末から明治にかけて、日本公使館附書記生として活動したアーネスト・サトウが日本に心をひかれるきっかけとなつたものは、本書であつた。サトウはこれを「絵草紙風の日本」とよんでいる。「一外交官のみた明治維新」（岩波文庫版）上、13頁。

（二）日本人留学生を新生社に誘引する試み

⁽¹⁾
オリファントはクーパーに宛てたアメニヤからの第一信の中で、野田がマサチューセッツのカレッジにいる4人の日本人に会いにいったことを報告している。この手紙には日附が欠けている。しかし幸いに京都大学国史研究室所蔵の吉田（清成）文書中に、^(註1) モンソンの二人の薩藩生久松・島田からアニメヤの、英国から移つた6人の薩藩留学生に宛てた手紙がある。この手紙の中では、野田の来訪（御見舞という語が使われている）にたいして謝意を表し、挨拶の延引を詫びたうえで、休暇になり次第アニメヤに赴いて先生（ハリス）の高論をうかがうのをたのしみにしていることをのべているのである。この手紙の日附は、9月15日とあるだけだが、宛名が6名の連名であるところから、これが1867年のものであることは疑ない。^(註2)

（註1）吉田文書の中にはかなりの数に上る慶応元年の薩藩の遣英留学生たちの書簡がふくまれている。英国時代のも、米国時代のもある。特に、少数だが、ハリスの新生社に入っていた時代の日本人メンバーの消息、また後にふれる分裂事件（12人の日本人メンバーのうち、吉田清成や畠山義成など8人が新生社を脱退した事件）直後の、脱退した側の記録が含まれている点で、これは貴重である。

(1) 詳しくは Oliphant, L: Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan, 1866

(2) Oliphant to Cowper, 1st Dec. (1867) 又「日米フォーラム」1964年7-8月号の拙稿（60頁）参照。

私はコロンビア大学のパトラ図書館所蔵の Harris-Oliphant Papers の中にハリスの許に止った森有礼と鯉島尚信が帰国に際して脱退したメンバーに宛てた留別の書（後出）を含む、いわば、ハリス側の資料を発見したが、吉田文書中の一連の書簡が見出されたことで、薩藩留学生とハリスとの交渉の歴史をいわば双方の側から究明する道が開けたのである。いづれにしても、本文書は、幕末の海外留学生、直接には慶応元年の薩藩留学生に関して Columbia大学の Harris-Oliphant Papers とともにもっとも重要な根本資料を含んでいる。これはまた、後に引用する杉浦書簡に見られるように日本キリスト教史の研究にたいしても、ユニクな、重要な意味をもっていることを指摘しておきたい。

（註2）宛名は杉浦、沢井、永井、野田、市来、磯永となっている。最後の2名については、変名が知られていなかったのであろう。1865年にはまだ彼等は英国にいた。1868年6月上旬に野田と沢井が帰国したあと、この6人中でなお新生社に残っているのは、磯永（長沢鼎）1人だけであった。

アメニヤに到着早々の野田のモンソンゆきは、彼等がなお英国に滞在中にこの計画が練られていたのではないかという推察を生む。モンソンの5人が、慶応2年8月頃（1866年9月から10月はじめに当る）英国に到着、それから米国に赴いたことは松村の「洋行談」にも見えている。これが野田永井がアメリカにいてハリスに会って帰った時期に当るから、ハリスの名は彼等にも知られていたかもしれない。彼等がモンソンに落ちついてからもロンドンの薩藩生との間に連絡が保たれていたにちがいない。モンソンには彼等の外に木藤という薩摩藩士がいた。野田のモンソン訪問にオリファントは大きな期待をかけていた。彼は野田のモンソン訪問にふれて⁽¹⁾

彼は彼等に一部始終 the whole matter を説明した。彼等は全面的に受け容れ、学期の終る11月には、我々の仲間に加わる⁽²⁾ことになっている。

とのべている。のちに彼はこの表現を修正して「残りの5人は11月になったら Faithful に会いにくる。勿論実際に来て見なければ彼等が受け容れるかどうかはたしかでない」といい直した。「残りの5人」といっているのは、6人いたモンソンの日本人の一人、木藤市助が、野田のモンソンを訪ねる2週間ばかり前に自殺した事件⁽³⁾に関連していわれたのである。この5人の名前は、仁礼平助（景範）江夏壯助、種ヶ島敬輔、吉原弥次郎（重俊）湯地治右エ門（定基）である。彼等も米国では、変名を用いていた。吉田文書によって、工藤十郎、吉田彦麿、大原令之助および久松、島田という薩藩留学生が1867年から8年にかけて、モンソン⁽⁴⁾に住んでいたことがわかるのである。このうち大原が吉原の変名である以外、誰が誰であるかわからない。おそらくこの五人が慶応二年の薩摩の米国留学生であろう。野田のモンソン訪問の目的が彼等を新生社に誘引することにあつたこと、またそれがハリスの了解の下におこなわれたことは疑ない。

これはハリスが「日本の予言」を書いたときにすでに新生社の中に日本人学校を開設する

(1) Oliphant to Cowper, Sept? (1867)

(2) do, 29th Sept. (1867)

(3) 薩藩海軍史（中）912頁

(4) 永井五百介より工藤十郎その他宛、1869年10月23日（吉田文書2462）

計画が、日本再生の計画の一環として、立てられていたことを示唆するものであろう。事実、このモンソンの日本人にかぎらず、米国英国にある日本人留学生にたいして実に熱心に、オリファントは、野田と永井に協力をもとめて、彼等を新生社に誘引するために、百方手をつくしているのである。英国の場合はクーパーがこの仕事に協力した。

11月になるとモンソンの五人が約束通りハリスに会いに来た。^(註1)うち三人(江夏、仁礼、湯地)はそのまま新生社に止まった。永井(吉田清成)によるとこの三人は、

翁の高論を聞かんと 500有余の里数を不厭、侶に來りけるニその大徳に感じ、立ロニ門弟たらんことを希ひ、終に其意を得、翁の愛育を承る最も尊し

と記している。モンソンの学生たちがハリスに会ったのは、アメリヤでなく、同じくニューヨーク州だが、はるか北辺の、エリイ湖畔の村プロクトンにおいてであった。ハリスはここに^(註2)広大な土地を買入れ、新生社をここに移そうとしていた。ハリスはその準備のため、10月末にオリファントの母(Lady Oliphant)と秘書のダビ及び二人の日本人を伴ってこの新しい用地に移ったのである。この二人というのは野田と永井で、彼等は日本人留学生中の活動家であり、またもっともハリスの信頼が厚かった。ハリスははじめから、ここでモンソンの日本人と会う予定があつて彼等を伴つたのかもしれない。プロクトンに住居が用意されるにしたがつて、11月をはじめから漸次メンバーの移転がはじめられた。11月末にオリファントもプロクトンに移った。アメリヤの日本人が全部ここに移って、モンソン組と合流したのは、12月末であった。

(註1) オリファントの手紙によると、11月26日までに5人の新しい日本人が新生社に加わり、12月1日には彼らの同居する家族も決まって引越しをはじめている。これはモンソンの5人の薩藩生と見てよい。しかし12月29日に日本人学校が開校されたときの日本人の総数は11人である。この中アメリヤから移つたのが8人だから、モンソン組は3人で前引、永井書簡にある江夏、仁礼、湯地がこれにあたる。

(註2) この時購入した土地は 2000エーカーにおよぶもの(1エーカーは4046, 8m²)で1870年71年にはさらに、隣接地を買収して拡張した。主として葡萄が栽培された。この土地購入の計画はオリファントの入社の際の献金をどう使うかという問題がキッカケとなって立てられた。25万ドルにのぼる資金の半分がオリファント母子から出たもので母は相談に与つた——というよりも発案者であったのだが、オリファントは全く何の意見も求められず、プロクトンにおいても、純然たる労働者として農場で働きつづけていたのである。

序でに、新生社のメンバーの数を附記しておく、小楠によれば30人余だが、新生社の最盛期には75人から100人くらいのメンバーを擁していた。内、成人が6.70人そのうち4.50人が女性であった。ここに入るものは、原則として家族ぐるみであった。

アメリヤの新生社は、モンソン組の参加にさきだつて、2人の日本人の訪問を受けた。薩摩の洋学諸生で江戸表に留学中の谷元兵右エ門と野村一介である。2人は脱走して米国に渡つた(松村「洋行談」914頁)のである。彼等はカリフォルニアでモンソンと連絡をとり、そこでアメリヤの新生社と、そこにいる薩藩生について情報をえたのである。この2人の照

会にたいし、アメニヤの薩藩生は、ハリスと新生社について説明し、改めて指示を待つようにと申し送った。だが、

彼等は待ちきれないで、連絡を待たずに訪ねて来た。「フェイスフル」は不在だったが彼等是我々の労働の生活とここを領している愛の気 (sphere) に打たれて、「フェイスフル」の教は真実にちがいないことを確信して、「フェイスフル」の帰りを待つ決心をした。

(1)
こうオリファントは書いている。彼等がアメニヤに到着したのは、1867年9月26日であるが、その夜彼等の夢にハリスが現われた。ハリスは一人に Die to self といい、他の一人に Be humble といいて樽を洗うことを命じた。朝になって二人は「この生活を受け容れる」決心を堅めた。彼等は日本での過去の生活は邪悪であったことを知った。彼等はいま衣類の洗濯ベッドづくり、皿洗いその他の卑しい仕事 (uses) を習っている。これがオリファントの手紙に見る「カリフォルニア経由で日本から来た2人」が新生社に来て、そこに住みついた経緯である。

この二人は身の振り方に窮していた。前に引いたモンソンの久松、島田の手紙の中心の問題は、実はこの二人の身の振り方に関することであった。モンソンの留学生を代表して大原令之助がアメニヤに手紙を書き、「谷(元)、野村の一条について」相談した。これに対してアメニヤから、ハリスとも相談の上、二人を引受ける用意のあることを知らせて来た。この返書との前後はわからないが、野田のモンソン訪問があり、それに対する挨拶をも兼ねて9月15日附の久松、島田の、アメニヤの六人宛の手紙となったのである。モンソンの留学生にも、この二人を新生社に引きとって貰う以外の解決は考えられなかった。二人が「先生」の世話に成ることが出来るならば「是以て赤面の至りには御座候へども、実に大幸此事に御座候」と書かねばならなかったのである。

谷元、野村がおかれていたこのような状況を考えると、誰でも、彼等が「この生活を受け容れる」動機となったという、夢の中でのハリスとの問答に何か作為の跡を感じるのであろう。だがオリファントも永井も二人の告白を疑わなかった。また、彼等のおかれていた状況がどうであったかは別として、実際にハリスのコロニイにふれた彼等は、1866年9月の英国で、野田と永井の言によってハリスを信じた森に比べて、ハリスを信ずるためのたしかな動機をもっていたことを認めなければならない。ここの生活を見たことのない人には、ハリスの教を本当に評価することはできないというのが新生社の日本人の共通の意見であった。オリファントは、それ(コロニイの生活を見ること)は、日本人にたいして、他のすべてにまさって多くを証明するとのべている。(3)日本人の「開いた」心がコロニイに滲透する愛と純潔の

(1) Oliphant to Cowper, 29th Sept, (1867)

(2) 前引久松島田書簡(吉田文書2527)

(3) Oliphant, do, 6th Oct., (1867)

「氣」sphere の影響をつよく感じとることを可能にする。それに反して普通の西洋人はその心が閉じているため、その精妙な力を感じることができないのだというのがオリファントの日本人評価であった。

(註) 「去年9月(洋曆)谷元、野村之両雄も爰に来着(云々ヲ略ス)直接翁乃大徳乃溢れ其門下ニ到り其風化乃世ニ卓越するを見、即先生乃徒弟たらん事を切望す。先生為に之ヲ肯し愛育する実ニ切なり」(1868年1月9日、兄宛永井五百介書簡、吉田文書、2453)もともと西洋人であっても、英国ドンカスターのクエーカー教徒のクラークの回心の例は、日本人の場合とよく似ていた。彼はその町の名望家に生れた真摯な人物で、社会の信望をあつめていた。従来新生社と何のかかわりもない人であったが、米国の友人を訪ねる途次、ふと立寄った新生社の生活にふれると、そのsphereにうたれて、そのまま英国に帰らず兄弟も事業上の共同者をも捨てて「丁度昔の弟子がすべてを捨てて主にしがったように」新生社の人となったのである。(Oliphant to Cowper, 3rd Jan. 1869)

オリファントがハリスの了解を得て、はじめて英国にいる日本人留学生を新生社に誘引する事業に、クーパーの協力を要請したのは、モンソンの5人の日本人がプロクトンを訪ねてきて新生社の日本人は13人になったので間もなく学校が開かれるだろうということを報らせた、1867年11月26日附の手紙においてであった。新生社の中に日本人のための学校をつくることは、「日本の予言」にのべられていた日本再生の計画の一環であり、さらに世界が、かつて見たことのない高い文明の根底を築く事業の一翼として理解されていた^(註)。オリファントの意識の中では、日本人を狩り集める(hunting up)仕事は、「主がその囲いの中に『彼』の小さきものを集める」仕事としてうけとられていたのである。

(註) オリファントはこの事業に協力することによって、The great cause we all have at heart の利益をおしすすめることになるといっている。その内容が、世界がかつて見たことのない高度の文明の根底を築くことなのである。

オリファントが上記書簡の中で記すところによると、薩摩の留学生と同じ年にロンドン大学に入った長州の南貞助は、当時帰国中であった。帰国の目的は、長州の藩主を説いて藩主自身の渡米を実現させるにあった。ハリスの許で彼に新生の真理を学ばせたいという大望を南は抱いていたのである。明らかに新生を受け容れる一人の藩主を見出す努力とみてよい。オリファントはまた、グラバーにこの計画実現に一役買わせるため、クーパーの影響力の行使を望んだ。さらに南は、当時スコットランドのアバディーンに留学中の長州のDokieとHatoriの渡米を実現するため藩主の許可(命令という言葉オリファントは使っている)を得ることをも期していた。この二人は、ハリスの許にきて新生の真理と清浄の生を生きる道を学ぶことを切望して、手紙を新生社によせたのである。オリファントによれば、Dokieは長州藩主の甥であり、Hatoriは「下の関のプリンス」の家老の息子であった。

この二人がロンドンに移る前後に、さらに3人の長州藩の留学生が渡英した。Otomi, Yosiyama および Nagami である。オリファントはクーパーを通じて彼等と接触をはかっているが、その際、土佐のYukeeとObahを「役立つ」ことができること、また彼が彼等のいわゆる「偉大なる教師ハリス」の弟子であることを明らかにすることによって、この三

人を信用させ、助言にしたがわせることが出来るだろうとのべている。当時この英国に到着して間もない留学生の間においてさえ、ハリスの威信が大きかったこと、さらに土佐の Yukee や Obah (彼等もまたハリスに会っていたかもしれない) がつよくハリスの影響下にあったことが知られるのである。長州の二人もすぐにでも「フェイスフル」の許に到ることを望んでいるとオリファントは書いている (3rd Jan. 1868)。

この Yukee が中井弘に伴われてロンドンに来た結城幸安であることは十分に想像がつく。その推定を裏付ける証拠はやがて明らかになる。結城にたいするオリファンとハリスの期待と愛着は、並々ならぬものがあり、薩摩藩士との間にもかねてから交渉があった。オリファントは、土佐の二少年についてこう述べている。

彼等は「フェイスフル」の教を、彼等が知っているかぎりで全面的に受け容れている。そしてひたすら、彼等に純粹で、善良な生活を送るのを可能ならしめる道 (System) を履むことを欲しています。あなたは特に結城が温和で愛すべき若者であるのを見るでしょう。彼等はすべて優しい、感受性のゆたかな人間です。そして「開いた」心の持主であるため、我々よりもはるかによく人間をその気 (sphere) によって判断することが出来ます。またつねに愛の気をよく受けとめます。⁽¹⁾

さらに、オリファントは「彼等の『彼』(神)にたいしてなされる絶対の自己犠牲と『彼』にたいする愛は『彼』を知ることの久しい我々を恥じ入らせ、また狼狽させます」と書いている。これは直接には Yukee と Obah について語られたことだが、オリファントの目には、多かれ少なかれこれがすべての若い日本の武士たちに共通の資質として映っていたのである。1867年の11月には Yukee と Obah の渡米は、現実の問題になっていた。しかし彼等の監督者クーパーが渡航費の支出を拒むことが予想されていたので、オリファントはクーパーが必要経費を提供することを要請した。その手紙の中でオリファントは⁽²⁾

我々はいづれそれを土佐の藩主から出して貰うことが出来るでしょう。彼は我々がなしてきたことを是認するでしょう。彼がクーパーにたいして立腹するだろうと考える十分な理由があります。

といった。彼は長州や土佐の了解をとりつけることについて、かなり楽天的である。そこに彼の接触した日本人たちの考え方がある程度反映していると考えてよいであろう。

すでに述べたように、1867年12月1日の手紙で、オリファントは、Yukee と Obah の渡米費用についてクーパーの配慮を要請した。米国渡航を現実の問題としているのである。翌68年の3月はじめには Yosiyama, Ottomi も書を新生社中によせて遅滞なく (without delay) アメリカに渡りたいといってきた。ハリスはこれにたいし、近くラクストーン一家が渡米することを告げ、それに同行するように指示させた。そのとき Yukee も一緒に来ることをハ

(1) do, 1st Dec. (1867)

(2) do,

リスは望んだ。ラクストーン一家は4月5日前後に米国に向った。だが、Yukee も Yosiyama も Ottomi もこれに同行することは出来なかった。

1868年4月12日オリファントは英国にいる日本の少年たち、特に Yukee の到来を待ちかねながら、Our dear Japanese are such precious treasures to us here. と書いた。そのとき社中の日本人は12人で、ラクストーン一家 The Ruxtons が、到着次第彼等はこの一家と一緒に住むことになっていた。⁽¹⁾

(2)

1868年も押しつまった12月29日に、新生社の日本人が全部プロクトンに集ったのを記念して、ささやかな茶の会が持たれた。日本人は11人、「西洋人は私1人だけです」とオリファントは誇らしげに書いている。11人の内訳は、ハリスに従って10月中に最初にプロクトン入りをした、野田と永井、^(註)それに11月中に新生社にはいったモンソンの江夏、仁礼、湯地の三士と、それまでアメニヤに待機していた沢井(森)杉浦(畠山)松村(市来)、長沢(磯永)の四人の薩藩留学生と、「カリフォルニア経由で日本から来た」谷元、野村の「両雄」である。この六人が、その日プロクトンに到着したのである。オリファントは、これは11人の日本人が一緒に過ごす最初の晩だと書いている。⁽²⁾

(註) 1875年にハリスはプロクトンを去り、新しい土地を求めてカリフォルニアにゆき、サンタローザ郊外のファウンテングロブに新生社の新基地を開いた。そのとき彼は、もっとも信頼していたメンバー3名を同伴した。その中2名が日本人(長沢鼎と新井奥遷)であった。日本人への信頼の厚さを示すものである。1867年にプロクトンに同伴した野田と永井は、日本人中もっともハリスが信頼し、かつ活動家であった。オリファントの日本人への働きかけにおける協力者は、いつもこの二人であった。

この集りは同時に日本人学校の発足を祝う意味をもこめていたと思われる。オリファントは「彼等はすべてその研究(studies)をはじめた」とその手紙に書いているのである。この日本人学校の開設については、彼は、11月末に、新たに5人の日本人が加わって、13人になった、さらに何人かの参加が見込まれており、「間もなく学校が開設される予定です」とクーパーに書きおくっていた。この新たに加わった5人の日本人はモンソンの5人と見てよい。その中の2人(種ヶ島、吉原)が一旦モンソンに帰ったのであろう。そのうちの一人もやがて新生社に入ったと思われる。しかしこの11月末という時点では、新生社中の人となった日本人13人中、6人はまだ他のメンバーと共にアメニヤに残って、プロクトンに住む家が用意されるのを待っていた。⁽²⁾沢井(森)もその一人であった。この残り6人が、プロクトンに到着するのを待って日本人学校が開かれたのである。オリファントはその中で、当然重要な役割を与えられたことと思われる。

(1) do, 29th Dec. (1867)

(2) do, 1st Dec. (1867)

翌年（といってもこの茶の会が持たれてから10日余りしかたっていないわけだが）1月9日附で兄宛てにかかれた永井の書状（下がき）が吉田文書に残っている。この手紙によって我々は、前引オリファントの手紙にいう「さらに参加の見込まれている人々」が誰であったかを知ることが出来る。それは(1)土紀，服部，音見，芳山，永見であり，(2)結城，大庭であり(3)花房，柘植であり，(4)種子ヶ島，吉原であった。(4)は江夏，仁礼，湯地の仲間であるモンソンの留学生であり，(3)は当時の所在は確実でないが，1868年6月にはボストンにいた。花房は岡山藩士である。柘植もおそらく同藩の留学生であったろう。(1)，(2)は1868年1月の時点では，英国に留学中であった。それぞれ長州及び土佐藩の留学生である。

(註) 永井の本書簡中の語を借りれば彼等は、「先生の徳を慕うて来らんことを切望すといえど，未其意を得ざるもの」であった。なお，大蔵省の各国留学生調（明治4年9月現在）を見ると英国の留学生（官費）中に南貞助と音見清兵エの名が見える。南は明治三年森公使と同じ船で米国にゆき，そこから再渡英したのであろう。さらに同じ文書によると，米国の官費留学生中に，杉浦弘蔵，松村淳蔵と共に，鹿児島県人谷元兵右エ門，湯地治右エ門および野村市助（これは県費）の名が見えている。さらに山口県人として，服部一三（官費）の名が見えているのは，ここにいう服部と見てよいのではなかろうか。とすれば，彼はその時期は不明だが，英国から米国に移ったと考えられる。服部一三はラトガース大学1871年の入学生である。

永井五百介のこの書状の中にあげている日本人の名は11名にのぼる。この外帰国中であった南貞助は純然たる新生社の同志であった。これにはすでに新生社中の人になっていた慶応元年と二年の薩藩留学生10名および日本から来た二人は含まれていないのであるから「日本人学校」は最大23名ばかりの学生を見込んでいたわけである。南をふくめ12人の参加予定者の中9人にたいしてロオレンスロオリファント或は薩藩生はそれを新生社に誘引する努力を試みた，そのあとを我々はクーパー夫妻宛のオリファント書簡集の中に辿ることが出来るのである。それだけではない。オリファントは1867年の，おそらくは4月から7月に至る時期に，慶応2年の幕府の英国留学生にたいしても，神による新生の福音を説いてハリスの許に彼等を誘引する努力を試みているのである。彼は取締役という名でこの留学生団に加わっていた中村敬輔（正直）に会い，ハリスとその教を説いたのである。オリファントのこの努力にたいして中村はどのような反応を示したか。中村正直のライフヒストリイ中の全く知られていなかった興味ある一頁を，我々はオリファントの手紙の中に読むことが出来るのである。

慶応二年の幕府の留学生がロンドンについたのは同年12月28日，すなわち1867年2月2日であった。一行は14名，取締役として川路太郎（聖謨の嫡孫）と中村敬輔が付き添い，留学生に外山捨八（正一），箕作奎吾，同大六（菊地大麓）の兄弟や杉徳二郎や林桃三郎（林董）福沢諭吉の弟英之助という名儀で特に一行に加えられた彼の門下生中津藩士の和田慎次郎や御軍艦頭取完治弟安井真八郎などがいた。

彼等がロンドンについて2日後の2月4日（洋暦，以下同）に沢井は一行をホテルに訪ねて

(1) いる。この時どんなやりとりがあったか、それは不明であるが、この訪問は後のオリファントのこの一行への接近に道をつける役を演じたかもしれない。一行は英人 Lloyd と一つの家に同居し、彼の監督下におかれていた。ロイドは英国の艦隊附牧師で、彼等の世話にたいして年3000ポンド以上の手当を給せられていた。⁽²⁾本務にたいする給与は 300ポンド以下であった。だから学生が英語上達のため分宿を望んでも、どこまでもそれを阻止しようとした。留学生たちは彼が政府（幕府）に訴えれば切腹を命ぜられることにもなりかねないというのでひどくロイドを恐れていた。彼はオリファントが彼等に接近するのを嫌ってきびしくこれを警戒した。彼の言い分はオリファントは薩摩藩士たちと一緒に「大君」にたいする謀反を企てているというにあった。オリファントが彼等に接近した目的は、勿論彼等をハリスに導くことにあった。彼の努力はいくらか報いられそうになった。

全員14名の一行の中、全面的に「この生活」を受け容れたのはただ一人だけです。彼は我々の許（プロクトン）に来たがっています。彼にあてた手紙を同封しておきます。彼の名は Fakuzawa (福沢英之助) です。この一行の上級メンバー 2 人 (two seniors) すなわち Cuwaje (川路太郎) と Nakamura (中村敬輔) にも私は話した。彼等はふかい印象をうけたように見えた。彼等は注意ふかく耳を傾けた。だがあとで彼等は福沢にこういったそうです——彼等が非常に善良な人々であることは疑ない。また彼等の語るころはすべて真実であり、「フェイスフル」は非常に偉大な教師にちがいない。だが彼等のところにゆくのは無用だ。何故なら、彼等は不可能事のために戦っているのだから、と。だが福沢の意見はちがいます。彼はためしてみるつもりです。彼の友人の Yassui (安井真八郎) も、彼と同意見のように私には思われます。

ロイドの警戒がきびしいので、オリファントが会うことの出来たのは、2 人の上級メンバーと福沢だけで、しかも彼等はロイドの目を盗んでそっと訪ねてくる、とオリファントは書いている。又彼は福沢が夜おそく英国人の友人を訪問したという理由で、1 週間の間彼を寝室に監禁したことを記している。この事件が留学生たちを怒らせ、ついにロイドから独立を獲得し、分宿に成功した顛末が、外山捨八の日記に詳記されている。⁽³⁾この友人がオリファントでなかったとしても、オリファントへの警戒がおそらくロイドをしてこのきびしい処置をとらせたのであろう。この事件のおきたのは、1868年7月3日であった。この前日にハリスは「日本の予言」をかいた。またその1週間後には、薩摩の留学生たちはモンブランの事に関連して、藩政府に建言書を書いた。彼等は、ハリスの教が彼等に保証する「愛と協力の力」だけが、日本を外国人の手から守ることが出来ると信じて、ハリスに従学するため米国に渡

(1) 原平三、徳川幕府の英国留学生（『歴史地理』79—5035頁）。

(2) Oliphant to Cowper, 1st Dec. (1867), なお彼は英国の外務大臣から「日本人14人の世話」を命じられていた（前引原平三論文34頁）

(3) 原平三、前掲論文、38—40頁

る意志を堅めていた。これはまさにそういう時期の出来事であったのである。

この「大君の日本人」にたいして、もう一度接近を試みようという気持をオリファントにおこさせたのは、「將軍一つ橋」が辞職したという報導であった。このニュースが新生社に伝えられたときの社中一同の歓喜の様子を、永井は次のように書き記している。

將軍には辭職政挙 國家ニ歸し奉り 賢明之諸侯等之公會相開侯段当國新報に 相見得一統
欣然躍舞仕候次第、実ニ難尽筆紙候へば我侪之契兄「オリファント」氏ニも折柄同席ニ
而、共ニ欣賞ニ時を移せる形勢、ハリス先生ニハ此新報を見、余り嬉しく落涙ニ及ばれ
し次第其切情御賢察被下かし、……（1868年1月9日附兄宛、吉田文書2453）

このよろこびの中で、オリファントは12月1日附で直ちにクーパーに手紙を書いた。その手紙によって我々は、幕府留学生に関するオリファントの経験を辿ることができるのである。同じ手紙の中でオリファントはクーパーのために彼の日本人観と、彼等に接近する際に注意すべき事項を書き送った。日本の青年たちが、このような資質と精神をもつ人間であると知ったことがハリスとオリファントに日本を、「世界がかって見たことのない新しい文明」を築く事業における拠点とすることを計画させるにいたったのである。日本人の資質中彼を惹きつけた第一のものは、彼等の人間の内的状態から発する「氣」sphereにたいする素直なつよい感受性であった。さらに単純で気高い性質と、よく生きようとするつよい意志と、真実と知りえたことを行為と生活の中に活かそうとする勇猛心であった。武士である彼等の身についた徳のうちに、かなり多くハリスの倫理の主徳に通ずるものがあったことは、ハリスやオリファントの彼等への傾倒の秘密をある程度まで説明するのである。しかし教義にわたることは、彼等をひどく当惑させる。日本人に近づこうとする場合この点を十分に考慮に入れる必要をオリファントは強調した。

功をいそがず 慎重にすすんで下さい。求められたときに、彼等の状態に合せて、ハリスの教を取捨して説き示して下さい。何よりも、ハリスの教によってのみ「愛と協力の力」が彼等の間に確保される、そのときはじめて外国人にたいして日本を守ることが出来るということを力説することが大切です。

次に引用するオリファントの手紙の一節はハリスとオリファントを通じて、はじめてキリスト教に接した若い日本の武士たちが、どのようにこれをうけとめたかを示す興味ふかい記録をふくんでいる。

深い謙遜と己れの絶対的な殺滅の必要性の観念は、彼等は即座に受けいれます。またどうすればよりよく生きられかを学ぶことを彼等はよろこびます。だが、贖罪とか信仰による義認とか復活の教義は、おそろしく彼等を当惑させるのです。山上の垂訓は、飽くことなく何度でもよみかえし、生活の中にそれを具現しようとしてつとめます。……私はクーパー夫人が（若い日本人をハリスの許に導くという）この「道のためのもくろみ」missionary enterprize のため、熱心に貴君に協力するだろうと期待しています。それ

はもっとも崇高な成果をもたらすでしょう。そして貴君と彼女は黄金時代が過ぎ去って以後、世界がかって見たことのない高い文明のため、その基礎を据えるのを助けることになるのです。

㊦ 本 来 心 術 の 学 問

(1)

1867年12月29日附の手紙の中でオリファントは、日本人が「みな彼等の研究をはじめた」ことを報告している。この時期から日本人たちは、本格的に the advanced Japanese としたの任務に服するための訓練をうけはじめたと見てよい。それは「日本の予言」が書かれた時期に比して、当然内容に若干の相違があったと考えてよい。王政復古によって国家回復の一步が大きくふみ出されたからである。彼等に期待されるものはもはや一番を拠点としての戦いではない。彼等は直接に新しい国家建設の中で、それぞれの任務を引受けることが出来るのである。日本人がそれぞれに彼等の studies をはじめたという語は、私には、彼等がそれぞれに主とする分野を定めて、その分野の研究に着手したことを意味しているように感ぜられる。森はここですでに教育を己の研究の主題として扱ったであろう。木村は、

先生等は（ハリスに）先だちて米國に航しボルクトンなる彼の宅に寓せり。彼は葡萄園を所有し其教養する所の学生をして各々労役に服せしむるを常とす。而して先生はパン焼に従事したりと云う。此間頗る艱苦を嘗めたるが如し。然れども先生は能其服務に堪へたるのみならず、余暇あれば同國教科書を蒐輯するを勉めたり。

と述べているが新生社の生活原則を考えると、この教科書集収は、the Use によって、自己に課せられた「用」の中においてでしかなしうるものではなかったことは明かである。永井は大原（吉原）とともに政治の学を扱っていたと思われ^(註)。我々はこの学校をただちに「日本の予言」の中に説かれている「知ることの望ましいすべてを教える学校」に擬すべきではない。The advanced Japanese がもし、それに関係をもつ場合は、その中で何らかの分野の学問を教える teaching staff としてである筈であった。

(註) 永井は1869年10月27日附（工藤）十郎他宛書簡（吉田文書2462）の中で「大原（吉原のこと）と私とは政事学を志し相学居申候」とのべているが、同日附江藤藤介？宛書状（吉田文書2463）には、「『兩兄』発米以前より僕には政治の学を相学度志相立候まま今日に至り」とある。この「兩兄」がもし沢井、野田を指すとすれば、彼等が政治の学に志したのは新生社在社中のことになる。しかし、新生社の日本人中、沢井野田以外にも一足先に帰国した人がいた。松村の『洋行談』によれば仁礼と谷元がそうだが、その時期は判らない。また吉田文書1453及び2521に沿川土あるいは沿川先生の帰国のことが出ている。これが誰を指すか不明だが、その帰国は1869年7月27日（横浜着）のことであった。さらに同文書。2895によれば1868年9月9日の便船によって、宛名人たち（島田、久松、村上、永井、松村）が帰国することに決ったことがうかがわれる。杉浦の名が見えないが、彼が永井とともに一旦帰国の決心をしたことは、後引永井杉浦宛の花房書簡（1868年7月5日附、吉田文書2452）に

よって明かである。もっとも、永井、松村、杉浦は帰国を思い止って、その後間もなく、ラトガース大学に入学した。島田、久松は1868年7月6日現在でモンソンにいたが、1869年8月2日にはモンソンにいない。その後彼等の消息は絶えているが、あるいは彼等は、1868年に予定とおり帰国したのかもしれない。1869年4月5日附のロオレンス・オリファントの手紙に「また日本から便りがあった。我々の4人の日本人は依然ミカドの側近にあって高い地位を占めている、とあるのは、沢井、野田の外に2人の「我等の日本人」が帰朝していることを示す。これが久松、島田であるかもしれない。彼等はモンソン組のうちの2人であることはわかるが、そのうちの誰であるかはわからない。もしこの推定が正しく、「両兄」が久松、島田を指すとすれば永井たちの政治の学への志は、やはり新生社当時からのものになる。

もっとも、永井は杉浦、松村と共にラトガースに入ったときは、理科のコースをとった。これがあるいは、入学早々永井がラトガースを退学して、ウィルブローム・アカデミーに転じた理由であったかもしれない。

勿論、新生社における本来の学は、この種の「研究」ではなかった。「進んだ日本人」をつくる基本の学は別に存した。彼等は何よりもそれぞれの程度において「再生の人」でなければならなかったからである。新生社入りをしてしばらくの間、彼等は新生社の客であったであろう。前引1869年1月9日附永井書状が、前年11月末に新生社に入ったモンソンの三士について語っているところは、ある時期までは、程度の差はあれ、社中の日本人すべてに共通の生活のかたちであったろう。モンソンの三士は、前にも記したように、500余里を遠しとせず、ハリスを訪ねてプロクトンに到った。ハリスを見ると「その大徳に感じて立どころに門弟たらんことを希」んで許され「翁の愛育を蒙ることもっとも尊し」とのべた永井は、つづいて「シカシテ当分學兄弟骨肉之まじわりをなし相樂み、翁の心に講習、勉学罷在」といつている。これがある時期までの三士の生活であったのである。これはまた、ある時期までのすべての日本人の生活であったろう。ロオレンス・オリファンの描いて見せた新生社の生活に、よろこびに面を輝かせながらきびしい労働に従い、また、はじめて人生の幸福を知ったと述懐する日本人と同じ姿をここに見ることが出来るのである。彼等は勿論労働を課せられていた。しかし、その生活の前面に出ているのは、社中の人々（彼等は *brothers and sisters* と呼ばれていた）との「骨肉の交り」をインジョイしながら、ハリスの心に講習し、また勉学にはげむという、むしろ新生社中の客分の姿である。そこでは新生社は「愛の気」と労働の生活に代表されている。我々が次稿に引用する新井奥邃書簡の中に見るものもまさに同じような新生社の「客分」として社中にあった人間の目に映ったハリス社会の姿である。しかし学校設置の目的が「個々の日本人と日本全体の再生」の事業における、いわば「前衛」をつくることにあった以上、やがて日本人たちも新生社中の凡ての人々と真に「兄弟」の関係に入るために、何が求められるかを学ばねばならない時がくる。それは彼等がが新生社の学問のより進んだ階程に入る事であり、真に「新生の真理」をうけるために通りぬけなければならないきびしい関門にさしかかることであった。そこに新生社の生活の根底を支えている

* Oliphant, do, Sept. (1867)

諸原理あるいは倫理との対決がはじまるのである。

我々は幸い序章に引用した 在米二期に宛てた小楠の書簡の中に 新生社中の学問についての 沢井、野田の証言を有している。そこには、そのきびしい関門の前にもすればたちろこととする彼等の姿がある。

エル・ハリスは退隠村居、門人30人余有之、相共に耕して講学せり。其教たるや書を読むを主とせず、講論を貴ばず、専ら良心を磨き、私心を去る実行を主とし、日夜修行間断無之、譬は霽然たる春風の室に入りたる心地せり。然しながら私心を挟む人は1日も堪へがたく、偶々慕い来りし人も日あらず帰り去る者のみにて、遂にその堂を窺うこと不能。薩の兩人も初は中々堪がたかりしが僅に接続の力を得て、本来心術の学問に入りたり。

この手紙の中ではこの経験は、薩の兩人のみのこととなっている。他の四人にふれる必要がないとこの二人は判断したか、あるいは話が永井松村におよぶのを適当でないと判断したか、そのいずれであるかはわからない。あるいは、彼等は、二人だけが僅かに接続の力を得て、ハリスの本来心術の学問にふれることを得たと考えていたのかもしれない。いずれにせよハリスの教の堂奥にいたる道には、いくつかの関門があった。そのどこかで薩藩留学生の中のあるものは躓き、あるものはそれを通過した。その関門は何であったか。新生社の日本人の間に分裂が生じ、あるものは去り、あるものは残った。このキッカケとなったものは何であるか。これをさぐる事が、沢井野田の報告にしたがって小楠が新生社の本来心術の学問と呼んでいるものの内容について 推及の手がかりを提供するであろう。新生社は愛の気の故に「霽然たる春風の室」であったが、それは同時に私心を挟むものには1日も止りがたいきびしい社会であった。日本人たちはその資質と、特に武士として身につけていたモラルと鍛練によって、「愛の気」をたしかにうけとめ、絶対の「自己の殺滅」によってオリファントやハリスをよろこばせ驚嘆させた。しかしその否定さるべきものとされる「私」や「己」の中に、彼等の倫理意識が甚だしい違和を感じずにはいられないものに出会うことになる。これは沢井の経験に即していえば、かねて漠然と予感されていた汚魂洗濯の正念場にさしかかったことを意味している。

ハリスとオリファントに関する唯一の学問的な研究書である *A Prophet and A Pilgrim*^{*} の中で、著者は

プロクトンにおける最も珍らしい客は、20人ばかりの日本人クリスチャンである。その大部分は侍階級のものであり、あるものはオリファントの影響によってハリスの「二而一」の福音を学ぶために新生社に来た。

とのべ、このうち長沢を含む四人だけが正規のメンバー(permanent members)になったと

* By. Herbert W. Schneider and George Lawton, Columbia Univ. Press, 1942

書いている(p. 154)。彼等が「二而一」(The Two-in-One)の福音を学ぶためにといわれているのはまさしく唯一の日本の守りとしての「愛と協力の力 Power of love and cooperation」の福音と同じものである。新生社の日本人の客たちが約20人といわれているのも、オリファントの手紙や68年1月9日附永井書簡の告げるところと一致する。この四人を直ちに分裂のさい新生社にのこった四人と見るわけにはゆかないが、しかし英国から米国に渡ってハリスの許に身をよせた六人中永井、杉浦、松村の3人が新生社を去り、野田と沢井、長沢が野村一介と共に新生社に残ったから、分裂ののちに残った日本人はまさに4人であった。ハリスの教義を信受しうるかどうかをめぐっておきた「分裂」事件において、沢井が野田、長沢とともにハリスの許に残った人間であるという事実は小さくない意味をもつ。ではこの「分裂事件」とはどういう事件であったのだろうか。

まずロオレンス・オリファントの、この事件についての報告を聞こう。この事件のおきたのは1868年5月の、おそらくは中旬のことであった。結城が英国から米国にきてプロクトンの新生社を訪ねたのが5月22日のことと推定されるからである。オリファントは長い間この事件をラクストン一家の追放事件と共に、クーパーに伏せておいた。そのためには彼はクーパーにたいし、半年におよぶ異例の沈黙を守らなければならなかった。クーパーの手紙に返事をかく事さえ出来なかった。この沈黙は明らかに二つの事件の結果である*。それほどこの二つの事件は彼等にふかい傷痕を残した。ハリスもダビも病気になった。その間にラクストンからこの追放事件についての報告をきき、さらにその渡米実現のために一方ならず尽力した結城に関して報告のないのをいぶかったクーパーは、ラクストンと結城のことにに関して説明を求めた。オリファントは返事を余儀なくされた。

11月6日附の手紙でオリファントは、はじめてこの二つの事件について語った。日本人の事件に関するオリファントの記事は、極めて簡潔である。彼は結城に関してその報告の義務を果たすためにだけこの事件にふれる。出来るならば彼はこの事件に全くふれずにすませたかったにちがいない。簡潔であるのは、それだけ彼の心の痛手のふかさを物語る。それも当然で、オリファントとハリスの日本人によせる期待は大きく、又それは報われつつあるよう見えたのである。事件前に書かれた最後の手紙(4月12日附)の中でオリファントは Our Japanese are such precious treasures to us here. とかいた。そして日本人の存在は外部の人の注意をも惹きつつあった。その変貌は彼等の目にも鮮かに映ったのである。4月30日附のニューヨークの The Sun は、新生社中の日本人について次のような記事をかかげた。

我々はその一人に短い会見をした。1日の労働を終えて彼は書斎(といっても実は作業場の一隅にすぎないが)で聖書を勉強していた。この褐色の異教徒は精神的にも肉体的にも生れ変わった(born again)ように見えた。彼は幸福で一杯であった。正義の太陽の

* Oliphant, do, 5th Oct. 1866

照り返しをうけているかのように、彼の顔は輝いていた。我々は白状しなければならぬ——我々はその粗末な室に入るとき唇に嘲笑をうかべ、胸にシニカルな気持をいだいていた。だがそこを出るときには、我々の心はすっかり謙虚にされていた。我々の目には涙があった。

シュナイダーの引用によれば1860年4月30日附 The Sun の記事となっているが、新生社の発足は1861年であり、かつ、1867年以前には日本人メンバーはなかったから、この日附の「年」は誤植と見るほかない。新生社の日本人が世間の注目をひいてこの記事となったとすれば、そこに12人の日本人が揃っていた1868年の4月の誤と見るのがおそらく正しいであろう（追記参照）。そうだとすれば、ラクストン事件のおきる前後のことで「分裂」直前の時期の日本人の消息をこの記事は伝えていることになる。この分裂はラクストンの新生社からの退去あるいは追放がきっかけとなっておきたと私は想像する。ラクストン一家は1868年春新生社に来て短い期間止って再び英国に去ったのである。^{*}

ハリスもオリファントもさらにクーパー夫妻も特別の愛着と期待をもっていた土佐の少年結城と新生社の縁もうすいものであった。

結城について申しますと、彼は「日本人の事件の決定的な瞬間 (at the critical moment of our Japanese affairs) に到着しました。12名の中の8名が愛国的な理由で退去することになった、そのうちのあるものはすでに新生社を去り、他がまさに去ろうとしていた。彼等がつくり出した圧迫が余りにつよのしかかったため、彼はフェイスフルに会うことさえ拒んだ。そしてダビと私が熱心に頼みこんだけれども、そして一時は困難にうちかつように思われたけれども、遂にもちこたえることが出来ず、1週間の滞在のうち、彼等と共に去り、次の便船で日本に帰ってしまいました。

この「愛国的理由によって」といわれている事の内容については、鷲津尺魔の「長沢鼎伝」（未刊、米国リッチモンド市伊地知幸介氏蔵。なお、同氏は長沢鼎の甥伊地知共喜氏の令息で長沢鼎の後継者と定められていた人）の伝えるところによれば

ハリス門下の日本人たちの間に、ある日、日本と米国との間に戦争が起きたらどうするかということが問題になった。あるものは、中立の立場をとるという、あるものは、米国を敵として戦うと主張し、議論が果てなかった。彼らはハリスの裁断をもとめた。ハリスの答えは——私は日米両国の間に戦争が起きるとは信じない。しかし仮りにそれが起きたとすれば、我々は神のために、その義のために戦うべきで国籍は問うべきでない、というものであった。

これはこの事件に立会った長沢から聞いてつくられた記事である。ロオレンス・オリファントの証言にも合致する。しかしこの事件の根底には、根のふかい原理的な問題がひそんで

* Schneider-Lawton, p. 224

いた。この事を我々はオリファントが同じ手紙の中でラクストン事件を説明することばを通じて認めうるのである。オリファントはラクストン問題の核心が、the Use の中におけるハリスの the pivot (枢軸) としての地位と権威をめぐるものであったことを示唆して次の如く語るのである。

ラクストン夫人はここに来る前にフェイスフルの「神聖な使命」を認めた記憶がないと
 いたいようです。しかし「彼」(神)がここで建てつつある(と我々は信じています)
 「彼」自身の新しい王国の、内的な紀律 (internal discipline) に関しては「彼」は
 その意志をフェイスフルを通じて語るということを信じない人は、勿論ここに来るべき
 でなかったのです。

ラクストン夫人をして、ハリスの権威にたいする反抗に駆ったものは、親と子の間の倫理
 —親のその子にたいする愛情と責任の問題に関するハリスの苛酷な要求であった。ハリス
 はラクストン夫妻がその娘たちと一緒に暮らすことを許さなかったのである。新生社の中
 では、成員はどこに誰と —どのグループと住むかを決めるのはハリスであった。またその組
 み合せは、ハリスのその成員の心的状態についての判断にしたがって、頻々と変えられた。

夫と妻、また親と子は、必ずしもつねに離れて住むことを要求されるとはかぎらなかつた。
 しかし神の愛は血縁の愛 love of kin よりも高いということを教える必要があると
 ハリスが感ずると、その愛情が私愛であることを止めて普遍のものになるまで、彼等は
 引きはなされた。⁽¹⁾

子供たちは、しかし通例子供たちだけで生活し、特に選ばれた人が、その世話に当った。
 親はその子に、子はその親に、特別の愛着を抱くことを制すると共に、親からの悪い感化を
 も防ぐためである。親と子が引き離されて生きることは、オリファントにとっても実は堪え
 がたいことであった。しかし、神への愛を己の中にたしかにするため、これをも堪えなければ
 ならないと彼は思い定めていた。ラクストン事件と日本人の問題を報告した書簡の中で、
 オリファントは、主の命ずるところは文字通り従われねばならないとして、次のように記し
 ている。

母のことについていえば、私は「彼」(神)のことばにたじろがずに、絶対的にこれに倣
 うことを欲します。(我々にもっと近いもの貴いものを捨てることを教えているこれ
 らの聖句は、単なることばのあやとして受けとられてはいけないのです。)「わたしの母
 とは誰のことか。私の兄弟とはだれのことか。ごらん下さい。ここに私の母、私の兄弟
 がいる。天にいます私の父のみこころを行うものは、誰でも私の兄弟、また姉妹また母
 なのである。」⁽²⁾我々が古い状態の中で、我々の最善かつ純粹の愛情と見倣してきたもの
 が、実は倒錯したものであることが示された。自然の愛情は止揚 (regeneration) され

(1) Schneider-Lawton; P. 159

(2) マタイ伝 XII, 46~50

なければならない。凡ての地上のものへの愛はキリストに向って切りかえられなければならない……。これを成就する道を教えることの出来るのは、ここの生活だけです。私は、これだけでもこの生活を真実だと信じます。⁽¹⁾

オリファントはまた他のおそるべき聖句を引く。これも亦きびしく文字通りに解されねばならないと彼は考える。⁽²⁾

私のために、また福音のために、家あるいは兄弟、あるいは姉妹、あるいは父、あるいは母、あるいは妻、あるいは子、あるいは土地を捨てるものはいない。しかし、もしあれば彼はこの世で幾百倍の家、兄弟、姉妹、母、子、および畑を、迫害と共に受け、そして来るべき世において永遠の生をうけるであろう。⁽³⁾

オリファントはこれを自分の身の上におきつつある事実として受けとめている。右に引かれている聖句はオリファントの読みにしたがったもの、アンダーラインは、オリファントの施したものである。特に、この世で幾百倍の家、兄弟、姉妹、母子、等を「迫害とともに」うけるであろうと記すところは、ハリス的な福音の性格を見事に表現したものといえる。子は父母を、父母はその子を「彼」以上に愛することは許されない。キリストのこの戒めが、新生社ではそこでの生活を律する「根本律法」であった。私愛はその根源において断たれる。新生社 (The Brotherhood of the New Life) は、かくしてキリストによって新造された人間が、brothers and sisters として生きる「小世界」である。ハリスは世界と人類にこの brotherhood を拡充することによって世界が救われ新しい文明が成就すると信じた。^(註)オリファントはプロクトンのこの新生社を This vital germ of our Lord's New Kingdom upon Earth ⁽⁴⁾ だと信じたのである。

(註) ハリスは Brotherhood of the New Life, its Fact, Law, Method and Purpose (Santa Rosa, 1891) というパンフレットの中で「私は半世紀の間、New Harmonic Civilisation を夢みてきた。キリストの時代が到来して、凡ての怨恨、敵対行為、更に凡ての悲惨と貧乏がなくなり、ここに世界が平和をたのしむ新しい黄金時代がくる。」ハリスはこの新しい黄金時代が実現するために科学の進歩は副次的なものであり、一義的に求められるものは、すべての人間が神を父母として、じきじきに、そして絶対的に、(filially, personally, absolutely) 知って、神において、一つの社会体として一つになることだと信じたのである。(同書1～3頁)

「二而一」なる愛が成就されるために、私愛が根源から断たれねばならない。新生社はこのことの成就のために道をそなえる。それは生活の体系であった。ハリスは教会でなく「共同体」を組織した。それによって「心をつくし精神をつくし、力をつくし思をつくして、神を愛すること」と「自分を愛するように隣人を愛すること」とこの二つの大きいいましめ(律

(1) do. 6th Nov. (1868)

(2) do, 17th Feb. 参照 1868

(3) マタイ伝 XIX, 29 参照

(4) Oliphant, do, 6th Nov. (1868)

法)の実行を保証しようとするのである。人はそれによって生命をうける。世界も人類も一体となり、救われる。こうして実現すべき新しい神の王国のための死活的な重要性をもつ胚芽、あるいは拠点として新生社が維持されるためには、ハリスがその中で神聖な使命をもつ the pivot として特別の地位と権威をもつことが必要であった。新生社の「法」は、ハリスによって課せられたものとしてでなく、神からのものとして受け入れられなければならない。そして「内的意識はそれを疑いのないこととして認め、そして良心はこれに従うことを命ずる」とオリファントは信じた。

「二而一」の福音が、最初日本人留学生たちをつよく捉えたのは、そのみが「国家の一体性」を確立させると信じられたからであった。しかしその前提として、自然的なきづなによる人倫関係は一旦「私」として否定されなければならない。それは容易でない関門であった。ハリスの教義の中では、「二而一」なる愛の原型として夫婦愛 Conjugal love が説かれていた。それについてのオリファントの註解を引用して見よう。それはハリスの愛の福音の根底に、如何にきびしい私愛の否定があったかを明かにするであろう。国家への愛もそれ自体としては、私愛あるいは私欲にすぎないというのがハリスの教であった。

もっとも高い、そして純粋な種類の愛に到達するためには、彼等はお互を絶対に神に献げることからはじめなければならない。彼等は、全く副次的にしか、お互に相手に属すると感ずることは許されない。彼等が結ばれるのは、自分たちを満足させるためではない。それは、離れているよりも、結ばれることによって、より有用な(神の)下僕でありうるためである。しかし、もしそれが、「用」をとげるためであるならば、神は彼等をしばらく引き離すことをよろこび給う。彼等が離れてあることによって、神の業がすすむと感ずるよろこびは、離れている苦痛を補って余りがある。彼等が神により近づくにつれ、お互に相手の中にある、神からのものと彼等が見るものを愛しはじめる。そして二人の中にある神的なものが、いわば合一する。そのときその結びつきは、われわれの思考を越えたものになる。……我々は神の下僕となるのだから、神に奉仕する行為の中においてのみ、相互に愛し合うのである。一言にすれば、我々は、我々が、お互に他を愛する以上に神を愛することを、つとめなければならない。我らのある人への愛は、その人が神への愛を増すその程度に応じてしか、増すことが出来ないからである。^{*}

(註) のちにオリファントは新生社のため、タイムスの特派員として普仏戦争下のパリに駐在中、Alice le Strange と恋におちた。ハリスは容易に二人の結婚を許さなかったが、最後に夫と妻として同棲しないことを条件として結婚を許した。二人は1872年にロンドンで挙式した。彼等は12年の間忠実にこの約を守ったといわれる。^{*}

* Oliphant, do. 3rd Jan. (1868)

* Schneider-Lawton, p. 264, 415n

(2)

新生社中の日本人の間に、「分裂」をもたらしたものは、オリファントによれば、「愛国の問題」であった。長沢鼎伝の中にもそれを裏付ける証言がある。しかし杉浦の手紙と、沢井、野田の告別の書簡を照し合せてみると、争点となったものはさらに原理的で、ハリスの教義と新生社中におけるハリスの地位と権威にかかわっていたことが、推測されるのである。妻や、子に対する愛情が私愛として否定されることに日本の武士たちは殆んど抵抗を感じなかったかもしれない。しかし子を親から引離すハリスの命令に抵抗して、社を逐われたラクストーン一家（彼等は財産を社に献げて入社した）への同情が、ハリスへの絶対信従という鉄則への疑念を生んだことは十分に考えられる。これはやがてハリスの「神聖な使命」を前提とする the pivot という地位への懐疑につながった。そこに「愛国の問題」がおきた。神以上に国を愛することが明白に否定さるべき私愛と断じられたことで、新生社に止ってその理想に献身することがもはや不可能と感ずる心の状態が、日本人の多くのものの中で動かないものになったのであろう。

新生社からの退去は、杉浦にとってはある意味で英国でハリス 従学を決意したとき以来の動機が貫かれることであった。後引の彼の手紙がこれを明らかにする。しかし永井にとっては、はっきりとそれは再転向であった。彼はかつて仲間の先頭に立って新生社に入り、また一人でも多くの日本人を新生社に誘引しようとした。今度は先頭にたってそこを出、また日本人を最後の一人までそこから連れ出すことに全力を傾けた。彼のこの行動にハリスもオリファントもふかく傷ついた。オリファントはクーパーに次のような言葉を書き送っている。

永井を貴兄は多分御記憶のことと存じます。ここに来た人間のうちもっとも将来有望でかつ信仰のもっとも深いと見えた人でした。また、私をもっとも信頼し、もっともつよく愛着した人間でした。私と共にはじめてアメリカを訪れたのもこの人でした。ところがこの人が、今では同国人を最後の一人まで、我々から引きはなすため、もっとも執念ぶかい動きをつづけているのです。彼はうわべではこの上もない友情を示しながら、も

っともらしく偽善の告白をな⁽¹⁾しつづけるのです。

ここで結城の足どりを調べて見よう。⁽²⁾ 彼が新生社に到ったのは、永井も杉浦もすでに新生社を去ったのちであった。彼をもっとも熱心に新生社に誘ったのが永井であったから、永井の退去を知ったことは、彼をひどく混乱させたにちがいない。ダビとオリファントに強いて引止められて結城は一週間だけ新生社に泊った上、そこを去った。それが5月29日である。30日にモンソンにつき、薩摩藩の吉田彦磨方に二泊、他の薩藩留学生たちとも会った。彼はここではじめて、永井と杉浦がニューブランズウィックで研学中であることを知った。6月1日朝7時にモンソンを發った結城は12時にボストンについた。ここには岡山藩の花房虎太

(1) do, 28th May, 1869

(2) 二通の永井杉浦宛結城書簡（吉田文書2514, 2852）参照

郎と柘植がいた。土佐藩に關係のあるフレンチ方に身を寄せ帰国の便船を持つうち、結城はモンソンの吉田からの手紙で、野田、沢井の帰国を知った。彼は杉浦、永井に宛てた手紙(1868年6月21日附、吉田文書2852)の中に、

吉田氏の書中に、野田、沢井二氏当月6日速かにプロクトン発車にて日本之様御帰国之様子受玉り候得共如何之神教にて哉詳かに聞知せず、定めて大なる神教と奉案候。何卒右之両状乍下御聴せ度奉願候。

と書いている。神意にしたがった行動のみが正しいとする思想の、新生社風の表現だといつてよい。

結城は7月7日にボストンを出発してニューヨークに赴きそこで永井、杉浦に会って、9日に出帆、サンフランシスコ経由、日本に向った。この時結城に託して花房が永井、杉浦に贈った手紙(7月5日附)が残っている(吉田文書2452)。この手紙は二人の新生社退去がどのような印象をこの人に与えたかを物語って興味がふかい。その一部を引用しておく。

御両所様より御念書先ニ拝見仕候、此節之御進退振りの儀ニ付不顧失敬卒忽相伺候処御叮嚀之御書通被成下、尚結城子よりも承り御心事委細拝承仕候。前後の御苦慮嘸かして奉察候。小生儀も先頃湖辺之雪を衝て参候節、可疑もの不少候故御承知の通縷々疑問をも発し尚以て落ざることの不少候故不得止一旦立帰り候事ニ御座候得共、毎々貴方方の御決意の程など存出し今一度は是非とも参り候て尚推究候半と存じ居候処ニ御座候得共此節諸君の御議論の趣を以ては愈々不可信ものと決定致候故、最早存留りし事ニ御座候

この手紙によってみても花房も亦、一旦は新生社入りを考慮していたことが窺われる。しかしハリスの教について疑念をとくことが出来なかつたため、わざわざ雪をおかしてプロクトンを訪ねながら、「止むを得ず」立帰った。そのときひたすら説得につとめたのが永井と杉浦(おそらくもっぱら永井であつたらう)であつた。それは、「先頃湖辺の雪を衝いて」とあるところから見て年の明けてからの冬、すなわち1868年の1月か2月か3月のことであつたらう。エリイ湖畔という土地を考えると、場合によっては4月であつたかもしれない。一旦立帰つては見たが、永井等の「決意の程」を思つて、なお再訪を花房は考えていた。それだけに、永井たちの「進退振り」が納得出来ず、手紙を書き、その返書とさらに結城の補足説明を得て了解したというのである。

永井と杉浦のこの時の返書が見られないのは残念だが、幸いこの事件があつてから1年余り経つた1869年8月2日附の、杉浦のこの新生社退去事件の際と現在の心事をのべた長文の手紙が残っている。松村淳蔵との連名で宛名人はモンソンの三人、すなわち吉田(彦)、大原工藤である。ここに引用するのは原書簡の約4分の3にあたる。省略した部分には、函館に(註)拠つて王師に抗した榎本のことが、かなり詳しく論評されているほか、昨年8月以来フェリスから永井と松村と3人の費用洋銀765枚を借用したこと、永井が7月27日にモンソンの近くの Wilbrahm Academy に移つたことが記されている。

この手紙に名をつらねている松村淳蔵は、いつも、もっとも冷静で「即物的」であつたらしい。六人の仲間のうち、彼一人だけがついに最後までキリスト教に入信しないで通したらしい。しかも「分裂」の際も、退去の意志はハッキリ表明しながら、沢井、野田が帰国するときには、まだ新生社にとどまっていた。これが、後引の沢井、野田の「留別の書」の宛名の中に、彼の名だけが出ていない理由であろう。彼は政治的でも、感情的でもなく静かに己が理と信ずるところにしたがって進退した人間であるようだ。沢井、野田がプロクトンを発つてから間もなく、彼も永井、杉浦のあとを追って、7月はじめにニューブランズウィックに移り、9月に3人揃ってラトガース大学に入学した。しかし彼は結局初志を貫いた。1869年漸くアナポリスの海軍兵学校に入学を許され、その最初の日本人卒業生となる。次に紹介する手紙は筆跡から見て、杉浦の手に成ることはたしかだが、その内容も明らかに杉浦のものである。これが松村との連名の手紙であることは興味ふかい。松村は永井をも含めてモンソンの三人（吉田、大原、工藤）にたいし、いわば副署して、宗教上教義上の問題とは別に、人間として杉浦の立場に支持を表明しているように見えるのである。私が永井を含めてというのは、杉浦が昨年新生社を去る際「少数の友人は別として」except a few friends 別段悪声も放たなかったし、はげしい議論のやりとりもしなかったという場合の、その少数の友人に殆んど確実に永井が含まれていると思われるからである。これは、のち外債募集問題の際の森にたいするはげしい個人攻撃^{*}を考えると極めて自然の推測である。

杉浦弘蔵の手紙

長沢義ニ付而者先比モ 吉田兄江略杉浦ノ御咄申上置候通、日本ヨリ送財之都合相調ヒ次第ニハ早速彼方江罷越シ「ハリス」并「ヲリハント」江面会ヲ得篤ト此節我大政府 appointment 之御所置向且ハ 愚存之程モ細々談論説破ニ及ビ充分之道理ヲ述べ彼方合点之上、断然ト長沢ニハ直ニ彼地出立セシメ伴ヒ来リ申度切志漸ク只今 此迄堪へ忍ブ事ヲ得候。折柄此節コソハ乍不肖右之官金相達候得ハ一日モ速ニ彼方江罷越、此任ヲ相勤度、就而ハ右之官 財 此 地 ノ mail ヨリハ定而相届キ可申候バ格別間モ無之故、彼ノ問合書ハ其時一所ニ「プロクトン」江持参致シ右之談判ニ 及ビ是非此志願ヲ遂ゲ度決意ニ御坐候。尤杉浦彼地昨年出立之砌別段悪声モ不出且ハ甚敷議論モ except a few friends 不致候処、其後何カ至微ノ趣向違ヒニ相成リ杉浦ニハ矢張彼ノ「スウィデンバーヂェン」ヲ信用シ其メムパールニ属シ何ニ角干今 Corresponding ヲ取り候哉ニ理会セラレ或ルー一友在テ時トシテ甚ダ懇切ニ杉浦之 case ニ於ヒテハ互ニ love 之有様ニテ彼地出立其後 Harrisian 杉浦ガ名ヲ呼デ 尚ホ New life of brotherhood ヲ一無二之仲間間致候様理会相成居候。就而ハ未ダ何カ彼方ト Connection ノ様ニ候間「ハリス」江対シ弥彼レハ欺偽ノ者ト壺封デモ遣シタラバ余程可然宜敷カト頻リニ親敷 persuasion ニ預リ候得共、愚存ニハ数ナラス不肖ニ対シケ様之事迄気附ヲ取り親切身

* 拙稿、森有礼研究第一（東北大学教育学部研究年報第15集）19頁

ニ余リ忝ク相覚へ候次第、併シ僕ノ心底ニ於テハ其 persuasion ニ同意シ難ク、如何トナレバ右ノ理會ハ何処ニ而カ 趣意違ヒニ相成リタルト存候ハ「プロクトン」出立之砌、「ハリス」教ヲ信用理會スルコト能ハズ、其道ヲ断リテコソ神命ニ違背スル哉杯ト奇々怪々之質問等モ有之其上段々異論是等ハ以前ニ御咄申上置候ヘハモ差起リ候得共僕ニハ本道ニ耶蘇基督上帝之御教意ヲ学バントノ切志ヨリ彼地出立ヲ決断致セシ訳ナレバ諸友之異見ヲ万々氣之毒ナカラ大道ヲ求ルノ情ニ於テ聴入ルコト能ハズ遂ニ彼ノ門徒ト交リヲ絶チ出立致候事ナレバ只今ニ至リ「ハリス」之門徒仲ケ間致ス杯トハ更ニ不覚、勿論信用之違ヒタル「プロクトン」仲ケ間江對シ惡声ヲ出ス杯トハ quite unnecessary ト存ジ候次第、古語ニモ有之候ハズヤ「君子ハ交リ絶テ不出惡声」若シ「ハリス」之教へ都而偽欺巧惡術策ニ致リ候得バ最初米行ヲ決スルノ砌リ great mistake ニ而落トシ穴ニオトサレ候毫狐子同前ナリ、唯僕ノ臆味ヲ後悔スル而已

〔中略—134頁に引用ずみ〕

過テハ則チ改ルニ勿憚ト云本文ニ少シ頼ミ在ル feelingニ御坐候右之形勢故定而僕ニハ彼ノ spiritualism ニ全ク信用致ストカ、或ハ彼ノ欺教ヲ知リナガラ唯事ヲ温和ニ謀ラント前後ノ勘弁因循ニ流ルル杯ト疑察致ス人が在ルカモ難計ハ候へ共賢兄等僕が内情克ク 浅智之程御存知ナレバ愚意ヲ述ルニ不及候、勿論在天真神眼分明多恐モ僕如キ微少 creature ナル心意ノ善惡共ニ克ク被知召筈ナレバ、不肖ニ於ヒテハ如何程世人に狂人ト云ハレヨウガ又ハ大馬鹿者ト云ハレヨウガ是レコソ right ト真心ニ不落内ハ如何程人ヨリ聞ニモセヨ秋毫モ心ニ關係不致時来ラバ是非此趣意違ヒノ根源「プロクトン」ニ於テ探索致シ度万々「ハリス」迄右通僕ハ未ダ彼ノ門下之様理會モ有之候ハハ直ニ面會ヲ期シ何レノ筋愚決之程至而細詳ニ述度覚悟ニテ漸ク日本ヨリ一左右之有迄待付忍フ事ヲ得ハ其中ケ様 miserable sinful natureニ依テ悔改之心甚深ク Praying to God, our Heavenly Father that He would keep me safe, and send His spirit to lead me unto all truth, that I may not be led away into error, but the scriptures for myself, praying for His spirit to enlighten my understanding, so that I may come to have a Having knowlege of our Lord Jesus Christ. And I have been meditating and thinking so much for some time, 只今ニ至リ、愚僕ノ職掌トスル所諸事明白ニ見ル事ヲ得甚安心幸福之至幾重ニモ難有覺へ天父ノ無限御恵ミヲ奉謝事ニ御座候○「ハリス」事ハ全ク狂氣ニ而モ無之又ハ万民ヲダマサウト惡術ヲ巧者ニテモ無之唯壯年ノ折ヨリ何カ常人トハ異リ頻リニ深遠無形之道ニ天性近ク近年ニ至リ弥己レノ奇說ヲ pure true Christ's doctrine ナリト自ラ落着致シ実ニ世人皆彼レノ門ニ入り候ヘバ純粹ノ兄弟仲ケ間ニ交リヲ結ブ様信用致シ候志情ナレバ愚存ニ於テハ彼全ク欺偽巧惡之者トハ名付難ク併シ大誤失ノ空説ヲ吐ク creature ト云ヒツベシ Perhaps I may call Mr. H. is a faithful man, but thousands of faithful men make mistake in what they believe and teach; and it is not the opinions of men that Christian should be guided by, but the teaching of the new Testament. 己レ其道ヲ不信トテ唯々無理無法ニ sectarian

feeling ヲ以テ他外ノ信神ヲ怨敵之如ク誹謗惡声スル等ノ義ハ愚存ニ於テ perfect right トハ至徴モ心得不申候神命ニモ “Love enemy”又 ‘Every Kingdom divided against itself is brought to desolation and every city or house divided against himself shall not stand’. According to my view that there are so many different opinions among Christian sects, therefore I wish not to have any argument for creeds of different churches; but to study the Word of God earnestly, and to understand the real meaning & to be taught by the Spirit of God by continual prayer. Christ Himself says—They “that seek me shall find me” We must work together for the Lord no matter whatever our denominations or duties may be. Each different members ニ依テ大同小異之説有之候ヘバ方今全ク all Christianity 合心同意ト云フハ甚ダ難キニ似タリ故ニ僕ノ切ニ祈願喝望スル処ハ右之小異説枝葉末派ニ抱ハラス只管互ニ大道ノ源ヲ克ク探学致シ唯 Pure & true teaching of Christ just as it is in the Gospels without any narrow sectarian or selfish feeling so I wish such a simple Christian religion will be introduced into our native land, while we reforming our laws into the universal in the World 左様我邦ニ於テ改革相企候ヘバ 最初少シハ干戈ノ難モ可有之カ 然レドモ其後ニ至リ上ミ天子ヨリ下モ庶人ニ至ル迄 「一是ニ皆以修身為本」 万民各其道ヲ踏ミ其職ニ附キ遊民モ少ク相成リ 全国凡テ唯如一家静謐ニ 仁政ヲ以治メ付ケル大先生モ出世在レカシト 志願罷在ル事ニ御座候何レ当時60余州ニ於テ大小學校ノ設ケ有之国民ノ心眼ヲ明開スルコト最モ当務ノ急タリ、然レバ後年ニ到リ When children of God are guided into the Strait-gate the world itself could we live true Christian life will become one loving family in God forever more. 陳而長次モ何レ 始終農業而已相働居候而不相濟追々良医ト相成リ夫々国用ニ相立度、就而は他業ヲ不顧己レノ職掌ニ一向差ハマリ成学有之度懇願之次第御座候得共速ニ是ニ School ニモ入校勉学相調候様都合改度偏ニ希望罷在候。先ハ愚存之形行御相談申上候ママ是ニ付 御賢説モ有之ラバ如何様トモ承知仕度奉伏願候○先比「ワリハント」ヨリ 僕江一封御認候趣ニ少々例ノ如ク挨拶之跡ニ当分ハ日本人僅カ1,2ノ間ダ「プロクトン」江残留致シ就而は長沢義「ハリス」之望ニ己レノ一子同様ニ養育致度候間、先ツ彼方江滞在相叶候様薩公江僕ヨリ形行申上呉ル義に相叶間敷併テ若シ其上ヘ 公之御免モ無之候ハハ無致方如何様トモ 時宜ニ応シ望通り所置可致トノ義ナリ、故ニ此節ハ直ニ差越シ全ク粗暴無道ニ談判スル訳ニテハ 無之最モ重ナル我主命 Love, Faith & Patience 之三戒ヲ克々保含致シ此方之趣意丈ケヲ充分相述ルニ於テハ「ハリス」ニモセ「ワリハント」ニモセヨ they have no right to say any thing against it in the world (以下略)。

グリフィスは杉浦について、彼は日下部のように brilliant ではなかったが noble な人間であったと述べている。温和で誠実なその人柄は、この手紙の中にもにじみ出ている。ハリスという特異の存在によってはじめてキリスト教にふれ、のちその許を離れてオーソドックス

のキリスト教に入り、受洗もした。(1870年ニューブランズウィックの The Second Reformed Church において。牧師は Hartranft であった。) というキリスト教に関する多角的な経験が、いろいろの問題を提起している。しかし今はその問題を追っている余裕はない。ただ一言いっておきたいのは、薩藩の六人の留学生中この杉浦がもっとも純粋に信仰を信仰の問題として受けとめ、これをつきつめようと努めたことである。彼の経験は日本プロテスタント史の見地からも相当重視されるべきものであろう。グリフィスの The Rutgers Graduates in Japan, Albany (1886) 附載の Japanese students in Rutgers College の中に杉浦に関して次のような記事がある。

「杉浦弘蔵(畠山義成の変名)は薩摩の英国留学生団の一人であるが、……Dunkirk 附近のある社会主義的狂信者の手に落ち、そこの農場で、無報酬の労働に従事していた。これは彼等の言うところによると『肉体を十字架につけることによって、真の知識をうけるため』であった。彼は彼等から遁れてニューブランズウィックに到り、1867年(68年の誤り)ラトガース大学の理科に入り、1871年まで止った。それから岩倉使節団に通訳として随行することを命ぜられた。^(註)彼は世界を廻ってヨーロッパの殆んど凡ての元首に会い、1873年秋日本に帰った。彼は内務、文部、外務の各省に歴任、開成学校(東京帝国大学の前身)の校長となり、その発展に寄与した(下略)。なお日下部太郎は福井藩士で1867年ラトガース大学に入り、最優秀(特に数学)の成績で、4年に進級したが結核で客死、卒業者の扱いを受けた。

(註) 1871年10月23日附の吉田の永井大蔵少丞宛森少弁務使書状(吉田文書11)に「杉浦来る28日開帆、欧を経、帰朝に決す」とある。

Dunkirk 附近の社会主義的狂信者がプロクトンの新生社を指すことはいうまでもない。悪評のたかいこの一団に絶縁状を書くことを一友(米人か?)があつて親切にすすめてくれた。それを杉浦は拒んでいる。はっきりした信仰上の理由で袂をわかつて、再び復帰する意志が自分にない以上、自分の立場を救うために旧友に悪声を放つのは無用だというのである。彼が新生社を出たのはひたすら「本道(当)ニ耶蘇基督上帝之御教意ヲ学バントノ切志」によるのであった。この状況の中で、彼はむしろ、ハリスのため弁護の労をさえとっている。ハリスは狂人でもなく、詐欺師でもない。ただ天性超自然の傾向がある。その素質にもとづく奇説を唯一の純粋で真実のキリストの教と自ら確信して、世人が皆彼の門に入れば、そこに万人が純粋の兄弟として共に生きる世界が成立すると信じているのだとする。彼はハリスを誠実な人間と認める。しかし「何千の誠実な人が彼の信じそして教えることにおいて誤っている」とする。ハリスの誤ちを杉浦はどのような点に見ているのであろうか。

その第一は、「常人と異って深遠無形(稽?)の道にちかい」天性から出た奇説あるいは空説であり、第二は、この空説を唯一絶対の真理あるいはキリストの真説と信じて、他外の信仰を怨敵の如く罵る一種の宗派的精神(Sectarian feeling)、そして第三に新生社においてハリスが the pivot として、これに絶対の信従を要求したその事実にかかわっている。これ

は明かに ラクストン事件との連関で大きくクローズアップされたのであろうが、もっとも本質的でバイタルな問題であった。杉浦は、クリスチャンは（その行動に関して）新約聖書によって導かれるべきであって、人間の意見によって導かれるべきではないと主張する。ハリスを通じて神が語り、また働くとする信の否定である。ハリスの神聖な使命を信ずることのできなくなった杉浦にはこの新生社の生活は一日も堪えがたいものになった。そこを去ることはただちに生活上の危機を意味する。さらに多年の同志との袂別も堪えがたいものであった。しかし、彼は、自由になって本当にキリストと神の意志を学ぶために、新生社を去った。これが杉浦についての真実であったろう。杉浦の去就は一貫していた。しかし永井の場合、それは再転向であることを免れなかった。

(3)

分裂のあったのち、沢井と野田は、新生社に残った。彼等を踏み止らせたものは、何であったろうか。幸いその心事を窺うための根本資料ともいえるべき、沢井、野田の退去した同志7人に宛てた「留別の書」がコロンビヤ大学バトラー 図書館の Special Collection 架蔵の Harris-Oliphant Papers 中に発見された。これはオリファントがクーパーに送ったコピーをさらに写したもので、筆跡によって筆者を推定することは出来ないが、これは杉浦、松村の場合と違ってまさしく二人の意志の表明であると見てよい。宛名は、久松、島田、大原、吉田（彦麿）工藤、永井、杉浦の7名で松村の名の見えない理由は先にのべた。これが書かれたのは、1868年6月17日で、パナマ地峡の海港 Aspinwall（今の Colon）に入港中の郵船 H. Chauncy 号の船中であつた。二人はハリスの勧めにしたがって、その素志をひるがえして帰国の途上にあつた。木村はハリスは「神託と称して二人に帰国をすすめた」⁽¹⁾と記している。カスパートの「ハリス伝」⁽²⁾の中に二人の帰国に関して次のような記事がある。

ハリス氏は、彼等がその「内的状態」にてらして the Useに 残って直接にそのためにつくすよりも、彼等が身につけることの出来たかぎりて the Use の精神そのものにしたがって、祖国の人民につくすのが適當であると認めたのである。

ハリスが熱心にその教養につとめていた日本人12人中8人が新生社を去ったことは、ハリスの日本再生計画に大きい打撃であつた。しかし、ハリスは日本のために出来るだけのことをしようとした。彼は残った四人の中から、沢井と野田を選んで、これを日本に送つたのである。彼等は「新生の真理を受け容れつつある」程度における「進んだ日本人」であつた。彼等が独立でなしうるものが極めて限られていることをハリスは見ぬいていたにちがいない。しかし「彼等が身につけることが出来たかぎりて」新生社の精神にしたがって新しい国家建設のために働くことが、彼等の祖国にたいして負う責務であるという判断がハリスにあつたのであろう。いづれにせよ、彼等は決して大きな抱負をもって帰国したのでないことは注目さ

(1) 「森先生伝」31頁。

(2) Cuthbert, A. A. The Life and World-work of Thomas Lake Harris, Glasgow, 1908, p.192.

るべきであろう。「知識に乏しく、そのうえ祖国の現状に無知である我々如きものに、言うに足るほどの寄与をなしうる見通しは殆んどない。しかし我々はゆくことにきめた、騒乱と闇黒の中に身を投げられるために。そうすべきだと我々は信ずるからである。王国の回復されるための、もっともささやかな犠牲になることができるならば、我々は満足する。」これが帰国しようとする沢井と野田のハンプルな願いであった。

本書状にしたがえば、二人が（ハリスのすすめにしたがって）帰国を決意したのは1868年6月7日で、その翌日には二人はプロクトンを離れている。この慌だしい帰国にさいしても二人は、新生社を退去した仲間の批判にたいして、ハリスとその教及び事業を擁護せずに別れることができなかつたのである。この手紙によっても、我々は彼等の中の争点がハリスの「宗派」性と Divine Mission を中心とするものであったことがわかるのである。一年余りのちに書かれた杉浦の手紙にたいして、この二人の手紙がそのまま回答となっていることは、彼等の中で、ハリスの教義についてかなりの期間、論争が行われて争点が次第に明かになっていたことを示すものであろう。

沢井と野田はオリファントと同じく、ハリスの聖使命を信じ、神がハリスを通じて人類の救いのために働きつづけていることを感謝する。彼等は一言にすればハリスが新生社の「枢軸」the pivot であることの必然性を認めるのである。この問題は改めて立入った考察を要する。もう一つ彼等が主張するのは、ハリスを通じて示されるような高次の真実については、「地的人間的な」証明が成立しないということである。それは「主」の中に己れの生活を見出すことを餓え渇く如くに追い求めて、その子となる、再生の人にたいしてのみ開示される。こうして彼の内部に成就される状態こそ、神が人間のために定めた、本来の清浄の状態である。それへの復帰によらないで真理を知る道はない。

沢井と野田が旧同志に宛てた「留別の書」を、原文のまま引用しておく。翻訳によって彼等の心情をそのまま伝えることは難しいからである。これが当時の二人の「内的状態」であった。これは公人として出発しようとしていた時に、彼等が何を信じ、また志していたかを示す重要な原資料である。

沢井と野田の「留別の書」

Our dear bretheren,

Steamer H. Chauncy

June 17th, Aspinwall

We ought to have written even a few lines before we left Brocton, but on account of our having been so much pressed for time, that we could attend only to some very important and essential matters we could not do so. We expect however that you have already heard of it from Matsmoola and the others. We made up our minds on the 7th inst. and took our departure from Brocton on the 8th and arrived

at New York about 9 o'clock on the morning of the following day 9th. And at 12 we sailed out thence for Panama. The object of our going this time is nothing very special, but is simply to discharge our duty to our country. Though we know full well that we such ones, and with such a scanty knowledge, and moreover being so ignorant about the state of the affairs of the day; cannot anticipate, or even suppose to do much good to it, we concluded to go, throwing ourselves into the midst of disturbance and darkness, because we have felt we should. We should be exceedingly glad and fully satisfied if we could only be worthy to become even the very smallest prey for the sake of the restoration of the kingdom. We still feel, yea more and more, inexpressibly grateful towards the Lord our Heavenly Father, for He is through His beloved servant T. L. Harris working so infinitely and so mercifully for the salvation of all the inhabitants on the globe. It is a very possible thing that one who has not fully understood or who has never tried truly and generously to embody the Divine Life may fancy or may form some immaterial imaginations by his prejudices, that Mr. Harris' teachings are founded, not on the true Divine and universal, but rather on a small sectarian and earthly element. We have no wish to enter into this question at this moment, but would however beg leave to say a word or two in vindication of his teachings. Those who in reality hunger and thirst to find their life in the Lord, and to become his children, or rather to return to their proper and pure state originally ordained, shall doubtless arrive at the state in which they shall be able to bear the true acknowledgement concerning the teaching through Mr. Harris. And since it embraces within itself such an unwonted, wonderful, and influential element and activity, it will bear no earthly human testimony, and should of course no longer be within the compass of unregenerated human minds. Yet it will assuredly undergo the conviction of every unprejudiced and Godly principled character. It will convince every heart and mind of those who have put every test to prove it, and who have carefully examined and analyzed its elements.

The purpose of telling you all these things is but to make what we acknowledge clearly known to you, lest that you might have taken some untrue impressions, and that you might thereby have felt somehow badly towards the teachings. We may perhaps have gone in some expression or other, beyond the limit of our dignity, but we are very sure that if so, you will freely or geneously pardon us.

May the most high guard you against every temptation and attraction of the

Prince of the World.

Yours very sincerely,

To Messrs. Hisamatz

Noda

Shimada

Sawai

Ohara

Yoshida

Kudo

Nagai

Soogiwoola

私はここでもう一度杉浦、永井のハリス批判においてもっとも決定的な争点をなしていた、ハリスが新生社において the pivot としてそのメンバーの絶対信従を要求した問題について考えて見たい。私の見るところでは、杉浦、永井をして新生社に止ることを不可能ならしめた原因は、彼等が新生社の the pivot としての地位をいわば「実体的に」ハリスに帰属するものと見た点にあったと思われる。

しかし、新生社は、すでに再生をとげた人たちの Brotherhood であるよりは、むしろ基本的には自然的な自己の殺滅を目指す、生活の全場面における、四六時中の訓練の組織であった。はげしい労働とハリスへの絶対信従はこの目的に結付く側面をもつ。シュナイダーもこの点を見落していない。^{*}

新生社に入社をゆるされたメンバーはハリスにたいして、絶対的信従 unconditional obedience を約束した。彼が信者に為すことを求めるものは、その是非善悪を問うことなくそれはなされねばならなかった。彼が要求していたのは、メンバーがその精神的な転生 Spiritual transformation をとげられるまで判断を停止することであつたらしい。と書いている。この解釈によれば、絶対信従は人間再生と高次の真実にたいする開眼を即ち己見の離脱を、究極的には私己の殺滅を、目指す訓練に結付いた教育的な意味をもつ。^(註)

註 権威はハリスではなく、ハリスを通して語りかつ働く神にぞくするものであった。私はこの間の消息をもっともよく伝えるものとして叡師(知識)の仏道修行においてもつ役割に関して道元の語るところを引用して、ハリスが本来新生社においてもっていた the pivot の任務についての脚註として用いたいと考える。道元によれば、学道第一の故実は、「我が心にたがえども師の言ば聖教の言理ならば全くそれに随いて本の我見をすて改めゆく」ことだというにあった。さらに彼は真実の知識(師)への随順を説いて次の如く語るのである。

祖席に禅話をころへる故実は、我が本より知り思ふ心、次第次第に知識の詞ばに随ひて改めもてゆくなり。仮令仏と云ふは我が本より知りたりつるやうは相好光明具足し説法利生の徳ありし釈迦弥陀等を仏と知りたりとも、知識若し仏と云は蝦蟇蚯蚓ぞと云はば、蝦蟇蚯蚓を是ぞ仏と信じて日此の知解を捨つべきなり。此の蚯蚓の上に仏の相好光明、種々の仏の所具の徳を求むるも猶情見あらたまらざるなり。只当時の見ゆる処を仏と知るなり。若し此の如く詞に随ひて情見本

* Schneider-Lawton, p. 151

執をあらためて行かば自ら契ふところあるべきなり。

「留別の書」の中でも、ロオレンス・オリファントの書簡の中でも、ハリスの聖使命を信ずることは神のみが唯一の主、善きもの、教師であるとする厳しい原則に決して牴触するものでなかった。彼の教が権威をもつのは、それが彼を「通じて語られるもの」だからである。しかし、彼が新生社とそのメンバーのために定める「法」や指示が、絶対的に従われなければならないのは、メンバーの内面意識がそれを神からのものと認め、かつ良心がこれに従うべきことを自己に命ずるからである*。それ故にそれへの背反は不可避免的に精神の後退と頽廢をきたすのである。

すなわちそこでの絶対信徒は実は彼を通して語りまた働くものにむけられている。人はそれを通して旧我と私己からの離脱をそれぞれの程度において成就し、キリストにおいて新たに生れる。そして再生の人は各自が自ら自己の pivot となる。この全過程を通じて見て、はじめてハリスへの絶対信徒の要求と彼自身の詩句*

God is His own interpreter

And He will make it plain

が調和をもって理解されうるのである。

杉浦は、直接に神の霊の導きを祈求しつつ聖書を読むことを通して「主」に関する天的な知識に到ることを期待している。しかし彼は人間の新に生れるところにはじめて開示される真実を信じないわけではない。又ハリスと共にキリスト教の真理は、世界が一家となるところに成就されることを信じている。杉浦が沢井や野田やオリファント等と決定的に異なるところは、ハリスの教の中にだけ純粋で真実のキリストの教を認めようとする態度を宗派的として斥ける点にある。彼は各宗各派はその宗派的感情を捨て、小異を捨てて大同につくことによって、単純で真実のキリストの教をさぐり当てることが出来るとも考えているかの如く一種の折衷主義の立場に近づいている。これにたいして、沢井は、人間が真実に生きるために、再生の必要であることを信ずる。そしてキリストに於て、旧我が死に、再造の人となるきびしい過程の成就のために the pivot としてのハリスとそれへの絶対信徒がその条件であることをふかく感じとっている。しかし、この pivot (枢軸) という地位はつねに実体化の危険につきまわっている。そして事実、新生社の中にハリスを素朴に「神の代理人」と見る傾向も生れていた。^(註)杉浦は敏感にこれを感じとっており反撥したのであったかもしれない。しかし the pivot の否定は、ともすれば、私己殺滅のきびしい全過程を通じての「人間再生」へのきびしい意志の喪失につながる。森は杉浦とはちがった危険な道を選んだ。そしてこれを歩み切ろうとした。

この相異なる撰択はのちに、彼等の信仰と公私の生活の上にか見べき影響を残してい

* Oliphant, do, 6th Nov. (1868)

* Harris, God's Breath in man and in Human Society, Fountain Grove, 1891 p. 54

るだろうか。これをそれぞれの個人の生活の中に追跡することは容易でない。私は主として、森の公生活の中に、いわば「沢井」の経験がどういう形で生きのこったか、あるいはあとかたもなく消えていったかを、追求して見たいと考える。

(註) オリファントはのち、ハリスに不信を抱くようになって、袂をわかつようになるが、ハリス批判の中心にこの枢軸人 *pivotal man* という観念があった。彼は「神がそれを通じてのみ人間に働きかけるという枢軸人を立てる教義ほど危険なものはない。それは初期教会にはじまりローマで典型的なものがつくれ、今に至っている。それは人の情緒と意志と理性を咒縛して、その前に膝まづく人間をみじめな奴隷にする」とのべている。しかしこの観念の本来の役割りは、オリファント自身の指摘するように、すべての人を、道義的にも、理性的にも、身的にも、教会や人間への隷従から解放して、自分を自己自身の *pivot* たらしめるところにあったのである。(Schneider-Lawton, P, 401 参照)

結 章 必 死 苦 学

森と鮫島（帰国とともに二人はもはや沢井と野田でなくなる）は帰国することを神意（それに即して祖国への義務）と信じて帰国した。彼等はそこで彼等を待っているものが何であるかについて何も知らなかった。また何が出来るかについても、抱負も見通しもなかった。ささやかな犠牲として役立つことができれば満足だというのが正直な彼等のきもちであった。

だが、彼等を待ちうけていたものは、思いも設けない「歓迎」であった。日本は近代的な国をつくる仕事に追われていた。指導者たちは手さぐりで働いていた。設計図らしいものを描く力は誰も持たなかった。こういう有様のところに、3年の間欧米の社会に生活して帰った二人は、それだけで最新の知識の持主であった。二人はあらゆる分野で引っぱりだこになった。帰国後1年余りの森の履歴を一見すればそのことは明瞭である。それを福沢は、「幸運らしい不幸」とよんでいるが、森自身はおそらくはこれを少しも好運とは感じなかったであろう。その意味はやがて明かになる。

明治元、二年中の森有礼の履歴

明治元年7月25日 徴士外国官権判事被仰付（22才）

〃 年9月19日 議事体裁取調御用被仰付

〃 年11月4日 学校取調兼勤被仰付

〃 年12月4日 東京在勤被仰付

明治2年正月18日 軍務官判事被仰付並ニ外国官判事兼勤（23才）

〃 年3月12日 学校取調兼勤依願被免

〃 年〃月23日 本官ヲ以テ当分議長同様可相心得旨被仰付

〃 年4月17日 是迄ノ職務被免制度寮撰修被仰付

〃 年〃月19日 当分ノ処制度寮副総裁ノ心得ヲ以テ可相勤様被仰付

〃 年5月18日 是迄ノ職務被免学校判事被仰付

- 〃 年〃月〃日 本官ヲ以テ制度取調御用掛被仰付
- 〃 年〃月23日 学校判事被免制度取調御用掛是迄ノ通被仰付
- 〃 年6月20日 徴士并是迄ノ職務被免、但位記返上
- 〃 年〃月21日 勤仕中格別励精ノ事ニ依り晒布二疋金百兩下賜

次々に引受けることになった任務に必要な知識を森が持合せていなかったことはいうまでもない。だが、仕事が主に調査研究である間はよかった。この時期の彼の手になるもっとも実のある仕事は、公議所法則案の起草であったろう。12月にはこの作業が終った。森はその第1条に、会議は律法を定むるをもつて第一要務とするとして、公議所を立法の府と規定した。法則案や公議所（明治2年3月7日開院）については語るべきことが多いが、すべて次稿に譲る。3月中に彼は公議所の議長の職務をとることになった。彼は英国留学中に、英国の合理的かつ人道的な法律制度の整備にふかい印象を受け、立法による国家の改良へのつよい志向を育てていた。森は公議所に五つの議案を提出した。その中注目すべきものとして「租税の議」と「刑罰はその一身に止まるべき議」、それに、「御国体の議につき問題4条」がある。3件とも、4月中に提出されたい。前の二つの議案は、会議には付議されなかったが、3案とも日本を近代国家たらしめるための、もっとも本質的な改革を目指すもので、森の見識が時人の水準をはるかに抜いていたことをよく示している。「租税の議」において彼は、公議所の公議を経ずに、新規の課税や定額の増減を禁ずべきことを提案した。国家の体制に関して、森の望むところは、封建の体制を廃して、中央集権の制を確立するにあった。そのことは明治2年1月に大久保に寄せた書簡の中で「今後皇国の大本を立るには、是非郡県の制度に改革し、藩々の政権速に一途に帰し、全国の権力を一手に握り、海外に應ぜざらんば皇国の維持、迫も六ヶ敷」とのべて、薩藩が、藩政奉還の先駆をなしうよう藩論の指導を望んでいるのである。彼の集権国家構想の中で、各府県にそれぞれ衆議院をおくとしながら、中央に国の議會を考えていないことは注目に値する。さらに私の注意をひくのは、廢藩を国家の存立の絶対要件であるとする堅い信念を有していながら、この提案が、現在の封建と郡県と相半ばしている状態をもし改めるとすれば、封建制をとるべきか、あるいは郡県制をとるべきか、又、その理否得失如何、また変更する場合、どう措置すれば、人情時勢に適當することが出来るかという、極めて客観的な問題の提起に止めていることである。

ここでは森は、決して急進の改革者ではなく、むしろ啓蒙家の趣きがあり、また政治家的成熟をも感じさせる。人情によって民度に応じた方向をさぐると共に、時勢の語の下に彼は客観的歴史的な時代の要求を考慮にいれるべきことを要請しているのである。

これだけ慎重であった森だが、「廢力」案、厳密には「官吏兵隊の外帯刀を廢するは随意たるべきこと」を提案して一時は政治的生命を絶たれるにいたった。これは、本質的には、国家体制の変化や近代的租税の原則の採用のような重大な問題ではない。しかも、これを鎖末の問題と感じたところに、森と一般の武士たちとの間に埋めようのない意識のギャップが

あった。これは生涯森にまといつて、森にも日本にも悲劇を齎した意識のギャップである。「御国体の議」については、きわめてラジカルな国体の変更構想にたいして224人中とにかくも41人の支持があった。しかるにこの「穏和な」帯刀を廃する自由を認めてはどうかという提案に対して、公議人全員が一致して反対した。のみならず森はその提案にたいして飽くまでも責任を追求されたのである。切腹を禁ずる提案が賛成3にたいして反対200人で否決されたこととともに、御一新時の武士の意識の態様を示して興味がふかい。

(註) 公議政治によっては、「国体」のラジカルな改革は到底可能ではなかった。だが、この問題が公議所の会議に附された直後に、まず版籍奉還が、さらに4年7月に廃藩置県が強行された。後者は薩長土から徴募された1万の親兵と薩長の実力が背景となって実現したのである。公議によって到底不可能な改革が、2,3の強藩の実力を背景に強行されたことは、その後の歴史の歩みに長く大きい影響を残すことになった。

森の廃刀提案は、実は廃藩、したがって武士が文武の常職を解かれる新しい体制の出現を前提としていた。新しい国家や社会の体制の中で、武士階級は自己をつくり変えなければならない。その必要を帯刀を捨てるという形に託しての提案であった。しかし一般の武士にとっては、藩の消滅することは抵抗しがたい事態ではあっても、自ら刀を捨てることは、許せなかったのである。この種の「人情」を理解出来ないところから、森は時々躓くのである。この傾向は生れつきのものであったろうが、同時に人情（しばしばそれは私情であり私愛である）の否定されたところに成立する愛を人間至高の価値とする新生社の教育が、この傾向を助長しているかもしれない。

森の廃刀案が公議所の会議に附議されたのは明治2年5月27日のことであつた。この議案を議長に提出したのは4月中のことだから1と月ばかりの間それは議長の手許にとめておかれたことになる。大久保利通は4月中に（おそらく議長からそれを示されて）この議案の内容を知って、森をきびしく戒めた。それに答えた森の手紙が残っている*。日附は5月2日である。全文を引いておく。

昨日御懇諭之帯刀一条ニ就而云々、其後尚再三熟考仕候処、真ニ明示之通ニ而、時之人情ニ詳ならず妄ニ相発し、今更後悔無益、実ニ慨歎之至ニ不堪候。以来之処も斯る為体ニ而ハ一身を誤るハ勿論、從而世害を醸スハ必然ニ而、誠ニ進退困窮、幸ひ此度ハ御懇情之垂被を以、悔悟之次第も不少、今後尚必死と反省も可仕覚悟ニハ候得共、御存之通性至而鈍にて一向ニ豪情を押し張り候癖有之、常々注意ハヒドク仕候得共、動すれハ心轡相弛ミ真ニ苦痛、如此一身サへも不取締之事ニ而ハ、また從而世ニ害を為ス少からず、之を思へハ即今日も依然職を奉する能ハス、サレハ不能ト申而退キ候而も誠に薄情怯弱ニ相似、殆ト帰着する処ヲ失シ大ニ窮苦罷在候得共是また学問上最意を用ベキ処かとも聊おもひ直し、苟ニ因循ながら今一応勉勵を尽し、セメテは世之邪魔と不相成丈ニハ

* 大久保家文書（大久保利謙「森有礼」による）

力行仕る覚悟ニ候付、其域ニ相達シ候迄ハ、何卒始終之父監御引立之程至願至望、先ハ右等懇願仕候まで、乍不遜以書中拜啓仕候也、不備

5月2日

森 金 之 丞

大久保 一 藏様

尚々御懇情之程深厚奉伏謝候

森の反省は、さし当りは「時の人情に詳ならずして妄に相発し」た軽卒な行為に向けられているが、真の問題はその根底にある「至鈍の性」にある。これは一身を誤るのみではない。彼の地位がそれを国害に結付けずにはいない。この事件による躓きは森を改めて自己再造という新生社以来の学本来の課題に立ち向わせることになった。

森は、はじめ日々の任務を遂行する過程の中で、この困難な課題に取り組む決意を堅めた。しかし5月27日にこの議案が会議に附議されたことでこの方針は捨てられねばならなくなった。

この事件の経過には一つ理解しにくい点がある。この議案の提出は4月中のことだが、制度寮撰修の肩書きがついているから、それは17日以前のことではない。大久保がこの議案について森に厳戒を加えたのはおそらくその内容が物議をかもしのおそれた議長が大久保にその処置を相談した結果であったろう。公議所に提出された議案はすべてが会議に付議されるわけではない。現に森の提出した重要な2案件はついに付議されずにおわっている。しかし廃刀案は議長のこの憂慮にもかかわらず5月末に会議に付された。森に取り下げる意志さえあれば、たとえ議案録に掲載された議案であっても、付議を控えることは議長の裁量で可能であった。これを思うと、森は大久保にたいして、必死反省を誓ったにも拘らず、それを取下げる意志はなかったと見る外はない。おそらく森は、為された事は為された事として敢てその結果を甘受しようとしたのであろう。そこから学問を出発させようというのが、彼の意志であったのであろう。6月20日附で彼は辞表を書いた。私はここに森のもっともハンブルで正直で美しくかつ剛毅な心情の吐露を見る。これは前にあげた沢井、野田の「留別の書」と読み合わせる必要がある。またこれから3年足らず経ってから書かれた駐米代理公使を辞任する際の辞表をも読み合わせる必要がある。6月20日の辞表の全文を引いておく。

辞表（明治2年6月20日）

臣某誠恐謹而奉至願候、臣去歳六月米国より帰航、同七月不図も外国官権判事之命を拝し、而後移任数度既に叙位之宣下をも辱ふし、微弱短才之身を以斯る重大之職任を蒙り候儀、実以畏縮之至に而、元より其任に不堪は申迄も無之候得共、何分国家多難之秋故、聊なりとも鴻恩に報度一念に而、更に不肖之身をも不顧、折角忘身勉勵仕来候。然処近来熟々既往之事を省察仕候に、是迄御為筋と存込尽力仕候儀も或は精神之不貫徹、或は考慮之謬違いたし候儀も許多有之、今更悔悟叩頭之至に不堪、殊に当今之職務は皆国家之大本に關涉いたし候重

(1) 森有礼文書、(木村匡、森先生伝、39—40頁)

(2) 木村の引用では英国となっている。

大之事柄、然るに右通未熟短才之身を以ては其任に不能堪のみならず、尚此上朝徳を損し候様之事有之候而は真に国家之大罪、最是迄之罪過も甚不軽、宜く死を以其罪を購ふべき筋にも有之候へ共、尚深考仕候へば是唯に世の害物と相成り更に報恩之寸志をも不遂相終候次第に而真に生涯之遺憾と存候。就而は此節非常出格之思食を以、官位共都而御免被仰付被下度、然れば、今一応四、五ケ年間必死と苦学仕り更に再び何なりとも身分似合之御奉公を仕り、専心前過を償ひ且報恩之素志をも相達候様仕度候間、何卒此儀速に御聞濟被成下度恐伏奉至願候 誠恐謹言

詳しい分析は省くが、私はこの辞表にかなり顕著な特色のあるのに注意をひかれる。そこには、非難された行為にたいして責任をとって身をひくという消極的な姿勢とはちがった、積極的な意志がある。それが何であれ、与えられる任務に堪える自分を養うために四、五年間必死苦学を許されることへの要請が、むしろこの辞表の核心をなしている。これを5月2日附の大久保宛の手紙と比べると、そこでは在職のままその苦学を決意していたのが、今は一切の職任から自由になることが必要という判断がある。相違は、状況に応じた「学問」の方法にかかわるもので、本来の学に向けられた意志は一貫して変らない。

彼は四、五ケ年の必死の苦学を通じて改めて「身分似合の場」での奉公を期している。それを通じて前過を償いもし、報恩の素志をも達したいとするのである。鹿児島に帰った森は英学塾を開いた。彼は入塾志願者の多すぎることに悩ま⁽¹⁾されながら、飽くまでも正直に素志を貫徹しようとしてつとめた。明治3年7月7日附の兄宛の手紙はこの間の消息をよくつたえている。

取掛の塾も願人過分に有之、実以て困却居申候。御承知通の性質故、折角遁避8、9年間なお学問も仕り了簡も固り為人も邪魔にならなだけやりつけ候上は、臣子の分だけは元より十分尽す事に候。

その期間は八、九年にのびたが、まさしく辞表通りの覚悟が表明されている。失脚を学問専念の機会にしようとする意志が明である。ここでの学問は世害をかます根源を己れの中に断つことを目指している。それは新生社風の自己再造の事業にほかならない。そしてこの時期においても森が人間再生への志向をすてていなかったことには証拠がある。彼が東京を捨てて帰郷する途次、長崎から名和道一にかき送った手紙⁽²⁾（明治2年7月9日附）がそれである。これも全文を引いておく。

其後如何ト朝暮煩念之至ニ不堪、弧客も雙路之苦情散々、御憐察下さるへし。東京発足之初ハ美貴之賜物誠ニ遠路迄之御見送誠ニ恐入候。其日ハ定刻揚錨海路平穩、去ル6日当港着、今四、五日滞留帰家之積ニ御座候。御賢息君も甚御壯明御勉強、折田等も案外戒守嬉敷事ニ候。ハリス之事当地ニ而ハ一層紛云実ニ凡情之悲サ歎息之至ニ不堪。嗚呼何日か天人等（を）して再生之城ニ至らしむるやト悲慟之余り黙祈も仕候。乍去是も已ニ

(1) 原田実氏所蔵、写真（森有礼全集、第2巻）

(2) 片野一郎氏蔵（森有礼全集、第2巻）

一身之責を忘れ候事故、更に苦慮を増シ候。御笑察下さるべし。尚細書を不日後便より
 拝呈すべし。任便宜倉卒寸信を寄ス

木村匡は『森先生伝』の中で、森が鮫島やこの宛名人の名和と共に、当時の地に墜ちた道
 義の挽回を策して「公暇あれば三人相提携して道德論を談ずるを楽しみとせり」、と述べてい
 る。だがこの手紙は、この三人の間には単に道德論を談ずるを楽しむに止らない結合が存し
 たことを示唆するのである。

ハリスの^(註)ことが此の土地でも物議を醸したという以上、東京でもその事があったにちが
 ない。これは彼等の手でハリスの名に結びつく運動がすすめられていたことを思わせる。森
 は長崎でもハリスについて語ったのかもしれない。折田は木村匡『森先生伝』のための資料
 提供者の一人、折田彦市⁽²⁾であろう。私はそれ以上この人について知るところはないのだが、
 彼も亦森、鮫島等の運動の同志の一人であったのであろう。「折田等も戒守云々」という語
 はこの事を暗示する。この運動が人間再生を目指すハリスの教に結付いたものであったこと
 は、この手紙の文面によって殆んど疑う余地なく証明されると私には思われる（追記参照）。

(註) ハリスという名は珍しい名ではない。長崎勤務の米国領事にも Howard Harris がいた。彼も
 ラトガース大学出身（1873年組）だが、その長崎在勤は1884—85年の間である。「ハリスの事当地に
 ては一層紛云」という語につづいて、人間の凡情を嘆いては直ちに他人を責める自己を反省し、さら
 に「嗚呼何れの日か天此人等をして再生の域に至らしむるや」と結んでいるのは、このハリスが疑も
 なく「新生社のハリス」であることを示すものである。

森は四、五ケ年の必死苦学を誓って、鹿児島に帰った。彼はここでさらに八、九年の「遁避」
 再学の志を堅めた。ここでしばらく、彼は自己再造を志向して学問三昧の境涯を自己に課
 したのである。だがこの生活は意外に早く中断を余儀なくされた。森は鮫島とともに明治政府
 が派遣する最初の在外使臣として起用されたのである。明治3年10月6日に東京に着いた森
 は、鮫島方に寓居、11日には鮫島名和とともに、墨田の秋をたのしんでいる。彼は米国に赴
 任する際、従者という名儀で仙台の新井常之進（奥達）を伴った。森ははじめからハリスに
 ついてキリスト教を学ばせるために、彼を米国につれていったのである。これは森とハリ
 スとの間に、心が通っていた一つの証しとなる。しかし新井について、また森とハリスの
 「再会」について語ることも次稿に譲らねばならない。

ここで私の考えておき度いことは、この起用によって、森の四、五ケ年の間必死苦学の誓はど
 うなったかの問題である。一切の職任から自由になった遁避の生活は、八、九年どころか一年余
 りで終止したがそれは、ただちに必死苦学の願いそのものが弊履のように捨てられたことを
 意味するものではない。事実アメリカの2年余りの生活は、疑もなくはげしい学習者の生活で
 あった。私は第二次アメリカ滞在は森の第二の Lehrjahre（修業時代）であったと見てよい

(1) 同書、42頁

(2) 「森先生伝」凡例2頁。

と考える。その学習のあとは、彼の在米中の3冊の編著、すなわち“Life and Resources in America” (1871), “Religious Freedom in Japan” (1872), “Education in Japan” (1873)に明かである。その学習が如何なるものであったかは、やはり次稿に譲るほかない。私が特に指摘しておきたいのは、前記三書中の最初の一書をのぞいて、それが森の公使辞任後に成ったものだということである。ある意味でこの二冊の本は、森の公使辞任とふかいかわりをもっていた。

(1)
 森代理公使の辞任については、前稿で、一応究明を試みた。若干補足を要する点もあるが、今はその余裕はない。彼が自らあげている辞任理由は、自分のような「不練の少爺物」をかくの如き枢機の重責に専任たらしめるのは「選用いまだその法を得たりと為すべからず」というにあった。Dimonのいわゆる *sinn of being young* の自覚が辞任の理由である。明治2年の森も「未熟短才」任に堪えずしてその地位に止ることは世害(国害)をもたらす故にゆるさるべきでないと考えて進退を決した。明治5年2月の森も、やはり同じような理由で辞任を決断した。相違は、少弁務使森には、外的には辞めなければならぬ理由は何一つなかったことである。それだけに、逆に、明治2年のそれをも含めて、森の出所進退の論理がそこで明確になる。森は正直に自己がその重任に堪えないことを感じている。ここでは森には現在の職務とは別に自己の本来服務すべき場が見えはじめていた。明治2年6月の彼は、四五ヶ年も必死苦学のうえ、何なりと身分似合いの奉公の場に復帰することを期していた。その「奉公の場」について二度目のアメリカの生活を通じて、次第に明確な確信が形づくられているのである。2年余りの決して長くない二度目のアメリカ滞在の間に、森はハリスの影響から次第に自由になる。もっとも彼がハリスの許で身につけたものは失われてしまうのではない。それは、長く森の中に生きつづける。それが何であったかは、今後の作業を通じて明になる筈である。第二の辞表を書いている時点の森は、はっきりと「日本の再生」あるいは国家の回復にたいする自己の責任を自覚している。それはしかし、もはやハリス的な神における人間の再生を通ずる道ではない。森の個人的、内生の中で、神が生きつづけていたかどうかは別として、この日本の再生の仕事の中でキリストの神によりたのむことは、森には許されなくなっている。彼は、社会が真に堅固であるためには、キリスト教の信仰とモラルを欠くことが出来ないと信じている(『日本における宗教の自由』)。しかし彼が自己に課している任務は「国民教育を組織することによってネーションの運命を形つくる」というものであった。この仕事の中で、彼がキリスト教に関してなしうることは、日本に宗教の自由を確立すること、それによってキリスト教にたいして道を開くことだけであった。

(2)
 森が公使辞任を決意したとき、彼は文部省に入ることを希望していたと私は推測した。この希望は実現を阻まれたが、彼はあくまでも辞意を貫こうとした。そして、「日本における宗

(1) 森有礼研究第一、森代理公使の辞任(東北大学教育学部研究年報第15集)

(2) 拙稿森有礼研究第一、森駐米代理公使の辞任、18頁

教の自由」を書き、「日本の教育」を編み終えて帰国した。彼は独自に「日本の国民教育を組織する」仕事に着手したのである。

彼は明治6年3月中旬か下旬の頃米国を離れ英国経由で帰国の途についた。英国を訪ねたのはハーバート・スペンサーに「日本の諸制度の再組織」について意見を求めるためであった。

彼の帰国は明治6年7月23日で、旧暦に直すと6月29日に当る。四五年間の苦学を誓って一切の職務を辞し、位記をも返上してから丁度4ケ年目であった。それはまさしく必死苦学と呼ぶにふさわしい学習の四年であった。森の第二次修業時代はこれで終る。しかし、学政家森が形成されるためには、なおかなり長期にわたる、第三次修業時代を必要とした。

エ ピ ロ ー グ

—吉田と森と鮫島—

野田、沢井と袂をわかって、まつ先に新生社を飛び出した永井は、1868年9月には杉浦、松村とともにラトガス大学の理科に入学した。だが永井はその年の12月にラトガス大学を退学してしまった。翌年7月末、彼はニューブランズウィックを去った。モンソンの近くにある Wilbrahm Academy に入学するためである。これはおそらく出来ればイエール大学で政治学を専攻するための用意であったろう。モンソンには同じく政治学志望の大原令之助(吉原重俊)がいた。彼は1869年9月にイエール大学の法学部に入学した。

当時永井は二つの悩みをもっていた。一つは1869年10月現在で、なお両三年は米国に止まって専門の学術を修めた上で帰国したいと思っているのに、国許からはしきりに帰国を求めてくることであった。彼は専門の学術を修めて帰ることこそ、国につくす所以であるとかたく信じている。だからこのままでは死んでも帰りたくないと考えている。もう一つは、帰国後のことで、政府に立って国の大事を負担する上に、キリスト教信仰が妨げになるだろうというおそれであった。1869年10月23日附、江藤藤介(?)宛書簡^{*}の中で永井は、

兄も知る通り 此道を真信する之徒即政府に在て大事之局を司るにあらずや。然るに我輩の此の信用(仰)をのみ御答メ被成時ニハ Justice の道如何相立可申哉と苦心罷在申候。

と書いている。永井は1871年2月森が着任する直前帰国の途についた。森にも専門の学術を修めたい希望がなかったわけではない。しかし彼は鮫島とともに、くりかへしのべたように、ハリスの勧めのままに、それが祖国への義務だと信じて帰国した。何が彼等をまちうけているかは何も知らなかったし、また抱負とよぶべきものもなかった。何を為すべきかの知とそれを為す力とは「彼」が与える(「日本の予言」)、と信じていたのである。だから彼等は、永井の悩みと、右顧左眎を知らなかった。

* 吉田文書、2463

(註) 森の「日記」明治3年12月19日(1871年2月8日)の項に、

今夜深更金山港(サンフランシスコ)より出帆大平海飛船同社のアメリカと名ケタル船ニ逢フ、永井五百介中浜万次郎等外三四名帰朝連其船ニ在シト見ヘ両氏ノ書状ヲ得タリ(下略)とある。

森のこの度の帰国は彼の公生活への第一歩であった。彼がこういう帰国をした人であることは、彼の人物と行動の理解に大切な事実だと私は考える。この初心を彼が生涯失わずに持ちつづけたとは、私も考えない。しかしかつてこういう帰国をした人であるという面目は、彼の生涯の終りまで変わらず持ちつづけられたのでなかったか。少くも両度の辞職の中には、この「初心」はまざまざと生きている。だが世間の人には森のこのような面影は全く知られていない。

森とともにプロクトンから帰国し、またともに最初の在外使臣として明治政府に起用された鮫島は、二度目のフランス公使在任中胸を病んでパリに客死した(1880年12月4日、37才)。遺体はモンマルトルの墓地に葬られた。次に引用する一文^{*}は、悲報をきいてロンドンから駆けつけた森が、生涯の心友鮫島をいたんでのべた告別の辞である。

Sameshima! Ever since you began your uses in this world righteousness has found you a most faithful servant. You worked hard and well thirty-seven years worthily spent. No more, O precious soul! no more, O noble labourer! no more, O bright star! still you live, still you work, still you shine in the bosoms of your friends. You know me well!

最初の一行に明かに新生社(the Use)の用語が見られる。鮫島は新生社にとって the truest hearted of our Japanese で、最後の息をひきとるまで、ハリスと the Use への忠誠を変えなかったといわれている人である。森はここでおそらく鮫島だけが知っている二人の過去を思出しているだけではない。現に彼の中に、鮫島だけが知っている沢山のものがあることを、誰に語ることも出来ない多くのものがあることを、思っていたのであろう。それがこの結びの言葉“You know me well.”を發せしめたと私には感じられるのである。—未完—

おわりに

本稿起草の目的は、森とキリスト教の関係、より厳密には森にとって、キリスト教は何であったかの疑問を解くことであった。しかしこれだけの紙幅を費しながら、ついに結論に至らず筆をおくことになった。結論を取り出すためには、二度目のアメリカで森の経験したものと、彼の編著の立入った吟味が必要である。しかし私は本稿で、森のキリスト教経験の基底をなすものはほぼ明かにすることが出来たので、この基礎の上に、次稿でこの複雑な問題について私なりの結論をつけたいと考えている。

* “The London and China Telegraph” 8 December, 1880, (Ivan Hall 氏提供)

終りに吉田清成文書を、自由に使用して下さった京都大学国史研究室にたいし、またその検索複写のため格別の労をおとり下さった同研究室の熱田公氏、及び種々の配慮を惜しまれなかった同大教育学部の本山幸彦氏にたいしふかく御礼を申し上げたい。

追 記

校正の進行中に Ivan Hall 氏から The Sun の記事全部（タイプで27頁）のコピーを贈られ一読することができた。日附は私の推定とちがって1869年の4月30日であった。したがって、森、鮫島の帰国後のことで、新生社に残っている日本人は長沢と野村の二人だけである。しかしインタビューが、一年前におこなわれたとしても、日本人の与えた印象は変らなかったであろう。

なおこの記事には、本論考の主題にとって重大なかかわりのある情報がふくまれていた。それは、帰国した「もっとも有力な日本人メンバー」からの最近の通信の一節への言及である。彼は、「国家の諸問題の検討と解決のための委員 Commissioner」をつとめている。詳しい考証は次の機会に譲るが、これが明治元年九月以来「議事体裁取調御用」を仰付けられていた森か鮫島を指すことは明らかである。この「彼」の手紙の中に

彼を通じて新生社の宗教と生活に関心を持つにいたった日本人の大きい集団 (a large company) が、そこでキリスト教について学び、キリストの教にしたがって日々を生きるために、エリイ湖岸に移住する用意をすすめている。

ことが記されていたというのである。日本側にこれを裏付ける資料が見出されない間、この情報をそのまま鵜呑みにするわけにはゆかないが、森の名和道一宛書簡にてらしてこれを読むと、森や鮫島の推進していた道義挽回の運動が、ハリスの教に結びつくものであったことはたしかで、それはまさしく世上に物議を醸すだけに反響があったと考えてよいであろう。